

地名研究会報

第25号

平成元年9月3日

鹿児島地名研究会

I. 第25回例会 平成元年6月3日(日) 於教職員互助組合会館

(出席者) 青柳俊二・池田信夫・内山恵一・小川亥三郎・唐鍊祐祥・桐野利彦・木場武則
浜崎盛雄・平田信芳・山口静也 (計10名)

II. 覧藩名勝考説会 P.79~P.83

(問題となった地名および事項) 須佐郡・長崎庄

浜崎 開聞岳の下に、瀬平(せびら)公園というのがあります。

平田 「せびら」ですか。

浜崎 はい。あそこは、岩が海に突き出ていて、それこそ通れなかった所。最近、岩を開いて通れるようにした。そこで、観音様が見つかり、背中に文字を彫り込んであるのがわかりました。(拓本を提示)。

平田 まあ、回して下さい。

浜崎 一部しか持って来ておりませんが、ここに須佐郡長崎庄とあるんです。

平田 長崎庄?

浜崎 「庄」というのは、まあ、長崎村という意味だろうと思いますが、そういう言葉が、その頃、これは元禄四年ですが、村に相当する言葉があったのだろうか。『旧跡帳』などは、長崎村になっています。次の質問と関連して、これを解釈旁々、いろいろ教えて頂きたいと思って持て来ました。「須佐郡」は間違いないと思いますが、「長崎庄」と読んでいいのか。どうでしょうか。

平田 かまわないんじゃないかな。

浜崎 長崎村なら『旧跡帳』や『村里改帳』などと合って来るんですけども。

平田 遠くから見れば判読し易いんじゃないの。黒板に書きながら読みましょうね。

奉造立觀音像一體意趣旨者須佐

郡長崎庄左簾通路巍巍岩畔

難整者憂曇緣約言而曇〇〇

鑿而為自道誠庶民欣喜郡縣而

善根者敬白雲○

元禄四年九月

平田 須佐郡長崎庄ですね。

浜崎 「庄」は、まあ「村」と言ったような意味に解釈していいのか。また、その頃――

平田 村という単位が庄園であった例もたくさんありますよ。村ごと庄園になる場合もあるわけですから。

浜崎 庄内とか院庄とか、相当古い言葉じゃないか。元禄四年頃まであったのか。長崎といえば、狭い崖の下なんです。

平田 これは何ですか。ヒダリエビラ(左簾)?

浜崎 それが、瀬平(せびら)の意味じゃないかと、見てるんですが。

平田 これが、セビラ?

浜崎 あの辺の人は、ヒダイビラノ瀬と呼んでいるそうです。だから、これは瀬平だろうと。

平田 その次は、何ですか?

浜崎 通路は巍巍たる岩畔。難の下が崩れていてよく判らんのですが、けわしくて通りにくい意味だ

ろうと。

平田 書きましょうか。

浜崎 書いてみて下さい。郷土史にそれを採りたいと思うのですけど。一字でも正しいのを書かにやいかんと、話が出るもんですから。

平田 「奉造立」

浜崎 はい。

平田 「観音一體」ですね。

浜崎 「観音像一體」、像がある。

平田 ああ「像」がある。誰か加勢してくれませんか。

浜崎 「一體、意趣、者」があります。

平田 「意趣」ですね。

浜崎 そして、「頑○」。これは、頑娃たろうと思うんですね。

平田 そしたら、ここに見えてるわけですね。

浜崎 それは「郡」です。いや「娃」は下の方。

平田 下にありますか?

浜崎 下の方に、ちょこっと。

平田 ああ、見えてるか。

浜崎 はい。

平田 「女」が見えてますね。そしたら、「娃」

浜崎 「郡、長崎」

平田 「郡、長崎庄」ですね。「左」

浜崎 「巻（エビラ）」

平田 「左巻（ヒダリエビラ）？」

浜崎 「ヒダイヒランセ」と、今は呼んでいます。

平田 「通路」

浜崎 「通路巍巍岩畔」、そこに「難」の字がありますけど、その辺が崩れています。

平田 誰か、これ（板書）を写しとて下さい。

浜崎 「難」の下は全然判りません。「征」にも似ています。「者」は、はっきりしている。

平田 「正」というツクリが見えますね。

浜崎 「者、憂」、その次がいわゆる「曇（アツ

カイ）じゃないかと思います。これは様。様でなく木ヘン。

平田 木ヘンですか？

浜崎 その次が判りません。「約言、而」、その次が「曇」にも似ているし、その次、三字ばかり判りません。それから、上の方は「鑿」じゃないか

平田 「鑿（ノミ）？」

浜崎 「鑿。ノミ・タガネ。」

平田 「鑿（サク）」は、こんな字ですよね。

浜崎 下の方が、金。

平田 はい。

浜崎 「而」に似てますが、「為」ではないか。そこに二つ、「目」という字か「白」という字か。

平田 「為」がありますね。

浜崎 「為」はある。

平田 「為自」

浜崎 「自」それから「道」と「誠」は？

平田 「道誠」

浜崎 あとは、「庶民」じゃないか。「庶民」という言葉があったんでしょうか。

平田 庶民はありますね。

浜崎 欣喜、躍雀。よろこぶ。

平田 はい、欣求。

浜崎 次がはっきりしません。なんとかなんとか「郡県」とある。

平田 はい、「郡県」ですね。

浜崎 「郡県」に「而」して。

平田 ちょっと、読めないな。

浜崎 それから「隨」じゃないか。三つばっかい判らんのがあります。最後のところは「善根」じゃないか。善い根。善根を施す者なり。

平田 「者なり」でしょうね。

浜崎 「敬白」のちょっと下の方に、「雲」という字がある。

平田 はい、「雲」があります。

浜崎 それで、雲岳という坊さんが大通寺におった。「雲」のつく坊さんは、その人しかいないのでそいじゃないか、と。こういうわけ。

平田 これは、元禄四年でしょう。

浜崎 元禄四年辛未九月。そこがはっきりしませんが、四年の下は。干支はそれだろう、と。辛未九月。ここで、三人ほど「曇」がおるんです。

平田 ははあ、「曇」の名前が出て来る。

浜崎 はい。樋渡伝左衛門・鮫島伊兵衛・長井市郎右衛門。それから、石工の安兵衛というのが。

平田 ああ、石工の名前も出て来ますか、大したものだな。

浜崎 それで問題は、この「庄」というもの。

平田 いいんじゃないですか。村全体が庄園であった時代もあって、それを村と云わずに「庄」と

III. 問題提起

地名「頑娃」について

浜崎盛雄

一応はっきりしているようですが、衣評督（エノコオリノカミ）・衣君（エノキミ）。『古事縁起』が、もしこの場所であるとすれば、「頑者水之称、娃者美女之義」と、出でる。しかし表を見ると「頑」が上方に出て来てる。つまり「衣」・「頑」・「江」は、並べた場合、どういう順に並べればいいのか。そういうことを、やってるわけです。

5番目に書いてある「頑」は、その発生についてのものです。7番目の「可愛」、めでるという意味で、これは重永さんの説。倭名類聚抄（930年）の「江乃」。927年（延喜式卷二十二、民部上）には既に「鉢姓」という字が出て来てる。そうすると「江」と「頑」とは同じ頃に出て来たんじゃないかという感じもするわけです。それから、川内の「可愛」の地だろうと云ったのも出て来てる。これも年代ははっきりしませんが、一応、8番目にあげて

あります。それから最後にあげましたが、中国の文献にも「鶴哥里」というのがある。

そうすると、「穎娃」という地名は、最初は「胆殖」であった。それが「衣」になった。それから、「穎」やら「江」やらに変化して、今の「穎娃」になったと、そういうことになるんですが、例の橋本説の甲類・乙類というのがあります。私はよく判りませんけれども、結局、昔は「衣」という国があった。これが、ア行の「衣」か、ヤ行の「江」か、あるいはワ行の「ゑ」か、その辺がわかりません。私が見付けた限りの漢字を並べてみます。ア行であるとすると、衣・愛・埃・可とか出て来る。乙類になると「延」が出て来るし、「江」も出て来る。そうすると、一番下に並べて書いてある穎・居・乃・胆殖、これらは甲類に入れればいいのか、ヤ行に入れるのか、あるいはワ行の「ゑ」なのか。これら四つの漢字の入れどころを、教えて頂きたいと思って出したわけです。

重永論文によると、927年は「穎娃」の字体で書いてある。しかも「姓」の方に「エ」の仮名が振っている。それから、1147年の文書には、こういう字「穎娃」が書いてある。1227年の文書は、ひっくりかえっていますが、これは写し間違いであって今の「穎娃」と違うのだろう。こういう字体(姓類)を書いてある。1267年の「江のこをり・えのこをり」とそれと、1325年には「ゑのこほり」。平仮名の場合は、いろいろ混って出て来てる。

その字に対する万葉集のような甲類・乙類という嚴格な時代もあれば、もうてげてげ、宛字のような時代も出て来るのではないかと思い、聞くんですけれども判りません。結局、どういう考え方で調べて行けばいいのか。『穎娃郷土史』には、地名は結局判らない、今後の研究に俟つと書いてあります。この際、新しく作るにあたって、一・二行でも何か進んだものを書かにゃいかんと、皆が張切っている

わけです。どうか、ひとつ、ご審議ください。

平田 さあ、どうしますかね。これは、

浜崎 問題は、この『開聞古事縁起』。これが、あんまり上の方に来ているんじゃないかと思うのですが。妥当なのは、どの辺に入れればいいのか。開聞神社に聞いてみましたが、ちょっと判らんとのことでした。8番の『国都沿革考』というのも年代が判りません。おかしいところは、「穎者水之称」の部分。

小川 「穎」は、どこに？

浜崎 一番下の方に。

小川 一番下？

浜崎 一番下に「穎」「居」「乃」「胆殖」を出している。これを、どっかにはめて欲しいのです。

平田 それはちょっと難しいな。まず、嫗國胆殖。これは前回も問題になりましたが、いわゆる薩摩国か。広島の方という説もあるわけです。

浜崎 岩波には、薩摩のことは全然書いてない。

平田 だから。

浜崎 しかし、この覺藩名勝考の方は嫗國というものを薩摩にもって来てある。

平田 神代の歴史は、天孫降臨というものを歴史的事実として解釈してるわけですから、全部、こっちに引っ張って来るわけですよ。江戸時代の学者が一生懸命そういうことを云ったんであって、そのまま探って来るのは難しい問題があるんじゃないですか。

浜崎 和歌山県の木国、これは良い材木が出ると云ったような一つの根拠がありますね。穎娃の場合も、「エ」とは一体どんなのか。水が一杯たまっておった、湿地かなんか知らんけど水気の多い所か、あるいは浅い海であったのが段々あがって来て陸地になった、という意味か。とにかく「衣の国ありき」で、「エ」の意味が判る方法はないか。

漢字から云えば、一応、原義には「穎者水之称」

とあります。これでずっと通して行けば、池田湖もありますし、鰐池もありますし、非常に水に富んだところでもあります。が、われわれに云わせると例のコラとシラスで、水とは縁がなかった。これは穎娃町に課せられた開発の課題なんです。今やっと池田湖の水を引いて、畑地灌漑が出来ている。こういう歴史的事実があるんで。

平田 穎娃町の人としては、地名を中心にその意味を考えるんでしょうが。

浜崎 「衣」は甲類、「江」は乙類。これが今の「穎娃」に結びつくのか、どうか。そういう難しいことを考えずに、「穎娃」があったんだ、と解釈するか。

平田 全然、別な話をしますが、鹿児島県の地名ですね、川内の可愛山がありますね。それは甲類なんですか。それから、串木野に酔之尾とかいう地名。これは「エノオ」。これは「エノヤマ」ですね。「エノオ」といえば、これは「エノオカ」と云った意味でしょうね。それから、これに近いものでは、霧島の方に栄之尾温泉という所もあるんじゃないですか。これも「エノオ」ですよね。酔之尾と同じような地名ですね。そうしたら、「エノオ」というのは、「エ」というのは、何か。鹿児島県だけでも三例あるわけですからね。これらとの比較も必要だと思うのです。『古事記』を思い出した場合、イザナギノミコトとイザナミノミコトが柱を回る話があります。出会った時に、「あなにえし、えおとこよ」と云う。「ああ、良い男。ハンサム=ボーイだ。」ということでしょうね。それに対して、イザナギが「えおとめよ。」と云う。まあ、いい乙女と答えた。「え」というのは「可愛い」とか「良い」とか「美しい」とか、そういう意味があるんじゃないですか。「えのこおり」というのは、まあ、良い場所だ、という単純な説明も可能。

浜崎 『古事記』には、穎者水之義、娃はいわ

ゆる美女の意、美人。穎娃は、稻の穂という意味もある、と。

平田 それは、漢字の「穎稻」で、この穎は稻穂でしょうね。穎稻という言葉があるわけですから。

浜崎 いいお米が穂って、美人の多い所と言うてしまつておけば、めでたしめでたしなんですけれども。もうちょっと突っ込んでわけが判らんどかいと思うし。

平田 その材料がたくさんあればですけどね。私は酔之尾とか可愛山とかいうのと比較した方がいいんじゃないかなと思いますよ。

浜崎 『国都沿革考』の方には、「日向国の可愛の地なるべし」と。また、字は「埃」と書くと。一説には、川内の「可愛」だろうと、二通り書いてあるわけですね。

平田 川内の可愛山も、やっぱり格好が良い処。川内川のそばにある「江の山」という意味じゃないでしょうか。どうですか、川内の方は。

山口 どうですかね。

平田 穎娃は難しいので、もっと時間をかける必要があるというか、後考に俟たにゃしょうがないんじゃないですか。

浜崎 サンズイの「江」にすると、衣君・衣評のいわゆる「衣」は甲類。甲類の「衣」から、稻の穂の「穎」に漢字が転化するのか、どうか。

平田 それは判らんのじゃないか。

浜崎 これは、橋本進吉博士のものを見て書いたのですが、この「穎」が出て来ないんですね。

平田 じゃー、この「穎」も甲類でしょう。

浜崎 甲類ですか。甲類であれば、「衣」がこれ(穎娃)になるということは云えますね。ところが水であるところの「江」は、乙類である。これは、「穎娃」の方につながるのか、どうも。

平田 どうも甲類・乙類というのは、勉強が足りないので判らないけれども。

小川 「頬」はですね、これは乙類じゃないでしょうか。この漢字は当て字。

浜崎 当て字でも、漢字でも、なんでも——

小川 漢字は、まあ、佳名をとれとの命令がでていますから、佳名二字を使用しなさい、と。

浜崎 はい、はい、はい。だから「娃」はそうでしょう。「頬」はもともと何であったのか。紀伊國の「キ」は、まあ、いわゆる材木。よく、木ヘンと云いますが、「頬」の場合は水であったのか、何であったのか、衣であったのか。

小川 私は水の方を考える。

浜崎 水?

小川 「江」でしょうから。

浜崎 サンズイの「江」? いわゆる乙類ですね。この乙類が、今のあの「頬」になるのか。

小川 あれはですね。橋本博士は乙類だと言うてます。

浜崎 乙類ですか。

小川 はい。

浜崎 「衣」から「頬」の方には行きますね。

小川 いや、これは?

浜崎 この表のどっちかに行く。上・下のこれに入れて欲しいと思ってるのですが。

小川 上・下のこれは?

浜崎 これは、どこに入れていいか判らんから、入れて下さいという意味なんですか。

小川 一番左のこれ(頬)は、乙類です。橋本進吉先生の説によれば。

浜崎 ああ、そうですか。あの、「乃」とか「居」とか、この「居」はどうですか。

小川 こんなのがあるんですか、「エイ」の当て字に。

浜崎 「江居」とあります。10番目に。

小川 10番目に?

浜崎 10番目、『古事記伝』の中には、「江居」

と書いてある例もあります。吉田東伍の地名辞典を引くと、そんなのが出て来る。だから、出て来る例を全部引っ張り出して全部並べてみようとの魂胆が働いています。

小川 「居」などは、どこからそんなのが出て来たのか判らん。頬娃という地名はね、鹿児島県にもう一つある。志布志町に頬娃郷というのが。

浜崎 やっぱり、この字を使いますか。

小川 はい、頬娃と書いてあります。

浜崎 頬娃園というのが、宮之城にもある。

小川 はあ?

浜崎 頬娃園というのが、宮之城にもある。

小川 そうですか。頬娃郷は。

浜崎 郷ですか?

小川 郷は郷土の「郷」を書いてある。

浜崎 えー。

平田 あれは、頬娃から移ったんじゃないですか。植民地みたいに。

小川 それでですね、あそこで調べて下さい。そこには、江口という小字がありますよ。

浜崎 頬娃に?

小川 ああ、頬娃郷にね。恐らくあれもやっぱり関係があるのじゃないか。

浜崎 頬娃のどこに? 江口というのは。

小川 はあ?

浜崎 頬娃のどこに?

小川 頬娃じゃない。志布志町に頬娃郷。郷は郡郷の郷。サト。

浜崎 は、はあ。サト。

小川 あそこに江口という地名があってですね、これなんかも考えると、やっぱり入江の「江」をとったのだろう。江口のそばは川崎と云ってます。

浜崎 川? 「玉の井」だということが『開闢古事記』に書いてあるんですね。

小川 『開闢古事記』という本は、江戸時代に

出来た本ですから、それをあてにしてはいけませんよ。あれは、瑞應院十六代のカイボウ(?)という坊さんが書いたものです。これを以って、どうこう云っても始まらない。

浜崎 しかし、頬者水之称だと書いてあるから。

小川 はあー。

浜崎 威者美女之義なりと。

小川 漢字は当て字だから、漢字をどうのこうのと云うのは、ちょっと、どうかと思いますね。

浜崎 ああ、そうですか。でも、橋本進吉の甲類・乙類が出て来るものだから。角川の地名辞典を執筆された先生方が、そういうことを言われるんですよ。

小川 はあー。

浜崎 「衣」から「頬」が出るはずがないとか云ったような。

小川 衣君。これは甲類になっているんですよ。

浜崎 そうです。それでですね。

小川 今の頬娃町が「胆殖」かどうかということは判らん。頬娃だというのは誤りだという説を出したのが、江平望先生。これが間違いだという説ですね、あの先生の説は。まあ、何となく頬娃郷にあたるような状況証拠はあるようですけれども。また、発音から行けばですね、これはちょっとどうかというところはある。

平田 もう一つ。漢字で書いた人たちが、甲類・乙類とそれを使い分けたかということですね。それは考えられないのじゃないですか。甲類・乙類を使い分けることは、当て字として、どんなものでも使うことを考えてもいいんじゃないでしょうかね。

小川 奈良時代までは、大体、甲類・乙類、分けてあるようですね。地名も大体分けておるように思います。

浜崎 左の方に線が引いてありますが、古事記が出来るのが712年。そして、衣評督の時代、日本書

紀が720年でしょう。万葉集は759年。年代はやっぱりこの時代だから、少なくとも漢字を二字にするような場合、一応の知識があったのではないか。

小川 奈良時代までは、大体、この——

平田 言語学者がそういう復元をするのであってですね、戦国時代・江戸時代にどういう発音をしたかというのは、録音が残っていないわけですからね。

小川 この表の9番目、「えのこをり」とありますね。

浜崎 はい。

小川 「えのこをり」「えのこほり」というようないふうにありますね。中世の仮名で書いたのが沢山残っていますが、中世の仮名遣いというものは、歴史的仮名遣いじゃなくて、つまり「えのこをり」の「を」というのは、ワ行になってますね。

浜崎 「を」であったり、「ほ」であったりしてますね。

小川 「ほ」が本当でそうね。「こほり」。中世の仮名遣いは、歴史的仮名遣いじゃないわけです。ですから、上の「こをり」、ワ行になってますけどこの通りにとっちゃいかんですね。

浜崎 なるほど。

小川 中世の仮名遣いは、統一性がない。それを以って、音便を以って誤りだとは云えない。

平田 なかなか、結論はつかないはずです。昔からもめて来てますから。これは打ち切りましょう。それで、浜崎さん、折角準備されたんですから、これを説明して下さいませんか。

浜崎 先生方の前で、説明するようなものでないのですが、折角書きましたので。これは、3番目の質問であります。教えて下さい。頬娃の歴史資料館に「字名称調」という明治二十四年に、村長に地主惣代が出した文書があるんです。しかも、それが、今やっぱり、生きております。税務課やら登記所あたりに生きておる。しかも、それが今、土地改

良で使われている。ずっと、土地台帳が変ったり字の場所までひっくり返ったり、合併になったりしとる。今のうちに少しでも昔の様子を残したいと思って、まあ、二・三年かかって、二千九百余りある字名を、一応、年寄の人の発音をもとにして、仮名をつけました。それを平田先生に差上げたら、六月は話題を提供せえということで、今日のこれになつたわけです。

仮名を付けたのは此処には配ってありませんが、その中に少しでも頬娃の昔が判るような、あるいは手掛かりになるようなものはないかと、頬娃の歴史を物語るようなものがないかということで調べました。一応、これはこの辺じゃないだろうかと思われるようなものを、それこそ独断と偏見で並べた、荒唐無稽な、そうでないのが多いと思いますけども。

左の方に、山とか嶽とか峯とか、岡・尾・段・峰・迫・谷・崩・ホキ・穴・落シと云ったように並べて、はめこんでみたわけです。一番最初に、矢筈嶽（やはすだけ）とあります。これは、（郡）とあります、郡地区の山で、番号のないのは、いわゆる字でなくて、地図上の呼び名です。矢筈嶽は『鹿児島県地誌』に、「その状、矢筈に似たり」と。矢の筈ですね、あれに似ると書いてありますから、案外その形からとて名付けたものに違いない。又の名を苔嶽（コケダケ）という、と云ったようなことが書いてあります。えーと、どっかに、矢筆（ヤンピッ）という字があるんです。これは、どこかに書いてあるんですけども、矢の筆。3ページの中世のところに、下の段の左に書いてあります。矢筆（郡 253）。この矢筆は、矢櫃ではないか。形から來たもの。矢筈が弓矢の筈で、矢筆は矢櫃から來たのだろう。そのそばに狩股迫という所がある。あるいは、そこにカイ又というのがある。これもやっぱり、矢の先を切り込んだ狩股の矢の形から來たのではないかと思います。

頬娃にも、城の他に、こういう地名があると思うので。まあ、私の推察です。岡の中に、茶屋岡とか茶屋というものが、相当あります。これはやはり旧道の跡で、例の巡見使が回つて来た時には、接待場所ということのようです。

それから、丸尾の「尾」。私がこれを書くについて参考にしたのは、鏡味先生の「地名の研究」の中に、小さな地名辞典というものが載っておりますね。あんなものを引っ張り出して適当に並べたということです。丸尾の「尾」などは、やっぱり峯とか岡とか、そういうところから來たのだろうということ思つて並べてあります。

段。台地とか山の頂きの平たくなつたような所と云つたように、頬娃にもそんな所があります。

峰。鳥越峰（トリゴエトウゲ）・荷辛峰（ニカラトウゲ）・木戸峰（キドトウゲ）・それから宇都越（ウトゴエ）。鳥越（トリゴエ）じゃなくて「トゴエ」と呼んでいるようです。

打越（ウッゴシ）。荒平嶽（アラヒラダケ）。越（コシ）。この「越」も、峰の一つではないか。矢越（ヤゴシ）・馬越（ウマゴエ）。

下の方に手向（タムケ）と書いてありますが、これは地図に手向山（タムキヤマ）と仮名が振つてあります。手向。ここに書いたのは、これも峰の一つと見たからです。今の池田湖トンネルのちょっと右、トンネルが出来る前、ここを通つたのではないか。大変な山で、現場を見てはおりませんけれども、どうも地図などを見ると、そんな気がするわけです。

鳥越（トゴエ）は、「戸越」と書いたものもあります。その次は、鯨ヶ元（クジラガモト）。これは新牧（シンマキ）という部落をご存知でしょうか。これは千貫平（センガンビラ）の下にある部落。そのそばに雪丸（ユキマル）という部落があります。山の中にある地名です。実は一昨日、小川先生

の「クシ」という論文を偶然頬娃町の図書館で発見しました。あれを見ると、全部、海岸ばたにある。「串木野」とか「久志」とか「串良」。私が興味を持ったのは、鯨ヶ元という地名もこれに近いということと、すぐそばに「魚菜（イオナ）」という地名のあること。標高 200m の山の中に、鯨ヶ元とか魚菜とか、海に関係の深い地名があるのが、どうも不思議です。写真を写したり、いろいろ土地の人間に聞いたりしてみるけれども、判らない。最後に辞典を引いたら、「クシはコシに通ずる」というのがありました。これならば、「峠」だ。串良やら串本やらも、それと一緒にだ。山にあるのはおかしいけれども、こう解釈する以外にない。そこを越えて行けば、千貫平に辿りつくんですね。小川先生、あとでご指導下さい。

迫。そこに狩股迫（カリマタザコ）というのが出て来ますが、さっき説明した通りです。「ハザマ」とか「小さな谷川」とか「湿田」とか「砂地」とかそういう所が「迫」になつてゐるようです。それから「谷」とか。

頬娃の場合、崩平（クエビラ）とか崩ヶ迫（クエガサコ）とか、白崩（シラクエ）水喰（ミックレ）土喰（ツチクレ）、これが非常に多い。これらは、やっぱり、シラス土壤から來たんじゃないかと思って見たんですが。下の方に、柿ノ尻とか柿木迫とか辰バミ（タッパン）。柿木（カキノキ）を載せたのは、熊本で全国の地名研究会があった時の資料を買って見ましたら、いわゆる崩壊地名とか危険地名とか、建設省出身の方が書かれた本があります。

（小川豊『災害と地名』・『災害と植物地名』山海堂、昭和61年）。それを見て、こういうことかも知れんなあと思って、あげたに過ぎないです。

ホキ。ホキは片仮名の場合、土ヘンに穴もあれば口ヘンに穴と書くのもあります。窪地や浸食のはげしい谷とか崖っぷちを、ホキと呼んでいます。それ

から「穴」という字も非常に多い。意味は判りませんが、ツキ穴・狸穴・風穴・穴田・小穴・穴下。鬼ノ穴というのもある。鬼ノロや鬼門平は、岩が突き出た、恐ろしかよな、そんな感じの所です。

崖には、ダッガ迫とか、座頭落シとか、そういうのもあります。瀬平（セビラ）はさっき出て来ました。これは、左の巖（エビラ）から來たものです。

コラ・シラス。コラケ子（コラガネ）。片仮名で書いてありますが、古老に聞きますと、ここは火花が散るぐらい固い、いわゆるコラの畑やで「コラケ子」と付いたとよ、と。こういう説明です。そうすると、亀ク（カメンク）とか亀甲（カメコウ）・幸良ケ尾（コラガオ）も、そいじゃらせんかと。これは、まあ、想像であげてあります。それから、砂取岡（スナトイオカ）とか白崩（シラクエ）。これはシラス関係の地名だらうということです。

窪・宇都。これはどこにでもある地名です。

原。これも多い地名です。郷原（ゴウバイ）とか辰原（タッバイ）とか。春向（ハイムツ）。Aコードのある所は、春向（ハルムキ）という地名になります。これは春夏の春じゃなくて、やはり大原の原（ハリ）、開墾の墾（ハリ）じゃろうと思います。大口市に行きましたら、大口にも春村（ハルムラ）というのがありました。原村。あれと同じだらうと思います。

平（ヒラ）。「ヒラ」と読まないで、「デラ」と云うんだとはっきり教える人もおります。ヒラとデラとは、現地を見てないのですが、同じなのか、方言で違うのか。教えて頂きたいと思います。

一番下の段の左の方に、虫ヘンに元という字を書いて「蛭」。何と読むんだろうと、10人ぐらいに聞いたら、結局、これは蛭平（マムシビラ）だ、と。まあ、マムシが出そうな場所ではあるんですが、珍しい地名として、そこにあげておきます。

それから、なんとかの頭（カシタ）。頭は、谷ノ

口（タニノクチ）・井手ノ元（イデノモト）・滝ノ元（タッノモト）・棧敷ノ元（サシッノモト）。元（モト）は、入口たという解釈をしております。田ノ尻（タノシイ）。元とか尻とか、口とか鼻。この鼻で、中次ハナ（ナカシハナ）。この中次（ナカシ）の意味。これは、いわゆる「砂地の洲」じゃないか。実はこの中次のそばに、「次下（シカ）」という部落があります。これも小川先生の論文に出ておりますが、川口の砂が集って出来たところだろうということです。「シカの部落」のちょっと上方、昔は入江がそこまで入り込んでおっただらうと思う所に、中次ハナがあります。今は陸地になって鉄道が走っておるんですが、このシカの次が中次ハナになるんじゃないかというような感じしております。あとで教えて下さい。

それから、川。水成川（ミナレガワ）とか綿打川（ワタウッゴ）とか。それから、成（ナリ）という部落もあります。これは、曾木の惣みたいな、あれほどの勇壮なのじゃないんですけど、まあ、ちょっとした滝。水成川にしても、成にしても、そういうところから来たんじゃないかと思います。

鶴留（ツルドメ）とか蘭田（イダ）とかいうのは地形から見ると、やっぱり泥田で、ひょっとしたら鶴でも来たんじゃないかなと思われるような場所です。それから、川口（カワグチ）。

下の方に、雨包（アマツツミ）をあげておきましたが、これは別府と牧之内。牧之内は、頑娃高校の敷地の所が「雨包」。県下では、地名辞典を見ると16ぐらいあります。実は、私が地名に興味を持ったのがこの「雨包」で、往復はがきを20枚ばかり、すーっと配りました。返事が来たのが半分あるかないかですが、えー、それを見ますと、雨包は必ず回りの方に構がずーっとあるんですね。現在は沼になって水源になっている所とか、あるいは排水池みたいに回りをずーっと水が流れているとか。地図

をもらったり、写真をもらったり、大変お世話になりましたことがあります。

染水流（クワヅイ）・流合渡（ナガレエワタシ）・水流（ツル）。こんなのが沢山あります。川に関係あるのが、中洲（ナカス）、カタス。「カタス」この片仮名の地名は、海岸からまあ1km、近く陸にあがった所です。片仮名で意味が判らない。コラに似た固い土地じゃなかろうかと思うと、そうじゃない。「カ」に濁りを打ってみて、ガタス（潟洲）になると、いわゆる海岸地名になって来るわけです。その隣に塩入（シオイリ）という字があります。左手の方には中之島という字もあります。ちょっとあがると、唐船ヶ丘（トウセンガオカ）という所がある。まあ、昔の海岸線だろうと思うわけです。そこに、中洲（ナカス）とか、次下（シカ）という地名が出て来ます。高江（タカエ）というのもあります。

渡（ワタリ）関係のある渡り口（ワタイグッ）とか渡瀬（ワタゼ）とか、飛渡（トッバタイ）というのが出て来ます。それから鹿児渡瀬（カゴワタゼ）。「カゴワタゼ」には字が違うのがもう一つあり（鹿籠渡瀬）あげておきました。橋渡瀬（タブワタゼ）、喜入渡瀬（キイレワタゼ）、雜商渡瀬（ザッショワタゼ）、石飛口（イシトックッ）というがある。

「渡」だけのもあります。樺木渡（スルキワタリ）、櫟木渡（タンノキワタリ）、樺木渡（カシキワタリ）、尾曲（オマガイ）。これは石垣川の上流の方の曲った地形から来たのじゃないかと思われます。この「渡瀬」という地名は、昔の旧道の跡に大抵出て来るようにです。

海岸の方に行くと、浦が出て来ますか、たとえば垣瀬（カッセ）。これは意味がよく判りませんけれども、防風垣になるような木の生えた瀬（？）、何かそんなところから名付けられたのじゃないかなあ

と考えながら書きました。（牡蠣がよく取れる瀬と考えたら如何？——編集子）

頑娃の田園地帯の方には、用水関係の地名が相当出て来ます。水元前（ミッモトマエ）、貫ノ口（ヌッノクッ）、貫口（ヌッグッ）、入口（イレグッ）、佃落ノ上（オトシノウエ）とか御領水戸（スド）、箱立（ハコデ）。箱立と書いて「ハコテ」と読んだり、手を書いたのがあったり、木へんの「箱樋」もある。これが正しいのじゃないかと思います。石樋（イシデ）というのも出て来ます。

水源地であろうと思われるものを、そこにあげておきました。出水（デミッ）、水洗（ミッダレ）。一番下のところに、豆漬場（マメツケバ）・オヤシツケ場。これは他所の町村にも相当あるようですが一体どういう場所だろうか。川のそばにあるようだけど、いわゆるモヤシを作った共同作業場みたいなものかなあと思いながら書いておりますが、他所の町はどうでしょうか。

これは沈垂（チンタラ）と読みます。これも珍しい名前ですが、笠沙にも「チンタラ水」というのが出て来ます。「沈垂」は、古老の話によると、昔は「夏のぬっか時なんだ、水がたらんたらんと垂れて芋ガラの葉で、こうやって集めて飲むと、冷たくてわりとうまかもんじゃった」と。チンタラ、チンタラ流れるから「チンタラ」と付けたのかも知れませんが、字はそう書いてあるようです。

「城」関係。陳ノ山（ジンノヤマ）、陳ノ脇（ジンノワキ）。これは陳（チン）になっていますけどやはり「陣（ジン）」でしょう。これは城内（ジョナイ）と読みます。城山本屋敷（シロヤマモトヤシツ）というのもあります。鷹山（タカヤマ）、これも鷹を飼うたりしてた山ではないかと思います。

峰では、木戸峰（キドトウゲ）。堀ノ内（ホリノウチ）、城戸口（キドグチ）、鎮ノ迫（チノサコ）、鳥ヶ城（トイガショウ）。鳥ヶ城は、今度、

文化課の方で発掘いたします。長城（ヘゴンジョウ）。茶屋場・茶屋。これはさっき申しあげました。矢筆（ヤンビツ）、木戸も城戸も、さっき申しあげたような解釈でいいか。

「田」が付くのもいろいろありますが、麦生田（ムギウダ）というのが頑娃にもあるんです。辞典を引くと、二毛作が出来る田と書いたのもありますし、段丘で砂がむき出しになった所だという説もあります。葉根田（ハネダ）は、いわゆる「ハニダ（埴田）」。羽田空港の羽田も同類。丸田（マルタ）などは、輪田（和田）に通ずる。田の形、形状から来たんだという辞典の説明もあるようです。

正ブ田（ショウブタ）。これは一度申しあげたと思うのですが、字はこの正ブ田であったり、いわゆる菖蒲が生えた所もあるような気がします。辞典を引きますと、「ショウブ」というのは、1反の13、100歩だらいうのが一つ、これは地積の単位。いま一つは植物地名、すなわち菖蒲に由来する、と。先日、指宿の山の中に行きましたが、今は杉の山になっておりますが野生の菖蒲がいっぱい生えている所があるんですね。尋ねると、昔は田圃だったと。今は水が不便で杉山にしている、と。地籍調査に行ったら菖蒲があった。あ、こいやな、と。昔はこげな所に田圃を作ったたいな、と。菖蒲は現に昔ながらに生えていると、こう思うことでした。えーまあ、感想だけ。

それから、黒仁田（クロニタ）、犬田（インタ）とか弓牟田（ユンムタ）、黄番田（コバンタ）。黄番田は、やっぱり、切替畠とか焼畠とか小さな畠、山の間の小平地と云ったような辞典の解釈にもとづいてあげておきました。

それから、畠。島畠（シマバタケ）、七反畠（シッタンバタケ）とか一里畠（イチリバタケ）。留畠（トメバタ）、牛畠（ウシバタ）、竹畠（タケバタ）ということがあります。意味は判りません。それ

と、頬娃に多いのは、同じ名前が多いということです。

園。六つしか書いてありませんが、御領の方には十ばかりあります。大体、馬渡川（マワタリカワ）の流域にあるようですけども、土地の人に言わせると、これは神様にあげる何かを作る所じゃったというような話もあります。よく判りません。非常に「園」という地名が多い。

山には、飛山（トッヤマ）、建山（タッチャマ）、示山（シメシヤマ）、小ボシ山（コボシヤマ）、悪地山（アクチヤマ）。これは利山（トジヤマ）と読むんですが、別府の89。これは辞典を引きますと、何か人が死んだとか、タブーになっている山とかの意味やら、不吉な山という意味やら、殿様が鷹を飼うたりして伐採を禁止した山じゃないか、とか。留山（トメヤマ）と同じという話も聞いております。高ノ巣（タガラス）。これは「タガラス」というふうに聞きました。これも鷹を飼うたり、留山（トメヤマ）、御禁制の山じゃないかなと思うわけです。草場（クサバ）、宝代山野（ホウダイサンヤ）。

頬娃には牧場が多いわけですが、不思議なのは、ここに仮名が付けてありますが、クサカンムリに馬と書いてあります。これが薦（オロ）たというわけです。ところが、5万分1図開聞には、クサカンムリに立という字、「莖」が書いてある。こっちの方が定説のような気がしますが、同じ頬娃町でも、開聞町も頬娃郷だったですから、同じ頬娃町の役場に出すのに、開聞町の方はこの「莖」を出している。頬娃の方には五つか六つあるんです。この「薦（オロ）」が。全部、この「莖」で書いてあるんです。それで、何か規模が違うとか、何か構造が違うのか知りませんが、まあ、字はこうなっている。読むのは「オロ」だ、と聞きました。これを教えて下さい。

牧に関係がありそうなので、二重堀（フタエボ

リ）、今の5万分1図にちゃんと表われております。馬士（マサブレ）。ウマサブレ。『鹿児島県地誌』を見ると、牧司（ボクシ）というのが出て来ます。牧場の司というのか。あれに類した人たちの何か土地だったのかなあと思いますが、よく判りません。馬ウツロ（ウマウツロ）というのもありますか、これも意味がよく判りません。ハナフタキノ下とか上というのがあります。避病舍の跡よと教えられましたが、これはやっぱり馬を解体したか、死んだ後どうかしたか、そう云った所じゃないかと思っております。

その次に、頬娃は田舎ですので、焼畠で難儀をした跡だと思われるような所が沢山あります。山啼（ヤマナキ）、片仮名で書いたりします。山開（ヤマナン）、開くと書いて「ナン」。「ヤマビラキ」と読む人もありますが、「ヤマナン」。それから、山雍（ヤマナギ）。下山雍（シモヤマナン）、切雍山（キナンヤマ）、無原内（ナッバラウツ）、ナッバラ。これも、やっぱり、雍原（ナギハラ）じゃないでしょうか。焼切（ヤッギイ）、ナキ野（ナキノ）、下ナギ原（シモナギノハラ）、ナギノバイ。これらも、焼畠の跡じゃないかと書いてあります。

荒地として、木場（コバ）とか切畠（キリバタ）それから、意味は判りませんが、こいじゃっかもと思う毛込（ケコン）。開込、これもケコン。貝込（ケコン）もありますが、これはどう考えればいいのですか。それから、開墾地とはっきりしてるのであったり、カリ込（カリコミ）があったり。

大野嶽神社がある所は、大野岳焼野（オオノダケヤケノ）という小字の所です。仕明（シアケ）という字もあります。一作畠（イッサクバタケ）がある。荒平（アラヒラ）、それから原（バイ）というのがあります。荒木（アラキ）。カラミ。これも片仮名でよく判りませんけど、あれは棒杭を打ち込んで、崩れた土手を竹で囲む。あれも「カラミ」

と云います。「深ヨケ」というのも意味が判りません。

持留（モッドメ）とか持（モッ）という字があります。まあ、門割制から来たと思われるものをそこにすっとあげました。横作と書いて「ヨンゴツクイ」。これが意味が判らん。割当てをして端が残った所じゃないかという説もあります。意味が判らんのは瀬戸作（セツツクイ）鈴子作（スズコツクイ）とか代官作（ダイカンツクイ）。これは代官に関係があるのかなあと思っているのですけれども。それから、三斗蒔（サンドマキ）。これは面積を表わしております。

そこに高札と書いて「コサツ」と読むのがある。これは頬娃にある。御高札場（ゴコウサッバ）跡にこれが「高札」という形で残っております。同じ高札という字で、これも「コサツ」やっどがと云うと、うんにゃこれは「タカフダ」じゃっ、と。そうしてみると、あの辺は御高札場はなかったのかなあと。こっちが、あんまり専門家のようなことを云うと、いかんのですけれども、「コサツ」だと思うと云うと、これは「タカフダ」だと云う。そうすると意味は別になって来ると思われる。

その下の方にある持留（モッドメ）、持頭（モッガシタ）。毛頭と書いて「モッ」と読むんだと云うて聞かんもんですから書いておきましたが、これも持留（モッドメ）・持（モッ）につながるのか、つながらないのか。苔嶽持留（コゲダケモッドメ）。苔嶽はさっき出て来ました矢苦嶽のことですが、あの辺では苔嶽持留とも云ってるようです。それから外仕明（ソトシアケ）とか文三浮（ブンゾウウキ）。この「浮」は、浮免の浮であるのかどうか判りません。

蔵道（クラミッ）とか「お蔵ん坂」（オクランサカ）。隠居（インキョ）。これは庄屋などが隠居して土地をもらったという話がありますが、あれに

なるのかどうか。それから鎮守免（チンジュメン）というのがあります。「浮」があるかと思うと、鎮守免。これは鎮守様の鎮守、免は免許の免。これは課役を免かれた、あの土地であるのかどうか。

それから、お寺と関係のあるようなものが、沢山出て来ております。御領84にあります「ガラ堂」なんてのは墓石なんかも出て来たということです。そこに鎮守免も書いてありますね。

それで判らないのは、片仮名で書いてあるガイ塚（ガイヅカ）だの、トン塚（トンヅカ）だの、トンコ塚（トンコヅカ）だの。この他に『旧跡帳』や『村里改帳』などを見ると、「小さな松を塚とす」という塚が出て来たり、蔵入塚（クロウドツカ）とか塚山（ツカヤマ）とか、京塚岳（キヨウノツカダケ）とか。「塚」というのが非常に多い。神様も何もおらんような所にも、出て来るんですが。

それから、なんとか供養。上丹七供養（カミタンシチクヨウ）・山中（ヤマナカ）供養。寺松（テラマツ）などは、はっきり云って、寺のそばにある。こういうのが出て来ましたので並べておきました。

「街道」だろうと思うのに、外道口（ケドグチ）と書いたり海道（カイドウ）と書いたりするのが色々あります。茶屋小路（チャヤンシユツ）というのは、はっきり云って、殿様が休んだ所じゃないでしょうか。茶屋場（チャヤバ）。それから、花立（ハナタテ）、柴立（シバタテ）、柴神（シバガミ）とか柴山（シバヤマ）というのも出て来ます。

植物名たろうと思われるのは、グンノキ。榎渡瀬（タブノワタセ）。「榎木」、これは「モノノキ」されました。それから、榎木（ウメノキ）。桜（サクラ）は、そのものずばりです。桜向（サクラムケ）、桜口（サクラグッ）。タラの木。涼松（スズンマツ）。街道松（ケドマツ）の所は、大抵「スズンマツ」というのが多いようです。麻田（アサダ）。イラガ迫。これも意味が判りません。トゲ

の多い迫であるのか。男伊ノ元（オトコハゼノモト）・伊ノ山（ハゼノヤマ）。頬娃・開聞は、伊の木を奨励されて、百姓が嫌がったり難儀をした跡があります。現在、現物はなくて僅かに地名だけが残っております。伊には男伊もあるけれど、実がなるのは女伊（オナゴハゼ）で、勝手に木は切られなかったというような悲しい歴史が残っています。

下の方に睡氣（ネムルキ）と書いてありますが、御領には睡氣とか人殺（ヒトゴロシ）とか、非常に珍しい地名の所があります。「ネムル」。何故こけんなったのか。地割をする時、役人がけだれて眠くなつて、「ネムルキ」になったという話もありますが、別府の方に「根古木」と書いて同じように「ネブルキ」と読むのがあります。そうすると、「ネブルキ」と「ネムルキ」とは一緒だろうと思ひます。結局、これは「ネムノキ」から来たのではないでしょうか。ピンク色の花の咲く、非常に目立つ木で皇太后陛下の歌で喜入岬の方に「ネムノキ」を植えたことが出ておりますね。どうもそれではないか。そうであれば、話はわかる。

根古城（ネコゾウ）という地名が頬娃にはあります。それは土分の出先じゃないかという説もありますが、根古城は御領の方で、この根古は別府地区ですので、やっぱり植物地名じゃないかと思います。

それから渡来地として、唐船ヶ尾（トウセンガオ）・唐船ヶ岡（トウセンガオカ）とかあります。孫次郎向（マゴジロウムカエ）というのは唐船ではないのですけど、実は『三国名勝図会』の叢談という欄に、頬娃郷民原に、これは「ミンバイ」と読むのだろうと思う。民原に張昂が来た、とある。日本名を孫次郎という。字名に「孫次郎」というのがあるもんですから、まぁ渡来地として一応あげてみたわけです。

産業関係で、塩取口（シオトイグチ）・塩入（シ

オイリ）。馬鹿海岸の焼き塩に由来するもの。伊場（ハセバ）は、さっき云ったようなことです。加治園（カジソン）。この加治は、鍛冶屋の「カジ」なんですが、字はこんなのが書いてあります。紺屋園（クヤソン）。紺屋（クヤ）という字もあります。それから、染園（ソメゾン）。それから、綿打川（ワタッコ）。これが、意味がよく判りません。石垣川のことを綿打川という。地名辞典なんかによると、川の曲りくねったところの内側が「ワタウチ」たという。それから、原口虎雄先生の論文の中に、伊作の役職の中に「綿打弦掛」というのがあつた。辞典を引いてみると、綿を打つ時には鯨のヒゲで弓の矢の羽根みたいなので、とんとんとやって綿をほくした、と。こういうのがあるので、ほんとに綿をほぐした場合とか、川の曲りくねった内側であるのか、判りませんが、まぁ、この字というよう見方をしつります。

下の方にクエッシュョンマークをしてあるのが全然手掛かりがないものです。風呂之元（フロノモト）は、ムロだとか、ムレだとか、風呂などに関係がある洞窟、神様のいる所、と云つたようなことが、地名辞典に書いてあります。「一氏」と書いてありますが、これは「ヒトツシ」と、普通云つております。珍しい人の名前（苗字）です。部落の名前でもあります。そうかと思うと、氏無シ（ウジナシ）というのもある。同じ牧之内に、こういう字もあります。どういう意味か判らない。御領に四月金（シガツカネ）。東四月金・西四月金。盆小迫（ボンコザコ）とか津伏（ツブシ）とか、アシカイ。錢亀（ゼンガメ）。神亀（カンガメ）、上札後（カンサッポ）。魚菜（イオナ）。これがさっき云つた鯨ヶ元のあれ。鼻面（ハナヂュラ）とかシャケロ（シャケグッ）とか足加イ（アシカイ）。

「掛」というのは多いのです。笠掛（カサガケ）・クツ掛（クツガケ）・尻掛（シイカケ）・塩掛松

（シオカケマツ）・スル掛（スルカケ）・瓶掛（ビンカケ）。「塩掛」は、何か神様がいて、田に虫がわく時に祭りに行ったということを憶えていると教えてくれた人がいた。まぁ、そういうことで、色々教えて頂きたいと思います。それは、お前の荒唐無稽な説だ、と思うようなものは全部削って下さい。また、勉強します。

（質疑応答）

平田 はい、ご苦労様でした。あんまり時間はありませんが、質問なり、この地名はこう考えた方が良いというようなのがありましたら出して下さい

浜崎 鯨ヶ元（クジラガモト）は、どうでしょうか。山の中で解釈しようがないのですが、魚菜（イオナ）と一緒に。「越える」ことには通ずるのです。海からは確かに離れているんです。海はよく見えます。鯨の番でもした所かな。鯨が通つたら、ノロシをあげたら浜の連中は判つたろうなと思うような場所ではあります。

平田 えーと、私が気付いたことを。氏無（ウジナシ）ですけど。

浜崎 最後の？

平田 最後の方ですね。頭無（カシタナシ）それから内無（ウチナシ）、尻無（シリナシ・シナシ）など、こういう地名は多い。氏無は内無と考えて集めたらいいのじゃないでしょうか。意味は、頭が無いのが「カシタナシ」、尻の無いのが「シナシ」。

それから、足加イ（アシカイ）。これは葦刈（アシカリ）ですよ。えーと、足柄山の「アシガラ」とですね。

浜崎 カリは？

平田 刈り取る。

浜崎 刈り取る。いつか出て来ましたね。

平田 いや、未だ話していませんが、足柄山のアシガラは「葦河原」ですね。足柄は「葦河原」と

考えるべきだと思っています。鹿児島県では「アシガラ」よりも「アシカリ」という地名の方が多い。と言うのは、支配者側から見れば、葦が生えている河原でしょうけれども、働く側から見れば葦刈りの作業場。だから、「アシカリ」という地名は葦刈りの場だと思うのですけど。

錢亀（ゼニガメ）は、錢瓶です。沢山あります。

浜崎 これの場所が、山の——。

平田 千貴平（センガンビラ）も、錢瓶からの変化だと思うのですがね。

浜崎 矢筈嶽の下で、何か田圃でも出来るような貴重な場所じゃなかったか、と言うのですけど。田圃じゃね——。

平田 いやいや。錢がつまつた瓶が出て来たという信仰があるわけでしょう。

浜崎 ははあ。

平田 錢の神様とか、錢亀とかですね。「ゼニガメ」は、県下に二十数ヶ所ありますよ。

浜崎 えー、そうですか。

平田 津伏（ツブシ）とは、何ですか。2行目の最初。

浜崎 字も、こういうのが書いてある。知覧にもある。津なので海岸にあるかと思ったら、かなり上にありますね。まぁ、7～800メートルぐらい。最初は何か海岸のいわゆる浦とか津というのに関係があるのかと思ったけど、関係がない。

平田 それから、最初の風呂ですね。これは郡山の巡査の記録に書いておきましたけど。郡山でも、風呂という所に行きました。五右衛門風呂みたいな地形地名で、暑い所ですね。

唐鍊 杖敷元（サシキモト）というのは、いけな所ですか。

浜崎 何ですか。

唐鍊 2枚目の3行目。

平田 杖敷元（サシキモト）でしょう。

浜崎 サジキモト？実は、地図をと言われたので
こういう地図を持って来たんですけど。どうも広げ
る場所がない。

平田 ああ、出来てるんだな。

浜崎 これは正確な小字の復元図なんんですけど。
実は今度「郷土史」を作るのに、これを是非入れ
ようではないかというんですが、予算がないと言っ
て、どうも入れられそうもないのですが。

平田 2万5千分1をつないだものですか。

浜崎 はい、これに頬娃の地名を。

平田 もっと大きいな。1万分1図かもね。

浜崎 建設課が入れてくれたんですよ。字の間違
いなどはありますけど。

平田 これはいい。ちゃんと作ってあるよ。

唐鍊 地籍図じゃなくて、字隣接図ですね。

浜崎 境目がないのですよ。これを何枚かに切っ
て、やろうじゃないかと言ってるんですが。

唐鍊 小字隣接図というやつですね。

浜崎 字がちった間違ってはありますけども。

平田 大体入れてある。1万分1図に。それは
作らせればいいですよ。これが一番大事なやつた。

唐鍊 『鹿児島市史』なんか、これを中止した。

浜崎 一応、これに仮名を付けましたので、是非
やってくれんかと言っておるのですけど。

平田 これは、ほんと。良い仕事だ。

浜崎 これを何枚に区切るか。

平田 大字ごとでしょうね。大字ごとに区切つ
たら出来ると思いますよ。川内はそうしてますよね。

木場 はい。

唐鍊 『鹿児島市史』は、16枚に。

平田 鹿児島市は作ってある？また、見たことが
ないな。ところで、この桟敷（サジキ）という地名
は多いよ。

唐鍊 多いですよね。

平田 うん、たいていの所にある。

浜崎 現場を見てないのですけど。

唐鍊 茅（オロ）というのが出て来たんですけど
「オロ」というのは、まぁ例の「オロ」ですよね。
あそこには、この「サジキ」というのが、よう付い
てますよね。一応、牛を撰った時に、それをつか
まえる時は、串目立が、あの時に観衆が皆。

平田 見てるわけだな。

唐鍊 見ている。

浜崎 ははあ。

平田 殿様が来るために、桟敷を設けるわけ
でしょう。

浜崎 ははあ。追い込むの見てるわけですか。

唐鍊 有名になると、その勇壮な馬をです
ね、郷士の子弟たちが飛び付いてつかまえるわけ
ですよ。それが当時の人々にとって娯楽としてよか
ったのと。それを串目立（クシメダチ）という。

浜崎 串目立（クシメダチ）。はい、はい。

唐鍊 『鹿児島県畜産史』ですかね、その中に
出ています。

浜崎 県史にも出ていますね。

木場 今の「オロ」ですが、クサカンムリに馬と
書くという説明だったのですが、川内のものはクサ
カンムリに長と書く。「長」

平田 長ですか。ヘゴ（長）じゃないですか。

木場 そう。

浜崎 長と書いて、私どもは「ヘゴ」と読む。長
城（ヘゴンショウ）という城跡がある。

平田 それを「オロ」と読ませるんですか。面白

いなあ。

浜崎 ははあ。

平田 どうせ「オロ」という字はないから、作り
立てるんでしょうけどね、皆。

浜崎 馬の方が一番似合ってるかも。

平田 クサカンムリに馬（馬）。これはまた、長
と馬とは似てるな。

浜崎 意味から行くと、馬がいいのかも。

木場 どっちかが、間違ひじゃろかい。

平田 長は「ヘゴ」と読むのが多いよ。

木場 「ヘゴ」かな、はい。

浜崎 頬娃の方は、長城（ヘゴンショウ）と言っ
ておる。

木場 それは、でしょう。オロンモト。ヘゴと
言うところもある。これは書き間違いでしょう。

唐鍊 昔から、意外とですね。

平田 多い。

浜崎 見物場所ですか。ははあ。

平田 そのものずばりでしょうね。

唐鍊 捐得の関係があるでしょうから。

平田 それは知らない。殿様が来るから、桟敷
ぐらいは設けたでしょうね。

唐鍊 新しい駒を出すわけでしょう。藩に。それ
で、藩は九州各地に売るわけでしょう。その時、集
める場所が茅（オロ）あるいは茅之元（オロンモ
ト）ですね。郷士たちが代表を出して管理して
いた。鹿屋の高牧のは、串良とかあっちこっちの
郷士が何人も出るように決まったんですね。そし
て、それを見物する場所を桟敷（サジキ）という。
鹿屋あたりには残ってるんです。勧進帳にね。

平田 勧進帳にね。なるほど。

唐鍊 それを送るところがあるんですよ。とった
馬を送る、茅道（オロミチ）とか。それを見るとこ
ろから馬見ヶ平（マミガヒラ）という。

平田 馬見垣？

唐鍊 馬見ヶ岡。

平田 馬見ヶ岡（マミガオカ）ね。

唐鍊 「マメガッカ」という。

平田 「マメガッカ」

浜崎 なるほど。

唐鍊 それから、この豆漬場というんですけどね。
これは民俗の川野さんがやってますね。

平田 彼はこれを一生懸命やっている。何十ヶ所
と拾ってます。

浜崎 これは何でしょうか。

平田 オヤシ漬場ですよ。オヤシ（モヤシ）を作
った所です。

唐鍊 オヤシツケ場。これはあったんじゃない
ですか。

浜崎 オヤシを部落共同で作る所だった。

唐鍊 部落共同でオヤシを作る所があった。

浜崎 ははあ。えー、そうですか。

平田 他にございませんか。

唐鍊 関係ないですけど、この前、見たもんです
から。えーと、東大の史料編纂所に鹿児島県の地図
が長持一杯ぐらいある。

浜崎 ほう。

唐鍊 その中に、頬娃のですね、きれいな地図が
入っていた。

浜崎 頬娃の海岸じゃないですか？

唐鍊 海岸、村が。

浜崎 ははあー。

唐鍊 頬娃がとくに詳しく描いてあったんですけど
ね。何でかと思ったのですが。

木場 いつ頃ですか。

唐鍊 江戸中期のもの。

浜崎 県立図書館にはないですか。

唐鍊 いや、ない。

浜崎 ああ、そうですか。ちょっと、原口泉先生
が話をされた時に、海岸の方の地図を2枚出され
た。出所が判らんのですが。

唐鍊 あれは、あの。入手先の名前は忘れました
か、鹿児島漁業図というものの。漁場を描いた地図が
あります。

浜崎 ははあ。

唐鍊 多分、それです。

浜崎 どこにあるんですか。

地名「頬姓」について

浜崎盛雄

唐鍊 これは、東大のもの。

浜崎 東大にある?

唐鍊 原口先生はそれを見ておいやつから、多分それでしょう。

浜崎 そうですか。

唐鍊 しかし、明治のですよ、漁場のことを詳しく描いてある地図。非常に詳しい地図です。沿岸漁業のですね、公けに出来ないのは、差別関係のことがちょっと出て来ますから。ほとんど一般には提示されていない。明治の中頃の地図です。

平田 はい、では、だいたい。終りましょう。えーと、地名研究会でこういうのを(『かごしま地名ものがたり』)作って、南日本新聞で折込みがあったと思うのですが、南日本新聞を探っていない方はいますか。あげますので。かれも会に10部しかもらえなかつたので、あんまりないのでけど。

この中でですね、あっちこっちから手紙やら電話やらを貰いました。若干ミスがありましたので訂正しておきます。

裏切松というのがあったのですが、これは「ウランキレマツ」でした。修正しておきます。鹿屋市の吉国郷という方から、墓にこういう地名があって、「ウランキレマツ」と読む、と。「ウラ」は梢とか

先端部。まっすぐ伸びる芯が切れた松で横っちょに広がる松を「裏切松」と云うんですね。県下に3ヶ所ぐらいあります。

それから吹上町入来の「下戸は地獄」という所。表記は「地極」、これは「ジゴク」と読むというので、極楽に対して地獄を意識した地名だろうとは理解したんですが、下戸(ゲコ)と読んだら読み方がズサンだと叱られました。ルビが振ってないので常識的に理解したわけです。「オイト」と読むんだそうです。

木場 オイト?

平田 オリト。だから、浜辺に降りて行く降り口か、戸戸口とか、そう云った「オイトグチ」か「オリトグチ」から来ているのじゃないかな。これは、入来生まれの原口光夫という方の指摘です。

山口 南日本はとてるんだけど入っていない。

桐野 南日本に入ってましたか。

平田 先生の所は入ってませんか。

唐鍊 宝シリーズというやつ。

平田 はい、あげますよ。これは面白かったと好評を頂きました。ゆっくり読んで下さい。

桐野 暇だから、ゆっくり読もう。

平田 今日はこれで。

1	七阿那國 胆殖 《名》	535 安閑紀2 700	
2	衣許督 衣名	文武4. 疎外記 712 720	古事記 日本書紀
3	頬者水ミ称 ...姓、西美セニ姓	開成石事記 770 宝龜	萬葉集、
4	頬姓の名は 共原始(シヨウシ)江といひ この姓太ちは 江海にして	開成石事記	
5	頬	885~888 仁和9年?	
6		927 延喜式222. 江ノ上	歎 女姓
7	江乃 延乃	930 倭名類聚抄	江 乃
8	日向國 可愛の地名べし 才矣	日向沿革考 仲延記	頬 姓
9			女主類
10	江居	1147 久3年 1227 安貞元年(持高大内) 1267 文治4. 忍連 " 1825 元亨5年 山岐文書 1395 応永2年 長慶文書 1400 寛文12. 世田文書	江のこをう えのこをく 魚のこほう 魚
11	薩摩の 鵠哥里	開基 島夷伝	

え	ア行	甲類	衣 依 埃 英 姓 騒 橋 蔷 (可得)
	ヤ行	乙類	延 兜 寢 鬼 遙 緑 奇 (兄柄枝吉江)
魚			

頬 居 乃 胆殖

分類 (試案)		範例	漢字
山	矢笔嶽(師) 宮尾嶽(師42) 雪丸嶽(師412) 示山(上35) 佐乃子嶽(師) 尾丝山(上-)	地	名
嶽	廣教岳(上) 佐神岳(美) 女鷦嶼(師) 大峰嶽(師)		
峯	裡峯(後649) 井ノ峯(後634)		
岡	茶屋岡(後182) 小岡(後598) 近風岡(上638)		
尾	九尾(第61) 尾鉢(師305) 高尾(第1136) 中尾(第1176) 植子尾(上)		
地			
段	段(後52) 西ノ段(後57)		
峯	鳥越峯 邦荷芋峯(師) 木戸峯(第160) 荷芋路峯(第390)		
岸	鳥越峯(第224) 打越(第238) 荒平嶽(腰(第249) 矢越(後) 馬越(上329)		
	田向(第248) 广越道(上358) 田原(後539)		
迫	錦迫(第208) 带迫(後423) 扇保迫(後321) スミアハ(後354) 迫坂(第402)		
谷	谷立口(第99) 宇都谷(第295) 岩谷(第123) 丹花(師72)		
崩	崩平(第99) 崩竹迫(第135) 白崩(後88) 崩上(第19) 水口食(第108) 土口食(第20)		
	柿ノ崩(上110) 柿木迫(第342) 長八(第463)		
小字	市ノ字(第376) 坎ニ上(第190)		
穴	アツキ穴(後350) 狸穴(後368) 風穴(上129) 穴田(後265) 小穴(上263) 穴下(上212)		
堺	堺(第320) 座頭落(第366) 兔口(第335) 濱牛(師) 一箇		
コラ	コラカ子(第1495) 亀ノ(第1574) 亀甲(師109) 幸良ノ尾(後179)		
シテス	砂取岡(後299) 幻崩(後286)		
宍	宍(上152) 八瀬(第316) 西大宍(第266)		
守部	守部(第67)		
原	采原(第450) 南原(第452) 綿原(第468) 芳方原(上59) 長原(第356) 有原(第82)		
	春原(後42)		
	守原平(第468) 濱原(第361) 赤田平(第2402) 北平(後732) 丙年(後159) 三平(後413)		
	毛原平(後318) 平原(後6) 青木平(第282) 平(上153) 平入平(後816) 流平(上67)		

	地名
頭	山頭(郡110) 高尾頭(郡23) 中尾頭(郡25)
口	谷八口(郡274)
元	升手元(郡363) 流元(郡131) 穢數元(郡204)
尾	田尾(郡7) 升三尾(郡11)
鼻	中野鼻(郡283) 古城鼻(郡293) 中次八十(郡182)
川	水城川(郡148) 別石垣川(郡111) 别22.
成	成(郡141) 船筋(郡142) 間(田)(郡) 三川町(郡159) 川口(郡128) 水上村(郡187)
泊	泊包(郡129)(郡64) 黑水流(郡101) ²² ₂₁ 水流(郡155) 流合渡(郡693) 水流(郡212)
洲	牛洲(上口) 力久入(郡1247) 中次(60) 次下(郡148) 高江(道3)
橋	橋之口(道214)
波	渡口(郡93) 渡瀬(郡1294) 波瀬(郡1276) 唐足渡瀬(郡1472) 唐笠渡瀬(上54)
瀬	柏波瀬(郡202) 善入渡瀬(上520) 下松波瀬(上192) 雄高渡瀬(郡511)
渡	牛渡瀬(郡544) 平渡也(郡421) 石渡口(郡9)
物	櫛木渡(郡1223) 板木渡(郡431) 檜木渡(郡626) 水檜渡(郡350) 乌渡(郡)
海	
浦	捕浦(郡150) 今浦(郡267)
浜	浜上(郡304) 池村(郡448) 先浜(郡)
瀬	垣瀬(郡256) 田瀬(郡) 濱瀬(郡192)
川	水元前(郡112) 黃口(郡205) 黃口(郡88) 出口(郡321) 一人口(郡329) 入人口(郡444)
水	佃葉上(郡312) 御領水戸(郡628) 箱立(郡28) 牛本通(郡78) 牛舎(郡0)
石	石木通(上74)
包	雨包(郡64)
水	上込水(郡1425) 井手元(上501) 手玉井(郡326) 玉井園(道41) 向玉井(道41)
瀬	出水(郡1504) 水瀬(郡174) 水玉井(郡1611) 水出迎(郡167) 一垂水(上319) 水21(郡121)
井	立瀬場(郡321) オヤニツケ場(上115) 茄子川(郡285) 沢一里(郡398)
城	陳一山(郡163) 陳胸(郡162) 采深(郡267) 古城(郡29-) 七城内(郡441) 城山本屋敷(郡445)
	北城山(郡446, 447) 旗山(郡217)

	地	地
中 世	不夕崎(號125) 塙ノ原(號115) 城ノ口(號92) 併八迫(號114) 鳥ヶ城(號53) 長城(號43)	
	茶屋場(上267) 茶屋(號274) 茶屋園(號358) 矢筈(號212) 雁宿道(號321) カイマタ(上8107)	
(1)	原田(號11) 小長田(號13) 発生田(號18) 痘板田(號104) 九田(號14) 正づ田(號218) 西萬蒲田(號306) 里仁田東(號18) 大田(號42) 三年田(號22) 新田(號211) 牛田(號210) 黄寄田(號3) 柳木田(號22) 密田(號243)	
大田	鳥大田(號217) 七反大田(上21) 一里大田(上271) 留大田(上425) 牛大田(上832) 竹大田(上439)	
田	内蔵(號4) 相蔵(號25) 花蔵(號112) 11原園(號45) 沼園(號124) 魚園(號131)	
山	飛山(上289) 建山(上309) 云山(上333) 小ホシ山(號310) 鹿山(號364) 徳山1園(上360) 利山(號189) 鳥山(286) 鹿山(號3582) 鹿山(號217) 十山(號130) 御土山平(號631)	
山	四立野(號160) 草野(號978) 宝山野(上543) 只角山野(上520) 之野前木(上581) (共)=雨山野	
发	馬(號627) 手放(上143) 北手放(上201) 放(號246) 居馬鹿(上208) 内放西(號652) 二重十尾(號11) 馬士(號633) 馬ウツロ(號136) ハナヲキ下(上222)	
火 焰	小十(上523) 山嘴(上190) 山唇(上260) 山薙(上522) 下山薙(上522) 刃火薙山(號116) 十野(號82) 無原内(號183) 火切(號229) 丁キ野(號289) 下十火薙(號185)	
薪 炭	木炭(號251) 刃火() 犀込(號228) 13.13(號56) 13.13(號226) 芳込(號375) 貝込(上433)	
開	春向(號) 大野獄燒野(號137) 仁明(上95) 壱作御(上521) 茶平(號1235) 走引野(上521)	
望	原(號190) 茶木(上200) 力々(上230) 潤ヨケ(號1296)	
地 門	五脚竿(上151) 建脚(上87) 一尺八脚(號189) 百間竿(號689) 10庄生地(號118)	
割 脚	永脚(號480) 長脚(號244) 四脚(號100) 七脚(號186) 寄合作前(上26) 三升作(號131) 横作(號110) 溝脚作(號1445) 铃子作(號131) 代泥作(上547) 三斗脚(號354) 高脚(號9) 低古脚 土谷屋脚(號228) 本屋脚(號483) 松入脚(號675) 左右217屋脚(號436) 中屋脚(號485)	
	特脚(號172) 持(號182) 持頭(號187) 毛頭(號238) 萩脚持留(號393) 外杠脚(號1522) 文三浮(號149) 咸道(號281) 田麓脚(號) 陰居(號313)	

	地	地
社 寺	年前(號103) 宮船(號) 堂近(號102) 田神下(號18) 三ノ寺(號84) 丸王山(號16)	
塚	大門(號21) 惠坊(號229) 古國寺(號301) 鮎忠寺(號301) 桜庵(號310)	
墓	堂西(號328) 鎮守免(號295) 京源(號427) 尾坂(號189) 11塚(號465) ガイ塚(上82) トン塚(號559) トコ塚(號561) 九王山(號123) 1127.7(號31)	
街 道	石佛(號1523) 寺松(號1545) 上47供巻 山中供巻(上345) 神木(號309)	
梅 松	墓(號194)	
梅 松 石	三條(號102) 横海道(號118) 外道口(號128) 御領道(上3) 脇道(上19) 領口出口(上9) 上出口() 上外ナ(號406) 外ナ元(號406) 茶屋(號279) 茶屋小路(號) 茶屋場(上267) 花立(號450) 常立東(號191) 常立神(號220) 常山(號123)	
渡 来	江ノ干近(號39) 梅波瀬(號202) 桧木(號334) 桧木道(號408) 桧(號328) 横向(上60) 横口(上61) 8.1木道(號409) 洋松(號25) 票(7)(號11) 麻田(號146) 1.1木道(號226) 8.1木道(號409) 男杉元(上583) 林山(號666) 腔氣(號405) 根古木(號64)	
渡 来	唐折竹尾(號16) 唐船園(號318) 3.1木道(號125) 民通張界()	
庄 园	邊取口(號322) 塵入(號18) 塘作(號114) 松庭典(號54) 柳場(上106) 加治園(號27) 芦屋園(號) 采園(號) 細打川(號122)	
?	風呂元(號24) 氏無三(號24) 一氏(號) 申四月金(號312) 金小道(號347) 津伏(號194) アシカイ(上132) 錢車(號410) 神鹿(號407) (上) 札後(上201) 魚菜(號523) 鮎面(號625) ニヤケ口(號157) 足加イ(號525)	
?	笠掛(號457) 7.1掛(號325) 夏掛(號330) 暑掛松節() 7.1掛(號187) 瓶掛(號298) 7.1口(號)	
	一夜入(號638) 毛込(號144) 横枕(道63) 201世界(號68)	
	志戸(號) 青戸(上)	

地名研究会報

(マサニキ) 山谷・(マタマヤ) 川山

さ風の山田全・さおと山を川山・田平
タマヤマヤマ山・川さき山を地山・まき山

I. 第26回例会 平成元年9月3日(日)

於教職員互助組合会館

(出席者) 青柳俊二・臼山静夫・江平 望・大田照夫・小川亥三郎・片岡八郎・永山徹弥
花園正志・平田信芳・浜崎盛雄・松田 誠・松浪由安・山口静也・吉川法水(計14名)

II. 優藩名勝考読会 P. 90 ~ P. 93

(問題となった地名および事項) 石垣・水成川・甕破坂・仙田・網敷・六瀬浜・山川・谷山
沖得祭・設楽踊 etc.

石垣(イシガキ)

浜崎 私は石垣に住んでいますが、石籬と石垣は同じと考えていいでしょうか。

平田 同じと考えていいと思います。私も石垣の地名を確認するために、頴娃町の中では石垣にだけ行ったことがあります。出会う人たちに尋ねたのですが、遣唐船が着いたという歴史を誰も知りませんね。

浜崎 そうです。そういう郷土史の感覚はありません。

平田 私が「石垣」という地名に興味を持ったのは、奈良時代、薩摩国に石垣があったか又は石垣についての知識があったから「イシガキ」という地名が付いたと考えたからです。石垣の海岸に行って見ると、沖に突出した岩の板状節理による割れ目が石垣のように見えるので、それかなと思ったりもしました。日本で石垣を築くのは、神籠石(ごだいし)が最初と考えなければならないのでしょうかが、白村江の戦に敗れて、唐・新羅の攻撃に備えるために朝鮮式山城を各地に築いたのが石垣の登場と見るべきでしょうから、神籠石はそれと関連があるのでしょうか。それはとも角として、薩摩国石籬浦という地名が付くのは7世紀後半から8世紀初めということなんでしょうね。

浜崎 頴娃では「イシガキ」とは言わない。「イシガケ」という方言で石垣のことを「イシガケ」というのかなあ、と思うのですが。一方、「ヰ垣」という苗字がありますが、これは「ウシガキ」という。「ウシガケ」とは言わない。

平田 石垣を「イシガケ」と表現する所がありますか?

片岡 子供の時、石垣の上から「泣こかい飛ばかい、泣こよかひっ飛べ」と言って飛んだ。その時は「イシガケ」と呼んでいた。石垣が石の崖のように感じられたのでしょうね。「石垣」と「石の崖」をかけた表現?

永山 水成川(ミナレガワ)とルビが振ってあるけど、「ミナリガワ」ではないですか?

浜崎 地元(頴娃)では、「ミナリ」と呼ぶ。水鳴(ミナリ)とも書きます。

平田 『優藩名勝考』のルビは、編者白尾国柱をはじめとする鹿児島城下の史官たちが理解した「訓み」があり、間違ったものもあるので要注意。史書にルビが振ってあるから、昔はそう呼んでいたと考えたらいけない。

浜崎 「カメワリサカ」という地名は各地にある

ようだけど、壺を落として割ったというきつい坂道に由来するものと考えてよいのか。

花園 「カメワリ」については、二つの説を聞きました。一つは、国分市敷根と福山町を結ぶ国道220号線に「亀割峠」という地名があります。この敷根・福山間は極めて難路で、人馬がやっと通れる崖の道が続き、荷物の運搬には大変な難渋をしたと言います。その坂道を、福山名産の酢を馬の背に積んで運んだそうです。峠付近で積み荷をなおす時、あやまって酢を入れた壺を落として割ってしまい、そんなことから「亀割峠」というようになったと伝えています。福山酢は文政3年（1820）から生産しております。それ以前の峠付近の地名については、知りません。今一つは、亀割峠から海の方に突き出した小さな岬があります。この岬の突端は「日本武尊の上陸地」との言い伝えがあり、若尊鼻（わかみぬ）と呼んでいます。この岬は、敷根・福山のどちらから見ても亀の姿に似ているそうです。その亀の部分を切り離したところを亀割峠と呼ぶのだそうです。

平田 亀割・亀ヶ岡・亀山・亀甲など、「カメ」の付く地名は多いようです。東北地方の縄文晩期の有名な亀ヶ岡式土器などの場合は、壺・瓶などが出土したことから「カメ」という地名が付いたことも考えられる。亀割の場合も、壺の割れたもの・壺の破片が雨の降った後に見付かり、「カメワリ」と付いたことも考えられる。

小川 枚聞神社に、琉球王からの献上品と云われる壺があります。本来、一対であった壺だそうですが、一つが割れてしまったという「壺割」の話も残っております。

仙田（センタ）・綱敷（ツナシキ）・六瀬浜（ムセノハマ）

平田 仙田・綱敷・六瀬などは、どんな意味・由来をもつ地名ですか？

永山 仙田は広い田圃のある所ですが、何故です

かね。

山川（ヤマガワ）・谷山（タニヤマ）

平田 「山川」という地名は多く、全国的に見られます。「山奥を流れる川」が「ヤマガワ」で、「山と川」を意味するのが「ヤマカワ」のようです。山と川とを一緒にして「山川」、谷と山をまとめて「谷山」という地名の付け方に不自然なものを感じます。とくに谷と山などは、山があるから谷もあり谷があるから山もあるのであり、これが地名として名付けられる命名に疑問を感じます。「谷山」という地名も「山川」におとらず多いようです。目下、全国から地名例を拾って整理中です。今一つの作業として、『万葉集』『八代集』の中から「山川」と「谷川」の用例を抽出しました。『八代集』は『古今集』に始まり、13世紀初めの『新古今集』までの八つの勅撰集ですが、時代によって使用される言葉を比較することが出来ます。山川・谷川などは一例ですが、単語の時代的特徴として把えるのに役立つと考えます。『万葉集』『八代集』の単語の整理は、単語発生の年代を大まかに把えるのに必要だと思います。「山川」は、『万葉集』に多く見られますが、時代が新しくなると「谷川」という表現に変化するようです。

山川という地名は合成地名・複合地名ではないのか。そう思って山川町の大字を見ると、「大山」と「小川」があります。「小川」が小川先生の本貫の地かどうかは知りませんが、「山川」という合成地名を作ったなど推測出来ます。「川」は小川でなく、「鳴川（成川）」の川を探ったのかも知れません。他の県の「山川」という地名の中には、合成地名であるとの由来を説明したものもあります。谷山も同様で、「谷上」とか「谷口」という地名と「山田」が合併して「谷山」を名乗ったことも考えられます。目下整理中で、以上は中間報告です。

沖得祭（オキエマツリ）・設樂踊（シタラオドリ）

平田 沖得祭の式次第が詳細に記録されており、非常に面白いと思ったのですが、この祭りは現在もあるのですか？

小川 残っておりません。

平田 憎しい民俗行事ですね。残っていたら素晴らしいしかったでしょうに。

浜崎 設樂踊（しほだり）というのが書いてありますが、これも残っておりません。

吉川 現在南日本新聞に連載中のもので、近畿地方に移った隼人たちのことが書いてあるようですが

平田 中村明蔵さんの「ハヤトの原像」ですね。彼は、今日は見えませんね。原稿書きで忙がしいのでしょうか。

吉川 近畿地方に移った隼人の子孫が、そんな舞いを受け継いでいるんじゃないでしょうか。

平田 宇治とか吉野でしょうね。京都府とか奈良県に、移住させられた隼人の子孫が隼人舞の片鱗を受け継いでいるかも知れませんね。南日本新聞の文化部に、その取材を働きかけてみますか。

指宿地方における小路について

小川亥三郎

鼻炎を起こしていまして、どうも声がよく出ません。鼻声でお聞き苦しいと思いますが、ご容赦願います。

本題に入ります前に、鏡味明克氏の『小路（コウジ）・小路（ショウジ）・小路（コミチ）の読み方の変遷と分布』という研究がありますので、それを紹介しておきたいと思います。鏡味先生によれば、小路（コウジ）という地名は京都から起きたとのことです。京都の町に大路、例えば朱雀大路とか一条大路、二条大路と、大路があります。これに対して、小さな道を小路（コウジ）と言っています。この小路（コウジ）が全国に広がったのであるとのことです。

ところが、京都では「コウジ」と呼ぶのに、大阪では「ショウジ」と呼んでおります。この大阪の小路（ショウジ）が、瀬戸内海を経て北九州に達しております。それで、大阪から瀬戸内海沿岸・北九州にかけては、小路（ショウジ）という呼び方が卓越しております。これが「小路（ショウジ）地帯」になります。

九州全体で見ますと、九州は「コウジ」と「ショ

ウジ」が入り混っている地帯になります。

「小路（コウジ）地帯」はどこかと申しますと、中部地方・関東地方・東北地方がそれに当ります。これは小路（コウジ）という読みかたの方が卓越しております。北海道にも少し小路（コウジ）が入っています。

小路（コウジ）と小路（ショウジ）は、どちらが古いか、という問題ですが、鏡味先生によれば小路（コウジ）の方が古形で、小路（ショウジ）の方が新しいとのことです。小路（ショウジ）というのは大阪で起きた、と。時代は、室町時代の末から江戸時代の初め頃に発生したということを、文献をあげて説明しておられます。非常に貴重な研究で、私どもは高く評価しております。ただ、先生の研究は「読み方の変遷と分布」ということに主眼をおいておられ、それ以上の突っ込んだ説明がありません。それで私どもも、なお研究の余地があるんじゃないかなと思っているわけであります。鏡味先生は、小路（コウジ）・小路（ショウジ）は小さな道・道路という点に主な意味を持たしておりますが、道路という意味の他に、派生した意味が別にあることを私は

考えておりますので、そういう点について話をしたいと思います。

これから本題に入ります。指宿市は、昭和29年、旧指宿町と旧今和泉村とが合併して市制を施した所であります。それまでは、今和泉村は指宿郷の中にあったわけです。延享二年(1744)、第23代島津継豊の時代に、その頃すでに断絶しておりました今和泉家という家を再興するために、弟の忠郷をその跡に就けまして、今和泉家を興しました。今和泉家は一門家に列していました。

爾来、二百年の間、指宿と今和泉は別々に暮らしておったわけです。別居している間に、少しずつ微妙な相違が起こって参りました。例えば、指宿では小路(コウジ)と発音するのに、今和泉では小路(ショウジ)と発音します。

まず、指宿地区について説明します。大字十二町(ジュウニショウ)に、中小路(ナカコウジ)という部落があります。公民館もあり、かなり大きい部落ですが、土地の人々、とくに年寄った人々は「ナカゴッ」と発音しております。中小路があれば上小路・下小路もありそうなもんだと思って調べてみると、近くに字上川路(カミカワジ)・字下川路(シモカワジ)という所があります。これは多分上小路(カミコウジ)・下小路(シモコウジ)の転化ではないか、と考えております。

②に「下り小路(クダリコウジ)二才中・三才中嘉永七年」という文字を彫った早馬どんの石塔があります。これは今の下里(クダリ)部落にあたります。まとまった部落で、公民館もあります。この二才中というのは「二才組(にせぐみ)」のことです。男15才から大体25才ぐらいまでを二才(にせ)と言います。それから、26才ごろから35才ごろまでを三才(さんせ)と言い、それぞれ二才組とか三才組(さんせぐみ)という組を作っていました。二才組と三才組が共同して、嘉永七年に早馬どんの石塔を建てたと

言ことになります。早馬どんというのは、牛馬の神様のことです。

次に大字東方(ヒガシカタ)。史料③「温湯小路(ヌリコウジ)、二才中・三才中、明治十四年」と言う字を刻んだ早馬どんがあります。現在の温湯小路。土地の人は「ヌリゴッ」と言っておりましたが現在の温湯小路部落にあります。温湯小路(ヌリゴッ)は、単に「ヌリ」とも言います。以前は「ヌリゴッ」と言うておりました。つまり、温湯小路の二才や三才の組が早馬どんを建てたと言うことです。温湯小路と言うのは、とりもなおさず温湯部落のこと、小路(こじ)と言うのは部落を言うように考えられます。

④「宮小路(ミヤコウジ)、三才・二才。嘉永三年」と刻んだ早馬どんがあります。現在は、宮部落と言うてあります。指宿神社、すなわち開聞新宮のある所ですので、宮部落と言います。これを見ると宮小路(ミヤコウジ)は宮部落と同じ意味で、小路(コウジ)というのが部落を意味することが判ります。

⑤「道上小路(ミチウエコウジ)、二才・三才。嘉永五年」と刻んだ早馬どんが、今の道上部落にあります。これも二才組や三才組が嘉永五年に早馬どんを建てたと言うことあります。

次に、大字十町(ジッショウ)。⑥「迫田南小路(サコダミナミコウジ)中、寛延二年(1747)」ここに田之神があり、迫田南小路の人たちが田之神を建立したと言うことあります。今の南迫田部落に相当します。

⑦「宮十町小路(ミヤジッショウコウジ)」ここにも田之神があり、宮十町小路、元文五年(1740)という文字が刻んであります。この部落は今の北十町部落に相当するようあります。

以上のことをまとめてみると、旧指宿町地区的小路(コウジ)というのは部落を意味すると考えて

いいんじゃないかと思います。これらの小路(コウジ)という集落は旧指宿町地区に点在しており、一ヶ所にまとまっているわけではありません。指宿は藩の直轄地で、地頭が治めておったわけです。地頭の居る所を麓と言いますが、麓は宮ヶ浜にありました。宮ヶ浜の郵便局の上の方に地頭仮屋あります。その周辺に武士の住宅があったのですが、規模が小さく、麓集落としては貧弱な所でしたので、麓によくある〇〇馬場・〇〇小路(コウジ)という地名は全く残っておりません。今掲げました七つの集落・小路は麓から遠い処にあります。

次に、旧今和泉村地区になる大字岩本。これに浦と麓と書いてありますが、浦というのはいわゆる浦浜で、漁業部落あります。漁業部落に続いて麓集落があります。(地図)右の方に今和泉小学校がありますが、そこが領主の屋形があった所です。麓集落は国道の上の方、神社の方にもあります。それから、上ノ谷(カンノタイ)という所にも麓集落があります。この今和泉の麓は土地の狭い所為もありますが、規模が非常に小さくて、出水の麓のような規模の大きい麓集落とはとても比べものにはなりません。麓に下馬場という通りがあります。「シタンババ」とか「スッ」とか呼んであります。「スッ」は鹿児島の小路(シュッ)の訛ったものです。やはり、麓集落の形は多少残っておるようです。

この浦部落に、国道の方から海岸に向かって並行した小さな小路(ショウジ)があります。下の方から読んでみると、ホゲタンスッ、タカタンスッ・ウエンソンスッ・ハナムランスッ・タンボンスッ・モタイムランスッ・カワバタンスッ。この七つの小路がありますが、これだけが浦に属しております、オテランスッから右の方は麓部落になります。この浦部落の「スッ」ですが、これは鹿児島では「シュッ」と言つておる小路(ショウジ)のことです「シュッ」がさらに訛ったのが「スッ」であります。

す。今和泉郷というのは、領主も鹿児島から移ってきた人であるし、また家来の人達も鹿児島から引き連れて来た人達ですので、鹿児島の影響が強いわけです。ここでは小路(ショウジ)という地名になっており訛って「スッ」と発音してようなわけです。

ここで注意しておきたいのは、この小路(ショウジ)は小さな道という道路の名前ですが、道路に面した家々の集団の名前でもあるわけです。ホゲタンスッの貞吉とか、タカタンスッの六助とか、と呼んであります。つまり、小路(ショウジ)というのは道路という意味と、もう一つは集落という意味を含んでいるのであります。小路(ショウジ)の両側に大体15~6軒の家があります。それが、まあ、一つの集落になります。しかし特に集落として固まって行事をするというようなことはありません。昔は、お伊勢講の時に宿を小路(ショウジ)単位で回したというようなことはありました。

麓および麓に近接する浦とか、あるいは野町、そういう所では麓の影響を受け、小路(ショウジ)は道路という意味の他に、道路に面した地域集団という意味の二つを含んでおるようと考えられます。ところが、麓から遠い麓と直接関係のないような集落になりますと、道路という意味がうすれて集落・部落という意味になってるように考えられます。

そこで、次のページ。旧今和泉村の大字に新西方という所があります。麓の南西約1.5km離れた所になります。ここに細田小路(サイタショウジ)という所があります。「万延二年正月吉日、奉寄進庚申供養、新西方細田小路二才中」という字を書いた庚申塔があります。これは今の細田部落になります。細田小路の二才組の人たちが庚申塔を建てたということです。

それから②の渡瀬小路(ワタセショウジ)という所があります。明治四十四年九月十六日、貯金貸付帳。借付帳という字になっておりますが、貸付帳と

いう意味でございましょう。渡瀬講中・渡瀬小路人名簿という名簿がありまして、二十四名の人名が書いてあります。渡瀬講中というのは、今の頬母子講のことと、部落の人たちがかねて貯金をしており、講中の誰かが急に錢が要るような場合に、貯金の中から貸付けてやるというようなものがあったわけです。現在、渡瀬部落というのがあり、公民館もあります。一つのまとまった部落です。このように麓から離れた独立した集落になりますと、小路（ショウジ）は小さな道という意味から離れて、むしろ部落乃至集落という意味に変つておるのであります。

次に指宿市に隣接する喜入町の小路（ショウジ）について申しあげます。喜入役場の近くに麓集落があります。麓は、もともとは本麓（モトフモト）という所にあったのですが、承応二年（1653）、本麓から移って新しい麓集落を建設しました。今の喜入小学校の所に領主でありました肝付家の居館があつたわけです。麓は今日の言葉で言いますと、都市計画に基づいてきちんと道路を通してあります。碁盤の目のように道路が走つており、出水の麓ほどはありませんが、とにかく麓集落の典型的な様相を備えております。ここに横小路（ヨコンシュッ）・縦小路（タテンシュッ）・役所小路（ヤクションシュッ）という小路があります。鹿児島城下と同じように、小路を「シュッ」と発音しております。麓から離れた所にも、小路（シュッ）というのがあります。

①. 上小路（カンノシュッ）。これは大正の末頃まで呼んでいたそうですが、今は大丸（オオマル）部落と言つております。この「丸」というのは田圃を意味する地名であります。かなり広い田圃があり麓から約400mばかり東、やや海岸に近い所になります。このように麓から離れた所では、小路（ショウジ）は部落という意味になっております。

②. 享保二年四月十三日とあります、これはミ

スプリントで、二と四を入れ代つております。享保四年二月十三日が正しい。享保四年は1719年です。御領原（ゴリョウバル）土屋敷余地に新小路（ショウジ）を開き云々、という文書があります。これは肝付家の文書であります。御領原という所は麓から約500mぐらい南に離れた所の小さな部落ですが、この御領原に武士の屋敷があつたのであります。その余った土地を開拓して、新小路（ショウジ）と名付けました。新小路という新しい集落を建設した。麓で屋敷を持たん武士をそこに移して、住ませたということであります。これを見ても、小路（ショウジ）というのが集落を意味しておるということが判るんじゃないかなと思います。

以上で終りますが、まとめて申しあげますと、小路（コウジ）と小路（ショウジ）は、本来の意味は小さな道ということですが、これから派生した部落乃至は集落という意味もある、ということです。

（質疑応答）

平田 どうもありがとうございました。小路（コウジ）は京都起源で古い形。小路（ショウジ）は形としては新しい。起こつて来た時代は室町時代から江戸時代の初期であろう。お住まいの指宿を中心にして近隣の今和泉・喜入までを比較されての立論でした。指宿の場合の小路（コウジ）は、川路と書いて「カワジ・コッ」というものが变成了。これも集落を意味する、と。今和泉では、いわゆる麓集落の小さな道路を意味したものが、麓の集落地名になつてゐるけれども集落としての呼び名の方が多いといふ説明でした。そのような理解で間違ひないでしょうか？ どなたからでも、ご質問ください。

江平 大変、実証的で本当にそうだなあと思って興味をもつてお聞きしました。ちょっと思ったんですが、思い付きですから。馬場と小路（シュッ）と

いうのは、知覧でもやっぱり大きな方が馬場で、小さな横の方が小路（シュッ）と分けているようですけれども。なるほどね、と思っています。指宿の「コッ」というのは、川内（カワチ）ですね、あの川内とは関係ないのか？ 本来、他所なら川内（カワチ）というところを、この字（川路）で当てたんじゃないかなと。そんな気がするわけです。本来、言葉が先で漢字は後だろうという感じからしますとこの部落に当たる小路（コウジ）は川路（カワジ）とも字を当てたりしているわけでしょうが。川内は川を中心にして開けたところの集落ですね。あの川内（カワチ）のことを指宿特有の小路に字を当てたんじゃないかなとも思われないでもない。まあ私のひがみかも知れません。しかし、地方の傾向がつかめて大変有難く思つてゐる次第です。当たらんかも知れませんが、ちょっとそんなことも思いました。

平田 指宿の方には川内（カワチ）という地名はありますか？

小川 そこにあげました2ヶ所。川路が。

平田 いや、川内という形は？

小川 川内ですか？

平田 はい。

小川 川内という形はありません。

平田 ああ、そうですか。

小川 小路（コウジ）と呼ぶ所は、他にもかなりあります。例えば、東郷町。東郷町には小路（コウジ）と呼ぶ部落があります。東郷元帥の祖先の発祥之地という標柱が立つております。それから、久見崎（グミザキ）。川内市の久見崎の辺に、長小路（ヘゴコウジ）という字があります。それから東郷町の舟倉（フナクラ）商店街という所には、今和泉の浦の小路（スッ）みたいなのがあります。紺屋小路（コウヤンコッ）とか舟着場小路（フナツッパンコッ）とか、酒屋小路（サカヤンコッ）というのがあります。小路（コッ）というのは小路（コウジ）

の訛ったもので、東郷町では小路（ショウジ）とは言わないで小路（コウジ）というております。

九州では小路（コウジ）と小路（ショウジ）が入り混つております。鹿児島県内では、まぁどちらかと云うと、小路（コウジ）というのも仲々頑張っております。垂水の牛根麓。ここでは小路（ショウジ）というのが多く見られます。東小路・中小路・宮小路という所があります。訛って「スジ」と発音しております。ところが、その近くの牛根境では小路と書いて「コジ」と訛っております。小路（コウジ）の訛りだと思います。このように小路（ショウジ）と小路（コウジ）が非常に入り混つております。そこに規則みたいなものはちょっと見出し難い気がいたします。

川辺町にも飯倉（イクラ）神社の側に、宮小路（ミヤコウジ）という小さな部落があります。

加世田に参りますと、小路（ショウジ）というのが出てきます。中小路（ナカショウジ）という部落があったり、加世田麓には犬之馬場（インノババ）あるいは垣本小路（カッモトンシュッ）というような小路（ショウジ）があつたりして、小路（ショウジ）の方が優勢でありますが、小路（コウジ）もかなりあると感じております。

平田 鹿児島県の小路（コウジ）と小路（ショウジ）については、ワープロかパソコンでインプットせにゃいかんですね。さらに地図の上に小路（コウジ）が○ならば、小路（ショウジ）はXなんかで分布図を作る必要がある。そういうのは若手がやるでしょう。松田さんあたりが適任だな。それからー

江平 ちょっと、こだわるようですが、お聞きしたいのは、馬場に対しては小路（コウジ）じゃなくて小路（シュッ）ですね。馬場という名称に対しては小路（シュッ）ですね。

小川 東郷町に麓があった頃の地図を見たことがあります、そこでは馬場と小路（コジ）。小路に

「コジ」という仮名が付いている。そういう例もあるわけですね。その隣の隣が舟倉商店街。今でもあります、そこでは小路（コジ）とは言わずに小路（コッ）、と。「コッ」と仮名が付いておりますが、恐らく「コジ」を「コッ」と云ったんじゃかと思ひます。

平田 今和泉の地割が示されていますが、「ホゲタンスッ」と云うのは何ですか？「ホゲた谷」と云うことですか？

小川 そういうことですね。

平田 ホゲた谷。「タカタン」は何ですか？

小川 高田という人がそこに居ったから「高田んスッ」

平田 高田のスジですか。

小川 「タカタンスッ」というわけです。

平田 「ウエンソン」は上之園ですね。「ハマンスッ」は「浜之小路」。タンボ（田圃）も判る。

小川 「タンボ」はですね、「タンボ」というのは雨が降ったらその道路がすぐぬかってタンボみたいにですね、ジクジクなったと言うんで、そういう名が付いたと言うことです。

平田 ははあ。そういう状況から付いた名前。なるほど。

浜崎 モタイムラというのは？

平田 モタイは、あのモタイですよね。あそこに開聞町に、物袋（モッテ）とあるでしょう。

小川 このモタイは、馬渡。

平田 馬渡がモタイですか？

小川 馬渡を、モタイと発音しております。

浜崎 馬渡（マワタリ）ですか。

平田 馬渡（マワタイ）を、モタイ、と。これも当て字でしょうけどね。モタイが本来でしょうから

小川 大口市に、馬渡（モタイ）という所があります。

平田 確かに、馬渡（モタイ）があります。

江平 それと物袋と書いたのとは関係がありますか？

平田 これは近いなあ、と思うんですがね。

永山 あれは物袋（モッテ）でしょう。

江平 そう、物袋（モッテ）。

永山 あれは開聞町にありますね。

江平 あの物袋（モッテ）は馬渡（ウマワタシ）のことですかね？

平田 いや、物袋（モッテ）は。「モタイ」というのは、「ミカ」とか「モタエ」の類、壺のことでしょう。古い時代の呼称、呼び名でしょうね。

江平 ああ、そうですか。

平田 そういう地名があるのは、恐らくそういうのを焼いたからじゃないかな、と思ったりするんですがね。そうしたら、意味が判るわけですね。例えば「ミカノハラ」。ミカを作っていた原、大きな壺を作っていた所でしょうからね。だから「モタイ」が訛って「モッタイ」になり、さらに「モッテ」になったとすれば、「モッテ」の解釈が出来るわけですね。確かに、大口の方に馬渡を「モタイ」と読む所がありますけど。

浜崎 馬渡（マワタリ）は、川と関係がありますか？

平田 それは馬が渡る所。

永山 馬で渡る所だから馬渡。

浜崎 ここの場合、何か地形的に特長がありますか？

小川 このモタイムラのスッの上の方にですね、字馬渡（マワタイ）という字があってですね、そこに馬渡川（マワタイガワ）という川が流れておる。

平田 それなら、これは馬渡（マワタイ）ですね

小川 馬に関係があります。

永山 馬で渡るのですか？

小川 そうだと思いますよ。

浜崎 川の幅は？

小川 ここに小さな川があったんです。

平田 なるほど。「オテランスッ」も「クランスッ」も判りますね。その次の「ゴムンドンカワ」というのは、何ですか？

小川 いや、意味が判らん。

平田 えっ？

小川 意味が判らんのですよ。どういうのか。

永山 川の名前ですか？

小川 何かの名前です。

永山 ドンは殿でしょうね。ゴムンというのは？

小川 判らないのです。

永山 苗字でしょうね。ゴム殿の川？

小川 そうでしょうね。この川は、神社の下の方に泉（イズミ）と書いてありますが、そこに非常に豊富な湧き水があって、そこから流れて来る。

永山 水源地？

小川 はい、そこから流れて来る。

永山 ここが水源ですね。

小川 はい。

平田 ゴムンドン？

吉川 ゴムは、魚のゴモを言うのじゃないですか

平田 ゴモ？ ゴモンちゃんのことですか（笑）

小川 さあー？

永山 ゴムンというのが泮ればいいのですがね。

浜崎 この「スッ」というのは、漢字を当てたら「筋」になりますか？

小川 小路（ショウジ）ですね。これは、鹿児島城下の影響が強いのじゃないかと思います。

浜崎 この納屋筋（ナヤンシュッ）というのは、「筋」を書いているんじゃないですかね。このタテの道。

吉川 ライオンズ=クラブやロータリー=クラブが、あっちこっちに立ててますね、標柱を。あれの「ショウジ」は、竹カンムリの「筋」。どっちが先かということになりますが。

小川 中小路（ナカンシュッ）とか、昔、高見馬場の裏通り、中央ビルの裏の方に、萩原小路という所がありました。石碑が立っており、仮名が付いています、「ハッギャランシュッ」という仮名を付けております。

浜崎 小路と書いて？

小川 小路は「シュッ」と読ませております。

浜崎 仮名が付いていますか？

小川 はい。「シュッ」。飴屋小路（アメヤンシュッ）とか中小路（ナカンシュッ）というのが昔ありまして、私どもの小さい頃、「シュッ」というのは竹カンムリの「筋」じゃろうと思っておりました。今になってみると「ショウジ」が訛って「シュッ」になったんだなあ、と考えているわけです。

浜崎 「筋」も当て字かも知れんけど。筋と思うちょっとたのが、今までやった。

小川 『鹿児島市史』の付録に明治三十年の地図があります。それを見ると中小路（ナカショウジ）飴屋小路（アメヤショウジ）と書いてあります。小路（ショウジ）が訛って「シュッ」となったんですね。

松浪 ライオンズ=クラブが立てた小さな石柱、私も「筋」というのを本当に確認せにゃいかんとは思いますが、確かに竹カンムリの「筋」という字も見受けるような気がします。例えば、中央高校の前の通りですかね、猫薬師筋。「ネコヤクシノコスジ」あるいは「ネコヤクシノコミチ」と、いわゆる小路（ショウジ）ですね、そのように書いてありますして、読ませては「ネコンクソスッ」と。猫薬師にルビを付けてあるものは竹カンムリの筋が出ていたような気がするので、もう一度確認せにゃいかんなと思いながらお聞きしてたんですが。

小川 明治三十年の地図を見ますと、猫薬師小路（ネコンクスシショウジ）となっております。それで行くと、小路（ショウジ）が本当ではないかと思

いますね。竹カンムリに書いたのは発音が似ているから結局ああ言う具合になってしまったんですね。

松浪 国分の駅からまっすぐ行った何番目かの筋ですが、肥後先生のお宅のあの通りなんですけどもあれは小路之筋（コミッノスッ）となっておるんです。

平田 「コミッノスッ」？

松浪 「コミッノスッ」となってるんです。

平田 小路と書いて「コミチ」と読みます。

松浪 はい、小路（ショウジ）と書いて「コミチ」と読む、これはどういうふうに解釈すればいいのかなということも、今思いついで考へているんですが。「コミチノスジ」。

平田 肥後先生の住んでおられる所が小路之筋です。眼の具合が悪くなつたとかで、今日は肥後先生はお見えでないのですが。

江平 そう言へば、普通名詞でも「道筋」というから、その辺も考へにやいかんかも知れんですね。

松浪 それからもう一つ筋について。先程の温湯小路（ヌリコウジ）・「ヌリショウジ」ですかね？

平田 温湯（ヌルユ）？

松浪 こっちは小路（コウジ）の方ですか？

平田 温湯小路（ヌリコッ）？

松浪 温湯（ヌリ）ですね。

永山 温湯（ヌルユ）と言ふんじゃ？

松浪 地元じゃ苗字の場合は「ヌルユ」ですね。

平田 上温湯（ウワヌイ）・下温湯（シモヌイ）

松浪 地名の場合と人名の場合とでは違つてゐるかなと思ひました。喜入では横小路（ヨコンショウジ）、人名では横小路（ヨココウジ）。

平田 ははあ。

松浪 横小路（ヨココウジ）で横小路（ヨコショウジ）という読み方はあるかも知れませんけど、普通、横小路（ヨココウジ）が人名の呼び方みたいですね。それから上川路（カミカワジ）・下川路（シモ

カワジ）。指宿の方に、こう言う苗字は多いのですけれども、「川」は「コウ」と言います。川路（コウジ）・上川路（カミコウジ）・下川路（シモコウジ）、と。実際は、上小路（カミコウジ）・中小路（ナカコウジ）となるわけです。確か、人の名前の場合は、上川路（カミカワジ）・下川路（シモカワジ）となります。部落の名前は川路（カワジ）です。川路（カワジ）は「コウジ」であるべきところを、ここだけが人の名前と同様に川路（カワジ）と変つてゐるところをどう考えたらいいのか。ちょっと気にかかるのですが。

小川 上川路（カミカワジ）という字ですね。それから字下川路（シモカワジ）という地名があります。その辺に住んでゐる人が上川路（カミカワジ）姓を名乗つておられます。字下川路に住んでゐる人が下川路（シモカワジ）姓を、まあ、名乗つたわけですね。えー、地名を名乗つたわけです。それで、私の考へでは、もともとは上川路（カミカワジ）は上小路（カミコウジ）の転化したものじゃなかろうかと。下川路（シモカワジ）は下小路（シモコウジ）の転化したものじゃなかろうかと推測してゐるわけです。私も最初はどっちがどっちじゃろうかと実は迷つたんですが、他にも温湯小路（ヌリコウジ）というような所がありますので、やはり指宿は小路（コウジ）というのが優勢だったのだというふうに考へておるわけです。

永山 今も出ましたけど、温湯（ヌルユ）とは読まないんですね。温湯小路（ヌリコウジ）と読むんですね。

小川 ああ、温湯（ヌリ）。

永山 温湯（ヌルユ）とは読まないんですね。

小川 もともとは温湯（ヌルユ）と呼んでおったものと思ひますがね。

永山 人の名前は？

小川 温湯（ヌルユ）が訛つて「ヌリ」と。

平田 意味は温湯（ヌルユ）でしょうね。

永山 人名・苗字の場合は温湯（ヌルユ）です。

小川 ははあ。

永山 温湯（ヌルユ）、下温湯（シモヌルユ）さんって、いらっしゃいますから。

平田 うちの近所にもあるんですがね。下温湯（シモヌイ）どん、と言いますよ。

永山 温湯（ヌイ）ですか？

平田 下温湯（シモヌイ）と言いますよ。

浜崎 方言じゃ温湯（ヌイ）ですね。

小川 ああ、方言じゃ温湯（ヌイ）ですか？

永山 上温湯（カンヌイ）ち、言もんでや。上温湯（カミヌルユ）を。

平田 しかし、ゆっくり読むと「ヌイ」は上温湯（カミヌルユ・ウワヌルユ）とか下温湯（シモヌルユ）と読むんでしょう。

永山 それが、まあ、本来でしょう。

平田 そう読ませたんでしょうね。地名が先であって、後で苗字を付けたんでしょうね。

小川 青森県にも温湯（ヌルユ）という地名があるんですね。

平田 ああ、そうですか。

永山 温泉の出る所かね？

小川 じゃろうと思うんですがね。

平田 それは、そうですよ。温泉がヌリかった、と。（笑い）

吉川 私は在職中に、指宿に4年間おったことがあるんですが。私はこれを見てですね、温湯（ヌクユ）かと思ったんです。

浜崎 「ヌクユ？」

吉川 あっちの方に、温水（ヌクミズ）という所があるんですね。

平田 鹿児島じゃ生見（ヌクミ）なんですね。

浜崎 ははあ、意味は「ヌクミ」ですね。

吉川 生見（イケミ）じゃなくて、これは生見

（ヌクミ）。

永山 温湯（ヌルユ）ですよね。

平田 でも、指宿じゃ温湯（ヌイ）と呼ぶのでしょうか。

永山 温湯（ヌイ）。「ヌリ」。

平田 温湯（ヌリ）ですか。

浜崎 いや、仮名が付いています。「ヌリ」でしょう。小川先生？

永山 方言じゃ「ヌイ」ちもんでやな。

小川 まあ、正式に言ふ時には、温湯（ヌリ）と申しております。（笑い）

平田 鹿児島弁は難しい。（笑い）

片岡 プロ野球の選手に居るんじゃないですか？下温湯（シモヌルユ）とか。

永山 はい、下温湯（シモヌルユ）。

片岡 あれは、下温湯（シモヌイ）とは言わないのでは。

平田 まあ、そろ読むでしょうね。全国に紹介する時には戸籍で何と読むかなどを確認してアナウンサーは紹介したんでしょうね。

片岡 ライオンズ=クラブの標柱に、小路（ショウジ）と書いて「シュッ」と振り仮名を付けてあるのに非常に抵抗を感じたんですが。私は大正生まれなんですが、平之町育ちで、新納殿小路（ニイロドンノスジ）に居つたんですね。新納殿の「スッ」だった。「スッ」で「シュッ」とは言わなかった。「シュッ」というのは全然聞いたことはないんです。

浜崎 当て字の筋（スジ）？

片岡 いや、「ジ」は言わない。「スッ」。「伊集院どんのスッ」「飴屋んスッ」。「シュッ」と、誰が言いよつたのか、不思議でならないのですが。

平田 最近の表現ですね。

片岡 読み方も「スッ」になつたんじゃないかなと思うのですが。

平田 さっき、松浪先生から出されたんですが、

か。東市来あたりはどうですか。
永山 宇都小路（ウトンスジ）というのがありますよ。東大小路（トウダイスジ）とも云われるもので、東大が何人か？その小路は、5名か、何名か？有名な小路ですが。

平田 喜入に行ってもいいし。しかし、喜入を案内してくれる人は？ 江平先生は喜入にくわしいですね？

江平 いや、いや。喜入に二年程居ましたが、あまりくわしくはありません。

平田 見学と言っても、まあそうですね、7名ぐらいしか行かないのですけど。鹿児島近辺もやっていないんですが、桜島の大字を毎回一つずつ調べて

行くのもいいなと思ってるんですけど。有村からずっと回って行けば、何年かするうちに桜島を一周してしまうとも考えているんですが。東市来の小路を見たいという方は、いらっしゃいますか？

永山 ほんとに小さな道ですよ。自動車がやっと入れる——。

平田 場所は改めて連絡します。永山先生も長く病気をされていて、今日は1年半ぶりに出て来られました。花園先生も長く入院されていたとか。私も2年前入院しましたし、肥後先生も今ちょっと具合が悪いとか。皆さん、気をつけて下さい。のんびりやりましょう。じゃー、今日はこれで。

指宿地方の小路（コウジ・ショウジ）について 小川亥三郎

鏡味明克氏「コウジ」と「ショウジ」— 小路のよみ方の変遷と分布一 (昭59)

指宿市は昭和29年旧指宿町と旧今和泉村とが合併して市制を敷いた
旧指宿町地区

大字十二町

- ① 中小路（ナカコウジ・ナカゴッ） 部落、中小路公民館あり。
宇上川路・宇下川路（上小路・下小路の転写）
② 下り小路 ニオ中 三オ中 嘉永七年早馬どん石塔。今の下里部落

大字 東方

- ③ 温湯小路 ニオ中 三オ中 明治十四年早馬どん
今の温湯小路（マリゴツ）部落

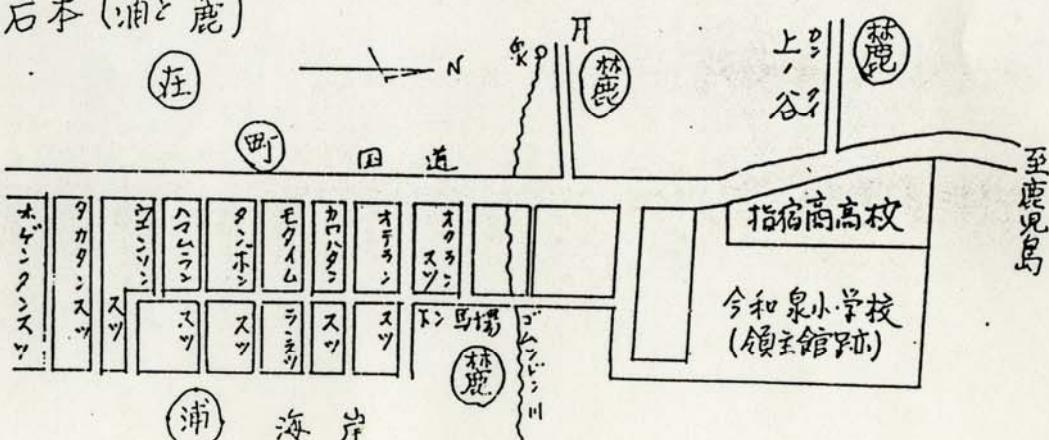
- ④ 宮小路 三オ ニオ 嘉永三年早馬どん。今宮吉部落
⑤ 道上小路 ニオ 三オ 嘉永五年早馬どん。今道上部落

大字十町

- ⑥ 追田南小路中 寛延二年(1749)田の神像。今南追田部落
⑦ 宮十町小路 元文五年(1740)田の神像。今北十町部落

旧今和泉村地区

大字岩本（浦と麓）



大字新西方 (麓の南西 1.5K)

① 細田小路 万延二年正月吉日 奉寄進 庚申供養

新西方村 細田小路 二才中 今の細田部落

② 渡瀬小路 明治四十四年九月十六日 貯金借付帳

渡瀬諸中 渡瀬小路人名簿 (24名) 今渡瀬部落

喜入町の小路

麓地正

承応二年(1653)自麓から移って新しく麓集落を建設した

横小路(ヨコシユツ)・縦小路(テンシユツ)・八木殿小路(ヤマトシユツ)

麓からやや離小所

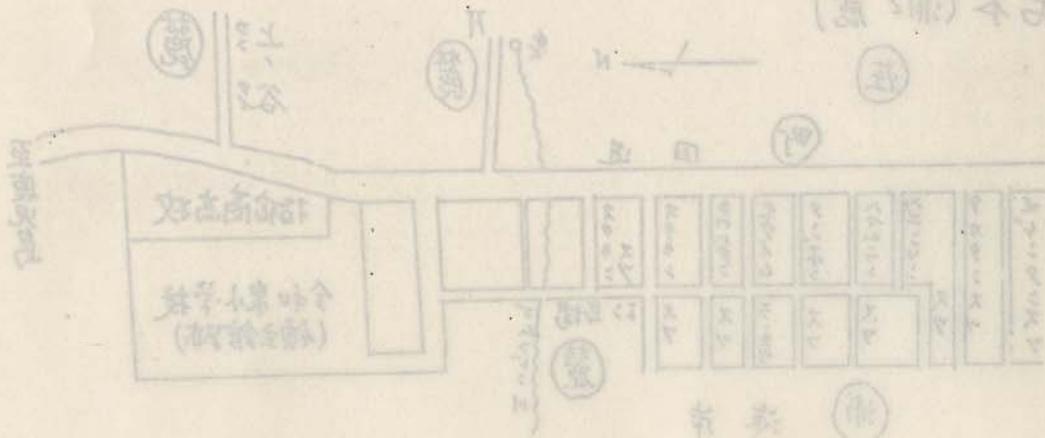
① 上ノ小路(カンノシユツ) 大正の末期頃まで呼はれていたが、今は大丸(オウマル)部落

麓から約400mの東

② 享保二年四月十三日 御領原土屋敷余地に新小路を開き云々(肝付文書)

御領原は 麓から約500mの南

新小路は地名ではなく新集落の意



地名研究会報

第27号

主催 林・大英義助・千賀白西・文南西・等
元作・集善・峰・表実田・高木
民太林吉・脚・鈴山・二家口・美濃田・富忠
歌人元詩(桂城)・高支田(源助)

発行日 平成2年3月11日
鹿児島地名研究会

- I. 第27回例会 平成元年12月10日(日) 10:00~12:30 加治木町東部の巡検
(参加者) 青柳俊二・池田信夫・内山恵一・江之口汎生・小里田ハマ・木場武則・富永清志・花園正志・浜崎盛雄・平田信芳・本田頑孝・松田誠・吉川法水(計13名)
- II. 巡検地 性心寺――能仁寺墓地――精矛神社――日木山石塔――二瀬戸登りロード
安国寺――竜門の滝――護国神社

性心寺と与謝野鉄幹晶子歌碑

平田 説明をお願いします。

松田 説明するって。どうして此處にあるかと言うと、鉄幹のお父さんがこここの住職だったそうです。

江之口 鉄幹というと、与謝野晶子の?
松田 鉄幹が、子供の時自分が植えたタブの木(寺の西側:石塀の脇。石碑の南10mばかりの位置にある)が大きくなっているのを見て、加治木に来たんじゃない、帰って来たんだ、と歌った。

小里田 峠って、あそこの頂上かしら?
平田 鹿児島への道でしょうね。加治木の峠といふのは。こっちから越えて行くんでしょうね。

松田 この碑に詳しく書いてあります。誰か朗読して下さい。

江之口 あとで文章にすればよかっじゃ。
平田 そう。誰か来て写して下さいな。昨日日本屋で見かけたけど、与謝野晶子の歌集が岩波文庫にあるんだね。

小里田 あります?
平田 歌集があります。その中から鹿児島関係を引き抜けばいいのだがなと思いましたけど、買おうかなとも思ったんだけど。

(与謝野鉄幹晶子歌碑) 加治木朝日町所在

老の身の相見てうれしをさなくて

加治木の寺にうゑしたふの木 寛

加治木なる五つ嶺のなみがたの

女めくこそあはれなりけれ 晶子

(左側面) 木のまえに立つて木の木

与謝野鉄幹の歌 ひきぬけの間隔の子

わが父の名を知る人に逢ふことは

兄弟のごとなつかしきかな

わが父が加治木に住みし六十ちにも

年ちかづきて加治木には来ぬ

をさなくて紙鉄砲をつくりたる

金竹いまは杖にきらまし

見上げつつ夢かとぞ思ふをさなくて

加治木の寺に植ゑしたふの木

与謝野晶子の歌 ひきぬけの木

鹿児島へ夕日を追ひて行くやうに

車やりたる加治木の峠

(裏面) 木のまえに立つて木の木

加治木には来るにはあらず帰るなり

父と住みける思出のため

と与謝野鉄幹が詠んだのは昭和四年八月、四十数年

ぶりに加治木を訪れた時のことであった。鉄幹は明

治十四年、九才の時、父礼巣に従って加治木の説教

所、現在の性応寺)に来住。ここで翌年の秋まで暮したが、この歌の中の「来るにはあらず帰るなり」ということばには、性応寺で過ごした幼い日々への断ちがたい追憶と加治木へのひたむきな懐郷の念がこめられている。その時の来訪を「なつかしき人あるがため山あるがため」とい、「わが父の名を知る人に逢ふことは兄弟のごとくなつかしきかな」と詠じているのをみても、加治木の山河と人への愛着の深さがしのばれる。彼の感動が更に高揚したのは「予が十才にてこの寺を去る数月前に附近の山より移植したるたぶ(樟の一種)の若木の長二尺ばかりなりしが今に存して繁茂するを見」た時であった。

わが手もて植ゑし二尺のたぶの木も

年経て訪へば三丈の幹

老の身の相見て嬉しをさなくて

加治木の寺に植ゑしたぶの木

と、その瞬間の感動を詠じた夫鉄幹の心の波動の合わせるように妻晶子も

加治木なる五つの峰の波形

女めくこそあはれなりけれ

と詠じている。

鉄幹晶と加治木とがこのような深い因縁で結ばれていることは郷土加治木の誇るべき歴史的事実であるが、移りゆく時の厚みにへだてられて知る人も少ない現状に鑑み、今日、石文を建て、そのことを刻み、加治木の文化振興の一助とするために町内外在住の有志三百六十余名から寄せられた浄財を基にこの歌碑を建設した。

昭和五十七年四月

(発起人)新納教義・福村厚行・阿久根重雄・安満良明・稻田進・壱岐正治・岩崎偉・岩沢光男・大山綱男・榎園明・大井千尋・岡山秀樹・岡山みちえ・岸野広・島津久英・下猶篤男・諏訪国義・瀬川新義・園田竹次郎・園田正春・鶴田末一・

永井準・西清文・西迫雅子・能勢英次・林敏克・東国雄・福元武巳・町田実秀・牧道孝・松元忠富・松田繁美・構口宏二・山崎昭・吉村次男

(設計)法元六郎

(揮毫)町田実秀

(施工)桃木野石材店

(付記)花崗岩(黒御影)製。

横幅151.3cm・厚さ60.3cm・高さ90.8cm

桜樹山性応寺の西北隅にある。

タブの木の根元に寄付者の名前を刻んだ別の石碑もある。

能仁寺墓地

平田 能仁寺墓地には、みごとな加治木石の作品が並んでいます。穴のあいたのが白石、すなわち二瀬戸石(フセドイシ)。灰色の石で、目のつまっているのが黒石、桃木野石(モモキノイシ)。加治木石と呼ばれるものには、黒石と白石の二通りがあります。加治木石と鹿児島産の反田土石(タンタドイシ)が判るようになれば、県内の墓石は大体判ります。

浜崎 「フセド」ですか。

平田 「二」の「瀬戸」ですね。これも二瀬戸石です。鳥居はほとんどが二瀬戸石です。二瀬戸の麓まで、あとで行きます。地図に書いてあります。二瀬戸石は白石。桃木野石は黒石と言います。これは採りたての時は真っ黒なんですが、乾燥するときめの細かい、うすねずに色になります。これは良い石ですけどね。

木場 こっちは何だって?

平田 桃木野石。上にのぼって(墓地に)行くときれいな五輪塔が並んでいます。

本田 御影石みたいに固そうな感じだけど。

平田 いや、最初は軟いですよ。時間が経てば経つほどだんだん固くなるんです。

花園 どこで出るのですか?

平田 加治木町桃木野です。

花園 桃木野で出るから、そういう名前が付いたのですか。

平田 そうです。『三国名勝団会』に石が書いてあるのは、二瀬戸石と桃木野石だけですからね。有名な山川石のことは、全然書いてありません。

能仁寺墓地のことは、この説明板に書いてあります。加治木島津家の初代から十一代までの墓があります。朱筆で記したのが本家を繼いた殿様です。加治木島津家の第四代が島津家第二十四代の重年ですね。木曾川工事で苦労した殿様です。第五代の久方という人が本家を繼いで、有名な重豪になります。天文館や演武館などを作る殿様。蘭癖で有名な殿様ですが、ここから入ったから思いきったことをやるわけですよね。本家に後繼ぎがない時は加治木島津家から後繼ぎを出すという格式の高い家です。その代々の墓地だから、もっと見直すべきですね。

江之口 島津亜流やね。

平田 そうだね。

江之口 島津本家を繼ぐ予備軍。

本田 それにしては、管理が行き届いていませんね。

平田 加治木の人は居らんけな?(笑)

松田 加治木には加治木島津家の子孫が居るんだけどな。

平田 子孫が居る?

松田 はい、子孫が居るんだけど。加治木の殿様と言っておいやっとですけど。

本田 ここで一番古いのは?

平田 一番古いのは、あれだ。この説明板に書いてある。それから、この石は反田土石と云うて、鹿児島産の石です。

木場 えー。

平田 恐らく反田土石を加工していた石工が加治木に移って来て、桃木野石をとり始めた。そういう

ことになるでしょう。今日は川内の人が多いので申しますが、川内の方々は楠元石を確實に理解して欲しい。どの辺まで楠元石の墓が広がってるか、というのを調べたら、新しい郷土史が眺められる。楠元生まれば居らせんか?(笑)

本田 楠元石というのもあるんですか?

木場 それはありますよ。

花園 最近鹿児島では赤い石垣が目立ちます。

平田 それは荒平石という。鹿屋の荒平で採れる石です。石垣ではそれが流行ってるようですね。

えーと、日木山洞穴は崩れているので現場には行きません。

精矛神社

平田 精矛神社の鳥居は、二瀬戸石製。明治二十六年に作られたものですから、古い方です。国分高校の裏手にある伊勢神社の鳥居が明治二十四年に奉納されたもので、今まで見た限りでは一番古い。これはその次に来るものです。それから、二瀬戸石製の鳥居は、鹿児島市では越峯神社・松原神社で見られます。

えーと、境内の奥の方に手水鉢と礎礎がありますから、そっちの方へ行きましょう。

花園 本殿の左側の生け垣一帯は、昔、日木山窯があった所です。磁器を焼いた。(神社脇の民家で老婆に尋ねたが、窯跡・灰原などについては明確なことは聞き出せなかった。)

小里田 二瀬戸石というのは、どこで探ったのですか?

平田 精矛神社の裏山の向こう側。蔵王岳の麓にある山で探ったのが二瀬戸石です。山全体が二瀬戸石の産地だったのです。今日は二瀬戸石と桃木野石を憶えて帰って下さい。二瀬戸石は耐火性にすぐれていて、耐火レンガを作る人たちからも見直しの話があるほどです。昔、八幡製鉄所で熔鉢炉の基礎に使ったそうです。

本田 これは何に使ったんですか？

平田 碾礎とは大きな石臼のこと、これで粉をひいた。要するに、メリケン粉を作るわけ。小麦粉を作ったんですよ。

本田 朝鮮から持って来た？ 重いものを、よくも持て来たものだ。

平田 舟底に置いて、ひっくりかえらないようにバランスをよくするための重しにしたのでしょうかね、手水鉢も碾礎も。そして結果的に朝鮮から記念に持ち帰った石になったのでしょうか。ああ、ここに小さな池を作ったんですね。だから、ここに据えたんだね。

小里田 これで何をしたんですか？

平田 これは碾礎（てんがい）と言って、もともとは中国でロバに引かせた石臼です。唐の玄宗皇帝の頃から増えて、各地の莊園で見られるようになつたものです。太宰府に觀世音寺という有名なお寺があります。NHKが大晦日に除夜の鐘を放送しますが、よく觀世音寺の鐘を聞かせます。觀世音寺の鐘は日本で一番古い釣鐘ですし、菅原道真も聞いた鐘の音です。学生の頃、觀世音寺の鐘楼の側に碾礎がころがっているのを見て驚いたことがあります。その後行ってませんので、現在どうなっているのか知りませんが。

日木山の大石塔

松田 鎌倉時代、この地を支配した加治木氏のものだと言われています。鹿児島で一番古い、と言うより九州でも一番古い宝塔だそうです。

平田 県内では一番大きい宝塔だろうし、九州でも鎌倉時代の石塔としては有数のものでしょうよ。この加治木の供養塔は。

松田 北側のものが寛元元年（1243年）、南側のものが仁治参年（1242）の銘が入っています。高さは、北側のが2.3メートル、南側のものが2.4メートルだそうです。

平田 二瀬戸石を使用した石造物としては年代が最も古い。この石塔があることで、二瀬戸石の使用を13世紀まで遡ることが出来ます。

東禅寺墓地（肝付氏墓）

平田 戦国時代の末期、加治木および溝辺を支配した肝付氏の墓がありますが、今日は省略してそのまま通過します。日を改めて出掛けて下さい。大隅国を支配していた肝付氏は、島津氏に敗れて本家はつぶれます。庶子家が加治木に移されたわけです。さらに肝付家は、江戸時代のはじめここから喜入に移され、幕末まで喜入を支配することになります。

湯湾岳遠望

松田 さっき、性応寺にあった与謝野晶子の歌に五つの峰と書いていましたが、湯湾岳の尾根が五つの峰に見えるので、そういう呼び方もあったそうです。それから、湯湾岳はもともとは岩之嶽。「イワノタケ」から「イワンタケ」になり、それが「ユワンダケ」に訛ったんだろうと思います。

平田 なるほど、その解釈はすっきりしている。

田之神

松田 この田之神は、数年前東京で全国の木像・石像・銅像などの「ほほえみ」と言いますか笑顔のコンクールがあったそうです。その笑顔大会で日本一になった、「ほほえみ No.1」です。

平田 二瀬戸石を使った田之神は、あまり例がない。この辺の田之神は、ほとんどが桃木野石です。作者は名島嘉六と推定されています。田之神の作者が推定されるのは珍しい。田之神のほとんどは作者不明ですが、素人ではなかなか彫像は作れないと思います。

それと、ここから山に入って行けば、二瀬戸の石切場跡に出ます。坂道はきれいな石畳の道になっていますが、ほとんど人は通りません。上の方に行くと、石を切った丸鋸がさびついたまま崩れかけた小屋に残されています。今日は登るのに時間的余裕が

ありませんので行きませんが、そんなに遠くありません。いつか出掛けみて下さい。

安国寺

平田 室町時代のはじめ、足利尊氏・直義兄弟が政治権力を握ると、夢窓国師のすすめもあって、後醍醐天皇の冥福を祈願するために、国毎に安国寺を建てさせました。奈良時代の国分寺に対応するものです。薩摩国の安国寺は川内市中郷町にあり、墓石が残っている程度です。大隅国の安国寺がここになります。ここには、戦国時代末期の名僧文之和尚の墓があります。国指定史跡です。

これが文之和尚の墓です。墓碑は桃木野石、基礎は反田土石、囲いは二瀬戸石。何だか色々な組合せですね。古くなった石材の部品を新しい違った石で組み立てたから、そうなったのでしょう。

ああ、この碑文は、西村時彦。西村天因の碑文。なるほど、『鉄砲記』を文之和尚が書いたから、その因縁で種子島出身の西村天因が碑文を頼まれたのだな。

木場 これは彫りもしっかりしているし、拓本をとるのにはもってこいのものだ。天気の良い時に拓本とりに出て来ましょう。松田先生、その時には連絡しますから。

文之和尚碑銘

程朱之学、至徳川氏盛行。明倫常正名分、以開中興之運。而其書之始入我国、在鎌倉末造後醍醐朝、玄慧講新註於經筵。文明中、桂菴刻大学於薩摩。三伝至文之和尚。祖述師說、施訓點於四書。所謂文之点是之。文之点四書、出而嘉惠士林、以贊教化。和尚之功也大矣。和尚名玄昌、字文之、号南浦、俗姓湯佐氏。日州外浦人。年甫六歳、入目井之延命寺、夙慧絶人、称文珠童、十三薙髮、師事一翁于州之龍源寺。一翁者桂門月渚之巨擘也。十五負笈、游京。博綜内外典。居十余年、而帰。一翁薦領龍源。当此時、島津貴明公、崇学教士。知和尚邃于儒学、令董

席於隅之正興安國両刹、以備顧問。寵遇尤渥。慶長四年、從松齡公、抵伏見、購大學於京師東福寺。後水尾天皇、聞而召之。命進購新註。八年、陞于相之建長寺。未幾、公召還正興、購學授徒。緇素雲集。時有京僧恭畏者、飛錫此地。墨守古訓、論駁新註。和尚辨難往復、累万余言。一時論學之盛、古未曾有也。和尚居正興十五年、晚董鹿児島之大龍寺。元和六年庚申九月晦日、坐化。距生弘治元年乙卯、世寿六十五。葬于加治木之安国寺。所著有南浦文集・聖蹟図和鈔・日州平治記・毗盧論決勝記等。其訓点、則四書外、尚有素書周易伝義等。其徒如竹刊布遺書、而四書尤行于世、蓋我国列聖、兼崇儒釈、扶翼神州大道、由來久矣。故二者亦相輔並行。与夫支那三教、相爭不同。而伝程朱之学、藉于緇徒之力、以維持世道人心。厥後教學殊塗、互相攻駁、無乃不念佛、爾祖耶。中興以來、儒流多蒙追賞之典、則雖緇徒其毗盧名數、如和尚者亦豈可不闡揚其功哉。明治庚戌秋、加治木士人脅謀修治和尚之墓。將立石以表之。徵銘于予。予為種子島氏支族織部丞時貫之裔、每讀和尚所作鉄砲記、深感先德之不朽。銘詞之請、義不得辭。惟學淺文拙。諾而不果者三年。至此作銘。銘曰、

於邦有道、弘道在人、桂師倡始、風氣乃伸、文翁踵起、南浦之濱、紹前啓後、尊信洛閔、外釋內儒、用明彝倫、帝命進請。厥聲大振、立言閑道、衆知所遵、遺澤糜斬、造士彬彬、後人報本、勤茲貞珉、昭示來世、不磨不磷。

大正二年歲在癸丑十月
多歎 西村時彦撰
錦江義会 同盟教育会 建之
老山武彦書 竹内吉蔵銘

（付記）『加治木郷土誌』pp.338~339に収録されているが、若干の読み違いがある。

竜門之滝

洛陽郊外の竜門に景色が似ているところから名付けられたという。展望所に観音像一体が据えられている。「滝の観音」と言われる。高さ約2尺の坐像で、桃木野石製。背面に加治木島津家第六代久徴(ひな)が出た題に対する秋岡冬日(橋遊)の句が刻まれている。

後光代銘詩

千尺嵯峨雪前 石鎧大士且蓮之
寄言隨喜群遊者 供与花花日擲錢

寛政十一年己未秋九月

錦水源天錫題東海橋遊謹書

『加治木郷土誌』p.312 参照。錦水は久徴の号。

御仮屋跡・護国神社

御仮屋は、その昔、柁城小学校の所にあった。二瀬戸石の石垣と、御仮屋門の石畳が残っている。町立図書館と町立郷土資料館は御仮屋跡の一角を占める。御仮屋門前の道路(館馬場)をへだてた南側に、加治木(柁木)という地名の起源となった老いた樟樹がある。なお、名山樓詩集版木・加治木銭の鋳型・数多くの竜門司焼などを収蔵する郷土資料館はユニークな存在であり、一見の価値がある。

御仮屋跡の東隣にある護国神社には、戊辰之役・西南之役・日清戦争・日露戦争などの戦没者名を刻んだ石碑(桃木野石)・義弘公記念碑(安山岩)・西南之役五十年祭の大灯籠(二瀬戸石)・欄干橋(反田土石)などの石造物が集まっている。

これらの石造物の中に、考えさせられる数字がある。加治木出身の戦死者は、日清戦争7名・日露戦争39名・西南之役166名である。西南之役が鹿児島県に与えた影響の大きさは、この数字だけでもうなづける。

欄干橋移築碑

是石橋者、慶長中、吾祖松齡・琴月二公、此地在城之日、所創築也。俗称欄干橋。距今二百八十年矣。

欄干橋沿僅存擬宝珠数顆。橋石亦口々口、危于人行口々。余与有志輩、謀口資以修築之。結構堅固、悉縁旧口。又傍架板橋、便口道行、兼口之保安。庶幾使二公之遺意、伝于不朽、以永使行人、口口棠之想焉。明治十九年中浣竣工。乃記其概畧、且揭助資人名于左。

島津又八郎 撰
新納時成謹代口

擬宝珠口造	島津 又八郎
金五圓拾一錢二厘	加治木郡役所中
金四圓	有馬 新
金一圓五拾錢	佐藤 八十左衛門
金一圓	鎌田 一郎
全	新納 平十郎
全	曾木 応介
全	新納 二
全	伊藤 □□
全	原田 経二
金一圓	川畑 政右
全	曾木 □□
全	曾木 □□
全	上村 □□
全	松田 □□
全	日野 □□
金八十錢	長井 利直
全	森山 安千代
金五十錢	稻 恒左衛門
全	松田 平六
全	松田 素人
全	松田 正助
全	前田 素志
全	森山 平助
全	木佐貫 市兵衛
全	重久 利左衛門

金五十錢

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

鹿児島地名研究会会員名簿

六十五

青柳 俊二	浜崎 盛雄
池田 信夫	原口 泉
臼山 静夫	
内山 恵一	肥後 芳尚
江之口汎生	平田 信芳
江平 望	二見 剛史
小川亥三郎	本田 親虎
大田 照夫	本田 碩孝
片岡 八郎	藤浪三千尋
唐鑑 祐祥	松田 誠
芳 即正	松浪 由安
霧島 一浩	三木 靖
桐野 利彦	南 清孝
郡山 政雄	宮原 景彦
木場 武則	山口 静也
佐野 武則	山崎 盛隆
下野 敏見	山田 慶晴
富永 清志	吉川 法水
中村 明藏	四本 健光
永山 修一	脇元 東明
永山 徹弥	
西園 一俊	
花園 正志	
花田 潔	

平成元年11月5日

鹿児島地名研究会 現地研修会資料

加治木 の探訪

加治木駅（10:00発）－性應寺－能仁寺墓地－日本山洞穴－精矛神社－日本山石塔－二瀬戸石切り場跡－安国寺－龍門ノ滝－加治木島津屋形跡（12:30着）

1. 性應寺（加治木町朝日町 字毘沙門）

- * 浄土真宗、安満住職（楠木正成の末えいといふ）。
- * 与謝野鉄幹＝老人の身の相見て嬉しさなくて加治木の寺に植えしたぶの木。
- * 与謝野晶子＝加治木なる五つの峰の波形の女めくこそあはれなりけれ
- * 付近には毘沙門町という地名もあったようだ。
- * この寺は明治18年和歌山県より移すといふ。

2. 能仁寺墓地（加治木町日本山 字瀧口）

- * 加治木島津初代 忠朗（家久第三子）他
- * 鳥居が建っている。

3. 日本山洞穴（加治木町日本山 字池袋）

- * 現在土砂くずれのため洞の中は見えない

4. 精矛神社（加治木町日本山 字池袋）

- * 祭神＝第17代島津義弘、神号＝精矛戦建雄命

5. 日本山石塔（加治木町日本山 字園田）

- * 右側＝仁治參年壬寅三月廿五日 1242年
- * 左側＝寛元元年癸卯七月、？日 1243年
- * 加治木氏の供養塔？
- * 蒲生町居住 小山田家の先祖といふ（春秋2度お祭り、命日は10月19日）。
- * 「きびしか神さあ」と付近の古老はいう。

6. 二瀬戸石切り場跡（加治木町日本山 字二瀬戸）

- * ほほ笑みの田ノ神像（二瀬戸石製－白質凝灰岩）

天保年間か、明治年間の作か御鑑定ください。

* 蔵王岳（天王山）の東南に当たる。

* 付近に＜船石＞という字ありて船をつなぐ場所といふ。その石もあり、かきが付着していたといふ。

7. 安国寺（加治木町反土 字岩元）

- * 文之和尚墓－町唯一の国文化財指定
- * 後の山は加治木城跡
- * 足利尊氏一国一寺建立により薩摩は川内、大隅は加治木に建てる。
- * 小字＜獣門＞は東南400mにあり。

8. 龍門ノ滝（ ）

- * 唐人が「漢土の龍門の滝を見るがごとし」に由来するといふ。
- * 西遊記「予漫遊の間に見たる滝にては是を第一とす」とある。

9. 加治木島津屋形跡（加治木町仮屋町 字於里）

- * 現在の松城小学校－護国神社－加治木高校の辺で石垣（二瀬戸石）が残っている。

10. 気になる地名

※ <加治木> という地名

- (1) どこからか船のかじがこの地に流れつき、いつのまにか芽が出て大木となったので桜木－加治木と書くようになったのではないか（『加治木町郷土誌』）
- (2) 加治木は船板（かじき）または舵用の木を産するところから生じた地名と考えられる。「かじき」も舟木と同類の地名とみてよい。舟に關係の深い加治木という地名は海人族とみられる隼人にふさわしい地名というにもなろう。（『大隅國府はどこか』s.57 平田信芳氏）

※ <日本山> という地名

- (1) 大蔵氏ニ肥喜山後家ト見ユ。

※ <錦江> という地名

- (1) 「浪のおりかかる錦は磯山の梢にさらす花の色かな」（第18代家久が黒川岬で詠む）に由来すといふ。

※ <反土> という地名

※ <木田> という地名

加治木の諸職について =なべや、かじや、石工=

—古老からの聞き書きを中心にして—

加治木町 松田 誠

※はじめに

なべや、かじや、石工は比較的調査しやすかった。加治木紙(天神、折田家など)、油屋(小山田古賀家)など難しくなり、紺屋殿屋敷(染物)、ドヤン川原(ロウソク屋)等は地名を残すのみである。

ノホトヘムサシキ

三国名勝図絵に出ている加治木の諸職関係は非常に多い。

- | | | | | |
|----------------------------|------------|----------------------|--------|--------|
| 1. 竜門司焼 | 2. 刀剣諸器 | 3. 鉄砲諸器 | 4. 箭鉄 | 5. 鉄 |
| 6. 小刀 | 7. 煙管 | 8. 農具 | 9. 諸鎔物 | 10. 紙子 |
| 11. 紙諸種 | 12. 傘 | 13. 瓦 | 14. 線香 | 15. 弓道 |
| 16. 馬具 | 17. 酒・塩・煙草 | この他にも諸器用多く出るがすべて記さず。 | | |
| 18. 物産の項に桃木野石と白石(二瀬戸石)を記す。 | | | | |

※ <なべや>について

黎明館(西村道弥・川畠道仁の鉄瓶)——鍋釜類が中心——原料は帖佐のはがね山から運ぶ——明治期になって砂糖しづり機を作成——種子屋久、大島、宮古島、沖縄、台湾へ販売——年間生産高20~30台——戦後 牛車、水車、動力ヤンマー、ディーゼルが登場してオートメ化され昭和28年大島復帰と機に廃業——にせ金作り、天保通宝、琉球通宝

※ <かじや>について

岩原は職人郷士の集落だった——戦後50余軒——にわか鍛冶もいたとい——共存共榮システム①それぞれ専門化(クワ専門、カマ専門等)、②炭屋(燃料提供) + かじや(生産者) + 売子(製品販売)の三者共働——売子は儲けた、頭がよかった——販路(県下一円売り歩く)——徒弟制度(弟子は師匠の墓参など何でもした)——金山信仰——湯舟、フィゴ等がすこし残っている。

※ <石工>について

石は貴重品になった——日本山里部落70余軒——二瀬戸石の性質と用途——採石方法——石工の道具(山道具、里道具)——加世田宗太郎、春男父子及び加世田佐太郎、貞雄父子の製品——石の運搬方法——石は生きている——採石から完成までの仕事の流れ

※ おわりに

加治木という町は、中世以降、鍛冶職を一貫して受け継いでいる町であり、そして、その基盤は古代から形成されていたはずである、と言いたい。さらに、加治木という地名は<鍛冶>と何らかの関わりがあるのかも知れない。

岩原に<今市>という小字があるが、ひょっとすると、年間70日におよぶ市でにぎわったというから、当時の名残りを物語る証拠となる地名かも知れない。

... 石工の作品 (二瀬戸石を使った物) ...

- | | | |
|------------------------|-----------------------|-------------|
| 1. 伊勢神社の鳥居 | 国分市 国分高校の裏 | 明治24年10月17日 |
| 2. 久溝崎神社の鳥居 | 国分市 上小川 | 明治32年正月 |
| 3. 霧島神宮旧地の鳥居 | 牧園町高千穂河原 | 明治39年5月27日 |
| 4. 鹿児島神宮の鳥居 | 隼人町宮内 | 明治40年8月吉日 |
| 5. 精矛神社の鳥居 | 加治木町日本山 | 大正8年1月 |
| 6. 平松神社の鳥居 | 姶良町平松 | 大正9年10月30日 |
| 7. 鶴峯神社の鳥居 | 鹿児島市磯 | |
| 8. 松原神社の鳥居 | 鹿児島市松原町 | |
| 9. 早鈴神社の鳥居 | 隼人町小浜 | |
| 10. 鹿児島市中央公民館の化粧石 | 11. ザビエル公園の石垣 | |
| 12. 南州神社の石灯籠 | 13. 鳥越トンネルの化粧石 | |
| 14. 小鳥神社の社殿 | 15. 加治木駅、帖佐駅、重富駅構内の石倉 | |
| 16. 鹿児島市住吉町の海岸通りの石造倉庫群 | | |

(以上 石の鹿児島 (s61) 平田信芳氏より抜粋)

※ 二瀬戸石 第1号の作品だろう。石工は誰?

大石塔 ······ 加治木町日本山
2基のうち右側が風化が進んでいる。

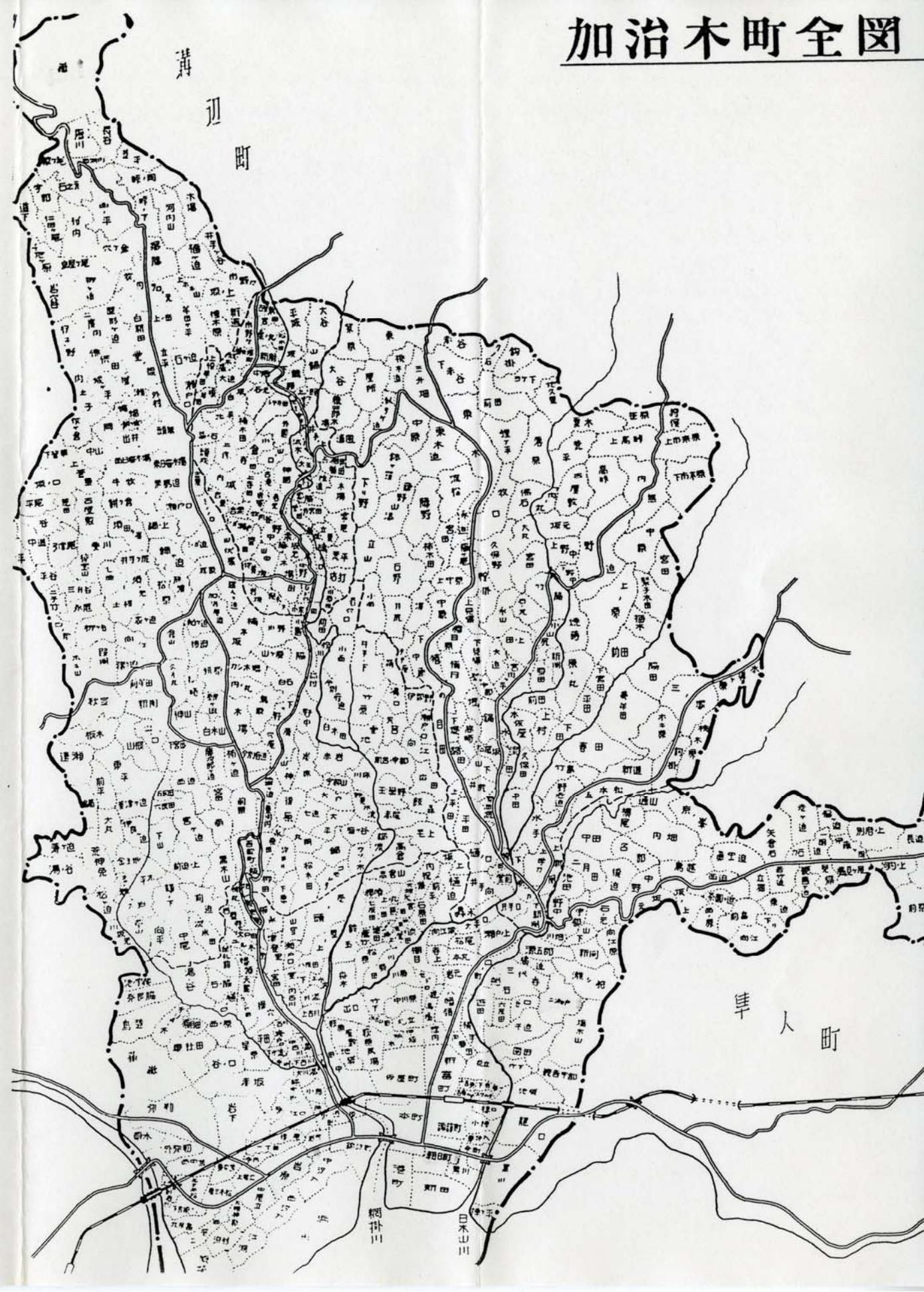
1242
仁治參年?月廿五日

※ 田の神像 ······ 加治木町日本山 天保年間 石工 名島喜六
<ほほ笑みの石像>としては、日本一と展示会で折り紙がついている。

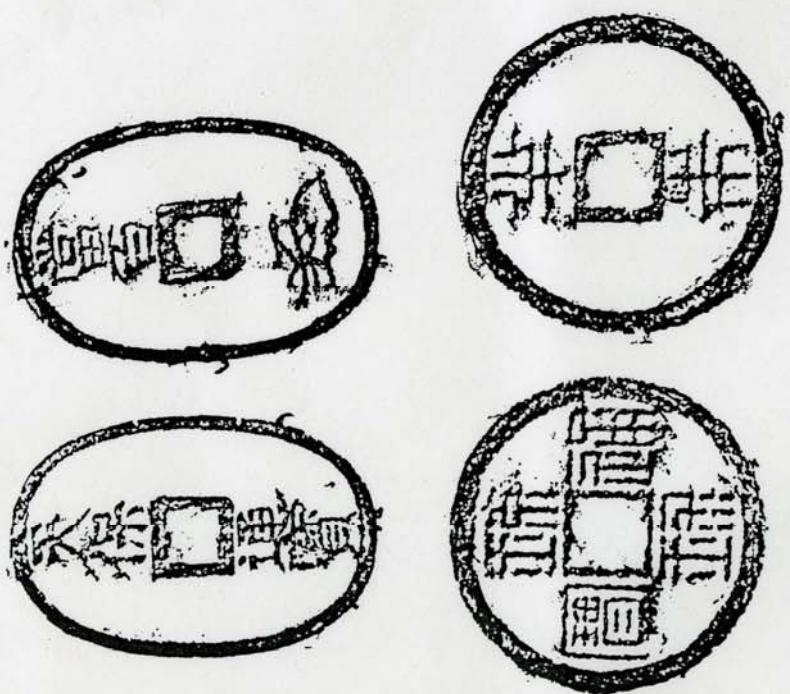
※ 屋久島=「···宮之浦の牛床詣所に宮之浦二歳衆が天保十五年に寄進した鹿児島の加治木石の灯籠がある···」 (『日本の神々』白水社 p.435 下野敏見氏)

※

加治木町全図



銀治屋復原図(加治木町木田岩平) 1.10.14



地名研究会報

第28号

平成2年6月3日

鹿児島地名研究会

- I. 第28回例会 平成2年3月11日(日) 於教職員互助組合会館
(出席者) 青柳俊二・江平 望・大田照夫・花園正志・浜崎盛雄・肥後芳尚・平田信芳
藤浪三千尋・松浪由安・山口静也・山崎盛隆・内村久平 (計12名)

II. 讲評名勝考説会 P.95~P.97

(問題となった地名および事項) 瓢島

平田 瓢島というのは、大きな岩が「神」として祀られており、その岩が「瓢」の形をしているから「瓢島」の名が付いた、と。なるほどと思わせる説明がありました。今日のところで何か問題にしたいことはありませんか。

江平 瓢島には元寇の時、元の船がまぎれ込んで来てるんですね。まあ、今日のところは読むだけでよろしいでしょう。残りの時間は江平先生にあげたいと思います。

III. 問題提起: 平礼石・別府・実方 平礼石(ひられいし)

江平 本を読んでいまして、ちょっと気が付いたことがあったもんですから。三つほど思い付きを。どれ位、時間がありますか。

平田 20分ぐらいあります。

江平 薩摩郡平礼石寺と守護・地頭・郡司との関係。これは五味先生の論文の引用です。ちょっととした説明があったもんですから、これをお借りしたわけです。問題とするのは「平礼石(ひられいし)」という地名です。ちょっと最初だけ読みます。これは十五・六年前に出された「中世史研究会報」のものです。

「川内市隈之城西手、字成岡の丘陵地に中世薩摩郡々司平氏ゆかりの寺、平礼石寺の跡が僅かに残っている。」

鎌倉時代の文書が十六通あって、これは一番最初のものです。建仁三年の古文書です。

薩摩郡司平忠直謹言

譲与 平礼石寺座主職事
七男龜童丸

これに「平礼石寺」と出て来ます。その次の13番目の史料。これは仮名文書で、読み方が判ります。私は、最初は平礼石寺(ひれいせき)と音読みした方がお寺めいていいんじゃないかなと思っていました。この十三番目の平忠仁寄進状に「ひられいしのくわんのん(観音)」とあるもんですから、一体「ひられいし」はどんな意味なんだろうなと思っていました。それはそれで済んでいましたが、四・五年前、『貞丈雑記』を読んで気付いたことがあります。『貞丈雑記』は、ご存知のように、江戸時代に伊勢貞丈(いせいじょう)という人が著した有職故実の本で、伊勢貞丈は鹿児島の伊勢氏と関係があるということが先日の五味先生の話の中にありました。

『貞丈雑記』に、「平礼」という文字を使用した「平礼えぼし(ひれえぼし)」というものが出て来ます。「えぼしのいただきを折りてかぶる事を平礼(ひられ)というなり」と。「何のえぼしにもあれ折りたるは平礼なり」と。要するに「平礼」とあるは、みな「ひれ」と読むべし。「平礼」と書いて、「ひられい」なり、と。これをもって「ひれ」と読

むなり。これは万葉書きで、『ひれとは、えぼしを折ればひらめく故ひれというなり。魚のひれもひらめく故ひれと云う同意なり。古のえぼしはやわらかなるゆえひらめきたるなり。〈古のえぼしはやわらかにて、かしらへしかと引入る故かけ緒を用いす。されば折たる所ひらめくなり〉』。ずっと読んで行けばいいのでしょうか、これを読んでいて、ああそうか、鳥帽子のことかと思ったわけです。読み方は、薩摩国の例は「平礼（ひられ）」。伊勢貞丈は「ひれ」と読みなさいと云ってるので、ちょっと違います。どっちが正しいのかなと思いますが、判りません。薩摩国では、鎌倉時代に平礼（ひられ）と読んでいたわけですが、いずれにしても平礼というのは鳥帽子のことだと思った。鳥帽子岩のことだと思ったわけですね。現在われわれが知っている鳥帽子は固く出来ていますが、昔の鳥帽子は軟く、軟い紐を「ひれ」のまま、折ったままのが付いていた。それを「ひれ鳥帽子」とか「折れ鳥帽子」と云ったのだろうと思ったのです。

要するに、平礼石寺（ひられいしや）というのは成岡（ぬか）という丘陵地に鳥帽子岩と名付くべき岩があって、それが平礼鳥帽子に近い形をしていたことによるのではないか。鳥帽子岳という名を聞いたことがあります、「ひられいし」も鳥帽子に似た岩があったのではないかでしょうか。そこにお寺が建ったもんだから、平礼石寺と名が付いた。ただし、伊勢貞丈の方は平礼（ひれ）と読み、薩摩国では平礼（ひられ）になっておりますので、その辺に疑問が残りますが。平礼石とは鳥帽子岩のことだろう、と思うのです。現在、あるのかないのか。廃寺になっていますから、現地をご存知の方、いかがでしょうか。寺の名前に付きそうな石だから、石だけでもあるんじゃないかな、と思ったりもするんですが。知覧別府（ちらんびゅう）

江平 その次、プリントの下の方。『旧記録』

前編二、を読んでおりまして気付いた史料です。

薩摩国知覧見院内長山・たり水・おとなり廟三ヶ所、依有要用、本物返代新足九十貫文所賣渡申実也、但三ヶ年過候ハ、新足有次第可請申候、仍為後日賣券之状如件

応永十五年^{つゆかね} 八月十九日 玄親（花押）

応永年間ですから、室町時代のものです。応永十五年は、南北朝合一になってからちょうど十二・三年の頃ですから、そうとう古いのですが。えー、知覧見は知覧ですね。昔は知覧見と書いたようです。先程も知覧見とありましたが、仮名書きでも「ちらみ」と書いた史料もあります。長山は、現在は永山と書きます。たり水というのは垂水（たるみ）。大隅半島の垂水と同じですね。まあ、大きな集落です。「おとなり」は、現在、「大隣」と書きます。室町時代の史料に出て来る地名ですので、先年の地名大辞典（角川）の執筆の時に、長山と垂水だけは入れました。「大隣」は入れることがちょっと出来なかった。どうしてかというと、その下に「廟」という字があるもんですから。先程読んだ『寛藩名勝考』にも「廟」とありますが、これはマダレに朝と書きます。廟といえば、これは靈屋（たまや）。孔子廟とか靈廟とかいう靈屋。あるいは廟堂と云ったら朝廷のことになるようですが。何故「廟」があるのか、この「廟」が気にかかるんですね。長山と垂水だけは地名辞典に入れましたけど、大隣は「廟」が付いていて、どうも自信がなかったもんだから、入れなかったわけです。おしいことをしました。

最近、ひょっと浮かんだのは、ああそうか、「別府」のことか、ということです。

平田 ああ、なるほど。

江平 別府（びょう）。現在は別府（びゅう）と云います。ちょうど長山・垂水・大隣は、昔は西別府村と云っていました。現地をご覧の方はよくお判りですが、知覧の南の方に霜出という所がありま

す。西半分が西別府村、東半分が東別府村になります。あの辺には、枕崎の別府、川辺の別府、頬杖の別府など、別府（びゅう）が並んでいます。これは畑作地帯ですね。

で、そうか、別府のことだったのかと思ったわけです。そしたら、鎌倉時代の史料にも「長山別府」というのが出て来るんです。仮名書きでは「べふ」と仮名を付けてあります。「べふ」というのは「てふ」を「ちょう」と読むように、「べふ」で「びょう」。現在は「びゅう」になりますが、「びょう」と読んでいたことになります。「びょう」を「廟」に当てたんだろうと考えると、惜しいことをしたなと思うわけです。これが判っていたら、長山・たり水・おとなり廟と三つ並んだ地名が出て来ていたのにと思います。難しい漢字を当ててあったもんだから判らずに、これは何か神社かなんかがあったのかなと考えました。神社は今でもいろいろな所にあります、「おとなり別府」とか「おとなり廟」とかそんなのを聞いたことがなかったもんですから理解できませんでした。最近、はたと思いついた次第です。これは漢字に悩ませてはいけないという一つの例としてお聞きください。

浜崎 同じ建物を云うのですか。「廟」と「廟」との使いわけは？

江平 そういうわけでもないですが、その場合・その場合に応じて、臨機応変に処理せにゃいかんと云うことです。この場合は当て字で、廟は別府の当て字だったのだと云うことです。

実方（さねかた）

江平 次はプリントの右下の方になります。鹿児島市実方太鼓橋としてありますが、問題にしたいのは「実方」なんです。実方を問題にする前に、まず「太鼓橋」を問題にします。

『三国名勝図会』には「鼓（タコ）橋（府城の東北）精木川の上流、吉野村実方（サカタ）にあり、石板（判

イ）を編み、柱なしの石橋なり、梅雨に於て水激流し、其の勢ひ常の橋にて堪がたし、故にかかる巧みをなして、万代不壞（アキ）の慮をなせり、其形鼓の如し」

『薩隅日地理纂考』を見ますと、

鹿児島郡吉野村「太鼓橋、精木（アキ）川ノ川上実方（サカタ）ニアリ、両岸自然ノ巨岩ヨリ切石ヲ組架シテ柱ハナシ、両岸ノ間狭クシテ洪水ノ時常ノ橋ニテハ保チ難キニ因テナリ、水門円クシテ太鼓ノ如シ」

『鹿児島県地誌』

坂元村「太鼓橋石造長サ四間、広サ九尺、精木川ノ上流本村ト吉野村ノ間ニ架ス、旧大隅路ニ属ス」

現地に行きますと、鹿児島市教育委員会の実方太鼓橋の説明が掲げてあります。

「実方太鼓橋。この石橋は、日本最初のめがね橋で知られる長崎の眼鏡橋（1634）と同時代の寛永年間（1624～1643）に架けられたと言われ、当時は鹿児島と重富方面を結ぶ重要な橋として交通上大切な役割をもっていました。作者は不明で、橋は径間約7.3メートル、幅員約3.8メートルで、美しいアーチをえがいています。」

此の間も行ってみたのですが、家がそばに建てられ、自動車道路になって、上はコンクリート打ち。鹿児島は文化財を粗末にするなあと思ったのですけれども。これだけのものが、市の文化財になっていない。文化財にせにゃいかんと思うのですがね。

平田 そうですね。一番古い石橋ですからね。

江平 史と景の町と云いながら、文化財にしないのは、ちょっと変だと思うのですけど。

問題は、実方というのは一体何なのか、ということなんです。実方（サカタ）というのは自然の地名であるはずはないですから、考えられるのは藤原実方。この実方にしばらざるを得ない。「藤原実方」は平安時代の歌人で、百人一首の中にも歌があります。「かくとだにえやはいぶきのさしも草、さしも

知らじなもゆる思ひを」の作者です。実方は官位は從四位下左近衛中将まで昇ったが、長徳四年(995)藤原行成（三蹟の一人）と殿中で口論に及んだことから勅勅を蒙り、「歌枕見てまいれ」と、陸奥守に左遷され、三年後に任地で没したと『古事談』第二や『今昔物語集』卷第二十四に出て来る有名な人です。芭蕉やら西行法師もその跡を訪れて、いろいろと呪んでおります。

この実方が何故鹿児島の実方とくついたのか、ということを一生懸命考えて、まあ思い出し思い出して来ました。この冬休み、『新古今和歌集』を読んでいましたら、実方の作品で「いかにせんくめぢの橋の中空に渡しもはてぬ身とやなりなん」という歌がありました。「くめぢの橋」というのは役行者が架けた橋で、伝説上の橋ですけども、中途で終って完成しなかったと言われます。結局これは恋のならない、成就しない恋のたとえとして「くめぢの橋の中空に渡しもはてぬ身とやなりなん」と歌われたものです。まあ、恋の歌ですけれども、言葉通りとしますと「どうしようか、くめぢの橋が途中で渡すことが出来なかったように、私の恋もみのらないのだろうか」ということなんです。「この橋を渡ることが出来ない身となるんじゃないか、わからんじないか、どうしようか。」つまり、まだ眼鏡橋が出来ていない以前に、石橋が出来ていない以前に、まあ危ない丸木橋があって、さあ、いかにせんと言った時に「いかにせんくめぢの橋」と気の利いた人がその歌を引用して、実方が歌ったような危ない橋のある所ということで、実方橋という名前が付いたのではないか。時代的に言いますと、ちょうど豊臣秀吉の頃ですね。近衛信輔だと細川幽斎など、有名な歌人たちが島津の領地にやって来て、当時は後進地域じゃなくてレベルが高かった時代です。

そういう橋があったのが、ちょうど三百年ぐらい

前に石橋になり、実方橋という橋の名が地名になって、ずっと今に至ったのじゃないかと思います。橋は実方橋と呼んだと思うのです。というのは、石橋が出来てからは実方橋とは言っていないのです。太鼓橋・太鼓橋と言っている。実方橋となると、危ない橋ですから、実方の方は地名に残って橋には付けられなかった。『大石兵六物語』を見ましても、実方という地名は出て来ても、橋は太鼓橋・太鼓橋と言っている。

以上のことまとめますと、石橋の時期以前に橋があって、渡ることも出来ないようなどうかとて「くめぢの橋」という名が付いた。その橋が石橋になって危なくなってしまったから、太鼓橋と呼ぶようになった。実方は地名に残って今に至った。橋が大丈夫な橋になったものですから由来がとだえてしまったのだろう、というふうに推測したわけです。

(質疑応答)

平田 5分ぐらい余裕があります。質問がありましたら、どなたからでも、どうぞ。

山崎 「くめぢ」というのは?

江平 役行者が作った橋のことです。辞典に「久米路」と出ています。

山崎 どういう意味になりますか。久米路という語意は?

江平 「久米路の橋」、これで一つのまとまった句が出来る。恋が成就しないということのたとえに使われている。要するに、問題になるのは「いかにせん」というところですね。「渡れるかな、どうしようかな」と迷った時に、気の利いた人が「いかにせんくめぢの橋の中空に渡しも果てぬ身」とつぶやいた。下の句に「渡しも果てぬ身とやなりなん」とありますから、それを引用した。この度はどうしようかなと言った時に「このたびはぬさもとりあえず手向山」と歌った例もあり、その方式で「いかにせ

ん」と言った時に「くめぢの橋の中空に渡しも果てぬ身とやなりなん」と続けた人がいたに違いない。そういうことだと思うのです。

浜崎 平田先生、さっき呼んだ『寛著名勝考』の中に「瀬々串」のことを景色がいいからと言ったような説明が――

江平 ちょっと待ってください。まだ私の説明について――

平田 はい。こっちから片付けましょう。問題が二つあります。一つは「平礼石寺」について。これは薩摩郡衙に関連するものです。このことについては黎明館にいる池畠氏が既に論文を書いています。彼があそこを霧島遺跡だったか成岡遺跡だったか、そんな遺跡名を付けました。川内実業高校の裏手の一帯です。平礼石寺の近くに薩摩郡衙があったと。五味先生がそれ以前に文献的に論じておられたところです。成岡遺跡というのは、恐らく薩摩郡衙の一角だろうと。発掘調査後、池畠氏はそのように説明しています。その近くに平礼石寺があったわけですね。彼はさらにこれを薩摩郡避石郷と結び付けています。『和名抄』に出て来る郷名です。

江平 「ひられいし」ですね。

平田 これ（避石）が「ひられいし」に似ているわけですね。

江平 うーん。

平田 この解釈は正しいと思います。

江平 そっちの方ね。

平田 平佐郷じゃない、ということです。

江平 うん。平佐じゃね。

平田 ひられいし郷という郷があって、それから平礼石寺という名前が付いたとみなされます。それと、「平礼（ひられ）」の「れ」ですが、喜入（きいれ）の「れ」同様に鹿児島県には「れ」語尾の地名が多く見られます。また「ひられ」というのは、以前この例会で話をしたと思いますが――

江平 あれだけでは、「れ」が出て来ないですよね。辟（ひらく）という字だけで。

平田 うん。避石（ひらし）としか読みないんでしょうけどね。古代の地名表記は二字に縮めちゃいますからね。「れ」は書かれなかったとみて「ひられいし」と解釈するのが一番いいだろうと思うのです。それから「ひられ」は川内での「南九州の地域文化を考える会」で話したことがあります、「平たく割れる石」を用いた「地下式板石積石室」が川内流域の古墳に特徴的に見られることから、平たく割れる石すなわち「ひられ石」を探る石切場が近くにあったのだろうと思うんです。「平礼石」はそれから付いた地名だろうと思います。

江平 それも一つの解釈。まあ、漢字が似ていたものですから。

平田 鳥帽子というのは、鳥帽子の格好というこどじゃないですかね。例えば、霧島にある鳥帽子岳は、霧の中にこういう形に、二つになって見えるんですがね。こんな形に見えます。鳥帽子岳はこんな形をしています。

江平 鳥帽子もいろいろ種類がありますから。

平田 まあ、こういう形ですが。（板書）

江平 谷山の鳥帽子岳はまっすぐですね。

平田 ああ、そうですか。

山崎 鳥帽子岳というのは形からですか。私も以前は形からかと思っていたのですが、最近は修験者との関係でそういうのじゃないかなと思ったりするんですが。全部が全部調べた上でのことじゃないんですけど。

平田 ああ、そうですか。

江平 しかし。

平田 まあ、普通は形でしょうね。

山崎 形でしょうね。

江平 修験者というのは？ 鳥帽子は中世までは平常着用する帽子ですね。絵巻物を見ると、大抵の

人は鳥帽子を冠ってます。鳥帽子をとられることは大変な恥辱で――――

山崎 この平礼石寺の山号はないですか？

江平 そこまでは気が付かなかったですね。ああ権現山平礼石寺と『三国名勝図会』に名前があげてありますね。

平田 ああ、権現山ですね。実方は、確かに、藤原実方の名前をとったもんだろうと、実方神社の由緒説明板には書いてあるんですけどもね。実方というのが果たしてこの藤原実方なんだろうか。他にも実方はいなかったのだろうか、と思ったりするんですけどね。

江平 有名なのは、この人。

平田 それはそうですね。

江平 それと、この歌は著名だったろうと思うのです。

平田 有名でない実方の名前の付いたことも、可能性はあり得るわけですね。

江平 藤原実方と、実方という地名を結ぶものが何かと言えば、この歌があった。

平田 実方橋ですか。

江平 はい。

平田 実方橋は『大石兵六物語』に出て来ますから、天明年間よりも古いわけですよね。確かに実方の太鼓橋と書いてありますから、18世紀にはあったわけで、県下で一番古い石橋ですね。それから橋の下を見ると岩盤があって、そこに柱穴があいてますよね。昔はもう少し上流の方に木の橋が架かっていたということは考えられますね。藤原実方と結び付けていますけど、藤原実方のもっていた莊園が他

格原といふ地名

「格原（くぬぎばる）という地名」の方に入って行きましょう。今日は肥後先生も樹木専門の立場か

の所にあってもよさそうですね。

江平 これは、結局、歌として知られていたわけですよ。

平田 うーん。

江平 つまり、西行法師も跡をしたい、芭蕉もしたっている。それ程著名な歌人ということです。当時の人々の文化的レベルが高かったのではないですか。

平田 確かにね、鹿児島の文化的レベルは高かったのですが。実方があの辺と、どうして結び付いたのか、判らないのですが。

江平 だから、この歌だと思うんですよ。

平田 古今集の歌ですか。

江平 これは、新古今集の歌です。

山崎 それが地名になっとるというのは、判らない。別問題じゃないですか。

江平 これしか結び付きようがないということを申し上げているわけです。他に何か、藤原実方とあそこを結び付ける――――

平田 何もないわけですね。

江平 あるとしたら、あの辺は薩摩国と大隅国を結ぶ主要な街道ですよね。吉野は牧場もあったし、狩場もあったし、とにかく人々が頻繁に往復する所だったわけです。旧大隅街道ですから。今でこそ、磯街道やら出来ましたけど。歌と関係のあることだけは離しましても、昔はいろんな所に「歌枕」がありますから。

平田 はい。一つの問題提起として受けとめてください。

平田 信芳 ら資料を用意されておられます。鹿児島で「クッの木」と言います。「クッ」というのは、「とげが刺

さった」「クッが立った」というような言い方をします。とげのある木を「クキ」とか「クノキ」とか「クヌギ」とか言うのでしょうか、それを鹿児島では「クッ」と言うわけです。いろんな実例があるようですから、樹木に関しては肥後先生に質問して下さい。肥後先生のプリントの左側の上方に、去年の八月二十八日の切抜があります。白坂繁という三十歳の先生。隼人高専の国語の先生のようです。「クヌギかヒイラギか」という問題提起をされたわけですね。これに対して九月五日、九月十日の記事。最後には格原小学校の校長先生が登場する、という問題提起になった次第です。その時はまだ鹿児島県下の「クヌギ」地名を全部当たってませんでしたので、プリントの「(2) 調査・検討の指針」という七つの視点を立てて調べ始めました。

まず、柳田国男『地名の研究』久木の章を読み直しました。この久木の章は肥後先生の資料の一番最後にプリントされています。柳田国男は「クキ」も「クギ」もすべて同じとみなして、「格」は木ヘンの「枚」と、二つの文字「久木」に分けて考えています。「柴」も「此木」というふうに二字にした地名例のことから、「久木」を「枚」と解釈しております。しかし「枚」という字は「スギ」と読む例もあるので、これと混同しないように点を打つて「格（クキ）」という国字を思い付いたんだろうと一刀両断に片付ける柳田国男的解釈で片付けてあります。肥後先生が付けられたサイドラインのところをご覧になってください。

これ（柳田国男説）は、おかしいなと思ったので各種漢和辞典・国語辞典から「クヌギ」の漢字を引っぱり出すこと、鹿児島地名大辞典から「格」地名を引出すこと、『旧記録』などの史料の中から「格」地名の初出年代を調べること、などを始めました。『旧記録』から地名を引き出すのは、まだ作業途中です。江之口さんは『旧記録』に出て来

る地名を全部フロッピーに入れ込んでますから、彼のデータもあとで紹介します。それから、全国の「クヌギ」地名を拾い出す。まあ、そういう手順で調べ始めました。一つの地名を調べるのに、そこに書いてあるような1~7の手順というものが必要だろうと思います。

「クヌギ」と読む漢字・国字をリストアップする作業を始めて、12月までの段階で25例拾いあげました。25例の段階で、小野先生の『桑寿記念論文集』が出されるということで、「格原」という地名で小稿を書くことにしました。すでに原稿を送っています。

その後、八王子市在住の門さんという考古学者に出した年賀状にその旨を書きましたら、33番にある漢字もあるという返事があり、なる程ということで苗字にも当たり始めました。『日本姓氏大辞典』の中に、26~30までの「クヌギ」という字が出て来ました。それから、これらの文字をワープロで打つとなると、ほとんどないので四苦八苦しながら作字せざるを得ません。31~32は第二水準漢字で入っていましたから、どこかに苗字か地名にあるんだろうと思いません。まだ気付いておりません。また31~32は漢和辞典にもまだ当っておりません。1~25は調べました。何で調べたかというと、『古事類苑』の植物の巻。『古事類苑』には、いろんな漢字が、いろいろな文献から引用されていますから。それから、諸橋轍次の『大漢和辞典』。まあ、そういうものを調べました。それから、『節用集』なども調べました。そしたら、面白いことに気が付きました。

結論を先に言いますが、漢和辞典を見ると、すべて「格（シェウ）」となっていました。「終」と同じで、音は「シェウ」です。ところが、私が持っている『節用集』。『節用集』というものは室町時代に出来た辞書・便覧の類ですが、江戸時代にも刊行されています。私の持っているのは寛政八年のもの

ですから18世紀末のものですが、「格」のよみには「ヒイラギ」の他に「トウ」という音が入っています。「冬」というツクリがありますから当然「格（トウ）」という音があって然るべきなんですが、現在の漢和辞典は、調べた限りにおいてはどれにも載っておりません。『節用集』には格（トウ）という音があるということです。

そこで、どういうことが言えるかというと、現行の漢和辞典では格（トウ）という音は消えてしまった。同時に、格（トウ）に対応して格（クヌギ）という読みがあったのが、辞典類には収録されていないという考え方も成立つわけですね。その想定を出発点として、鹿児島県の「格」地名を調べ始めた次第です。同時に全国的な「クヌギ」地名も調べ始めたわけです。

全国の地名は大字単位ということがよさそうなので、一番新しい平成2年版人文社『日本分県地図』地名総覧から拾いました。それがプリントの2~3にかけての地名です。①櫛（くぬぎ）が、1~29まであります。もあるかも知れません。2枚目に行きまして、②樟を「くぬぎ」と読むのが5例あります。それから③楳（くぬぎ）。これは山形県にあります。④国木（くぬぎ）。これは兵庫県にあります。⑤歴木（くぬぎ）。これが福岡県にあります。「歴木」というのは『日本書紀』にも出て来ます。だから「歴木（くぬぎ）」と書いたのは非常に古いということです。⑥櫛（くぬぎ）は、宮崎県にあります。それから問題の出発点になった木へんに冬は格原（くぬぎる）、これは鹿児島県ですね。それから⑦・⑧・⑨とあって、⑩は九日田（くぬぎでん）と仮名が振ってありますが、これは明らかに「くにちでん」の間違いで、その近くに格山とか格原という所があるので混同していると思います。牧園町万膳の九日田は「くにちでん」で、人文社の地名総覧が間違いです。

それから参考までに、「クヌギ」と読んでよさ

そうな漢字を⑪~⑭にあげました。櫛、これは「イチイ」と読む地名がほとんどです。クヌギと読んでいるのは、⑯宮崎県の例だけです。それから「ヒイラギ」と読むのは京都府付近にかたまっています。櫛（トチ）と読むのも少ない。久木というのは地名総覧に13例ほどあります。

そこで、No.3. の左下のところ。これは四角の枠で囲ったら判り易かったと思うのですが、全国の「クヌギ」地名がどういう所に出て来るかを眺めてみました。No.5. をあけてください。地名総覧から拾い出した「クヌギ」地名の数を府県別に分けてみました。そうすると、宮城・岩手・山形・福島・茨城・栃木・埼玉・東京が一つのグループになります。東北新幹線グループと名付けてみました。青森県以北にはありません。東京からずーっと北に東北新幹線に沿って「クヌギ」地名が見られます。クヌギの植生がそこで見られるということですね。これが一つのグループです。

それから、富山・石川・福井・山梨・長野。これも中部山地伝いで、一つのグループにまとまると思います。ここはクヌギが密生している地帯ですからクヌギという地名が付いても当然だと思うのです。ところが、表の右側に出て来る兵庫・奈良・鳥取・徳島・福岡・大分・宮崎・鹿児島。これらは「クヌギ」地名の散発地帯ということです。

再び No.3. に帰ります。このように「クヌギ」地名の分布は三通りに分けられます。東北新幹線グループと中部高地・裏日本グループ、それから散発地域。この散発地域、③のグループですが、この中で一番多いのは「櫛」という地名です。一番多いから一般的ということで「櫛」の例を消去すると、兵庫の国木、鳥取の樟原、福岡の歴木、宮崎の櫛田、鹿児島の格原。これだけが残ります。福岡の歴木は日本書紀にも出て来る古い形です。それから、宮崎の櫛田（くぬぎでん）。これもほとんどが「イチイ」読んで

いるのに、宮崎だけが「クヌギ」と読んでいる。櫛（くぬぎ）という読みも、古い読みのとみなされます。そうすると、鹿児島の格原（くぬぎる）も古い読みだと考えられるわけです。

今度は、鹿児島県の「格」地名を小字一覧から拾い出してみました。(6) にあります。格（くぬぎ）と読むのが45例ですね。B. 格（くのき）と読むのが7例。それで、52例になります。「クキ」と読むのが21例ですから、全部でいくらになりますか。45+7+21で、83例、現在気についているわけですが、もれがあると思います。83例中45例、クノキまで入れると52例。70%以上が「クヌギ」と読んでいます。そうすると、单なる当て字ではないと思うのです。当て字ならば、一~二箇所でとどまっているはずです。

次は、鹿児島県の「クヌギ・クキ」地名を4枚目の地図に示しました。黒い点がクヌギと読む地名。これは大隅半島から薩摩半島にかけて濃厚に見られます。クノキが若干点在します。クキとかクギと読むのは出水と宮之城あたりにかたまっている。宮之城の格（くき）という読みが注目され、柳田国男のような解釈になったのだろうと思います。大隅半島や薩摩半島の格（くぬぎ）地名の分布を見ると、格（くぬぎ）という文字は单なる当て字じゃない、古くからあった文字だと考えなければいけないということです。他の県では格（くぬぎ）という読み方は消えてしまっただろうが、鹿児島県には五十例ばかりの地名に残っているわけですから地名に残った漢字というのも古い形を残しているんだなど、まあ、一つの化石みたいな感じを受けたわけです。私の解釈は無茶ではないような気がするんですけどね。というのは、私の持っている『節用集』に格（くぬぎ）という音があるのに、現在の漢和辞典は格（くぬぎ）という読みは出て来ません。みんな、格（くぬぎ）になっている。格（くぬぎ）の読みは忘れ去られています。鹿児島県の80例を

こえる「格」地名で、それだけのものがあるということは「格（くぬぎ）」という読みが古くからあったとみなしてよいだろうと思います。

それから、これは『三国名勝団会』巻十一、川内の説明の絵なんですが。左側にある神龜山というのは、新田神社のある龜山のこと。そのうしろの方に「一本格」と書いてあるんですね。現物は一本格とはっきり、きれいに描いてあります。コピーでは消えていますけど。この絵は、山口さん、どこになりますかね。これは、国分寺の裏あたりの山ですよ。絵から見ると。

山口 そんなに近くですかね。

平田 泰平寺でしょ。

山口 えーと、ですね。川内川が、こう入って。川内川の向うの方ですよね。そうじゃないですか。

平田 そんなに遠くですか。称名寺、平佐城。

山口 川向うの方の感じですね、これは。

木場 龜山あたりから見れば、川向うです。川南の方です。

肥後 地名は残ってるのですか？

平田 残ってないです。

肥後 これは？

平田 はい。で、神龜山があって、泰平寺があって、すぐ北の山でしょう。そんなに遠くはないですよ。中郷とか国分寺町あたりの山ですよ。

山口 国分寺には山らしいものはないですよね。

平田 結局、菅原天神がある芸の尾の山ですね。あれしかない。

山口 あの辺ですかね。

平田 あの辺に一本格の地名があったんでしょうね。それから説明を抜きましたが、「クキ」と「クギ」を地図に表わしてみました。これは区別出来ません。

肥後 ああ、「クギ」。私も調べかけたんですけどね。若い人はほとんど知りませんしね。

平田 これは整理した後、「樹の日本史」というのが最近刊行されました。「花の日本史」とか「鳥の日本史」とか、『自然の日本史』というシリーズが今出ています。一冊2500円。その中の「樹の日本史」です。丹羽基二という苗字の研究家が苗字と木の話をとりあつかっていますが、その中にクヌギにも触れたのがあったのでコピーしてきました。丹羽基二氏は角川書店から『日本姓氏大辞典』を出していますが、それもコピーしてきました。「クヌギ」という苗字がこれだけあるということです。これも入れて「クヌギ」という漢字は33例になったわけです。そのうち小野先生の傘寿記念論文集が出るでしょうから、その中に今日話したことはまとめてあります。その論文集よりも今日出したデータの方がちょっと例が増えております。

今一つ、クヌギという地名が『旧記雑録』などの史料で、どの辺から登場するかという問題。さっき眺めた『三国名勝図会』には、一本格が出て来ましたけども。初出年代、すなわち一番古いのは『旧記雑録』前編の756号文書。文永十二年に「久木山田尻」という地名が出て来ます。これが「久木山」という地名の初出になります。同じく前編の1390号文書。それに「青木大格」と出て来ます。これを何と読むのか判りませんが、元亨四年にこの地名が出て来ます。

それから『旧記雑録』前編の11号文書。これは非常に古くなりますけれども、こういう地名が出て来ます。台明寺文書、天喜四年(1056)の文書の中に「訓木尾」という地名があります。これは「クヌギオ」と読めるんじゃないかな、と思うんですが、残念ながら台明寺あたりには「クヌギオ」という地名は残っていません。しかし国分一帯は格・格山という地名が大分あるようですから、これも訓木尾(クヌギオ)と読んでよさそうな気がします。もしそうだとすると、クヌギという地名は大隅國の場合は11世

紀まで遡れるんじゃないかなと、考えます。
あとは肥後先生からクヌギの説明、棘のある木の説明などを頂きたいと思います。以上で説明を終ります。

(質疑応答)

肥後 とげのある木の見本を持って来ましたからまあ見て下さい。

江平 クヌギの木の説明をお願いしたいのですが、クヌギの木は鹿児島にあるのですか。

肥後 クヌギ? 木ですか? 少ないんですよ。現在クヌギと言っている木は、ですね。

江平 全国的に言っているクヌギは?

肥後 南の方は少ないですね。

江平 どういう植生になりますか。

肥後 こっちはコナラの方が多いですね。えーと、「ホサ」というでしょう。あれが多いのです。

江平 いや、木のことはよく知りませんが。

肥後 薪用によく使われている木です。こちらでは「ホサ」といいますけど。

江平 ドングリ系統の木だと思えばいいですね。

肥後 そうです。私も柳田国男さんの『地名の研究』と『樹木大図説』から、クヌギと読むのを引用しました。今日の資料にあげてありますが、イチイとかブナとか、イチイガシ・クヌギ・トチノキ・ヒイラギなど、クヌギという字にあてはまるようなのがあげてあります。木へんに楽ですね、様。こういう字が使われてゐるのです。それから、読みはですね、クノキとかクヌギとか。アンダーラインを引いてあるのがクヌギとかクヌノキですけども。これは植物方言ですね。それから「ク」というのも、とげのことです。それから全国のよび名ですから、クヌギをはっきりそう呼んでるかどうかは疑問です。だからここに下線を引いたのです。それから鹿児島でクヌギというのは、イチイガシのことですね。私の資料の一番はじめにあげてありますけど。様は「イ

チ」と読む例がほとんどです。様は県内ではイチイガシのことですね。

江平 そうしますと、鹿児島の「格」地名は? 全国的に普通言っているクヌギは鹿児島にはないのですか?

肥後 まあ、ないというか。

江平 クヌギ地名としての?

平田 可能性はある。それから、もう一つ。歴史的に気候の変化がありますからね。例えば、紫草は現在こっちにはありませんけども、延喜式や三国名勝図会に産地であった記事がありますし、紫原の地名もあるわけですからね。寒い時代にはこちらでもクヌギがあった可能性があるわけですね。

江平 広葉樹林には?

肥後 そうです。広葉樹林です。落葉広葉樹ですね。やっぱり鹿児島は少ないですね。落葉の広葉樹というの。

江平 落葉はな。

肥後 さっき言ったコナラは多いのです。

平田 クヌギという木はどれをさすのか、つきとめにくいわけですね。

肥後 それで、クヌギというのが現在の植物和名で出て来るクヌギをさすのかですね。私は以前深くは調べなかったのですが、イチイもブナもそれからカシですね。クヌギ・トチノキ。ドングリのなる木がほとんどなんですね。これは思い付きで今から調べないといけませんが、そういう食用になる木の実をなる木をクヌギと呼んだんじゃないかなと思ったりもします。平田先生が沢山調べてくださいましたが、クヌギにどういう木がふくまれているかをひとつひとつ当たる必要を感じます。

その意味で、「ヒイラギ」というのを拾いあげてみました。今、そちらに回しているものです。ネズミサシ。これは背の低い木です。葉がとげ状になっていて、ネズミも通れないぐらい針が付いていま

す。それから、リンボク。これはそんなに沢山はないんですけど、山にあります。葉に鋸歯が付いていますが、「ヒイラギ」みたいに鋸い葉じゃありません。それから、イヌツゲ。これはグミに似ております。今日、持って来ております。それから、上原敬二先生の『樹木大図説』の「ひひらぎ」ですね。この中にもあります。その命名は、葉にさわって、しひれるというか——

平田 ヒライ、ヒライするから。

肥後 ヒラ・ヒラするから、ヒイラギと名を付けたんだとする説もありますし、その次の深津正さんの『植物和名の語源』ですね、「ヒイラギはヒイラぐ木の詰まった表現といわれる。」それで、ヒイラギというのは、特定の樹種をさすのではなく、葉に鋸歯があつたりとげがあつたりして、ヒラヒラする木総体をさした名前じゃないかなというふうに思ったわけです。

それで、問題になっている「格」というものも、特定の和名のヒイラギをさすのでなくて、いわゆるとげのある木、ですね。鹿児島で、まあ「ク」とかあるいは「ビ」とか言いますけども、そういうものの全体をですね、さわってみてささる木を言うんじゃないかなと思っているんですけども。これもまだ問題提起で、煮つまつたものではありません。ご存知だとは思うんですけども鹿児島にはヒイラギはそんなに多くはありません。これがヒイラギです。確かに鋸歯が大きいですね。この若い木にはネズミモチに似た実がつくんですけども。花は十月頃、ふつうのモクセイが終った後で、白い花が咲きます。

山崎 節分に使うのは?

肥後 あれは西洋ヒイラギです。

平田 西洋ヒイラギは、クリスマス=ケーキにも飾る。

肥後 こらがイヌツゲです。枝の先がとがっておりますけどね。さわった時にささります。普通は

見んわけですから。それから、これは格原小学校の校長先生が書いたグミですね。

木場 グミはとげがあるから「クッ」。

江平 「クッ」という所と、「ピー」という所があるんですが。

肥後 あるんですね。

平田 「ピー」という所があるの? 「ク」は聞いたけど。

江平 「ピー」というものもあります。だから「ピー」という所と「ク」という所はどこか分布が違うかなと思っているんですが。

平田 それは違うかも知れんですね。

江平 だから、私はその分布に気を配っているんだけど。

肥後 その分布を調べたんですけど。加世田の高校の先生ですかね。坂田先生。植物の先生ですけども。県の植物方面に詳しいので、尋ねましたらね、混在している、と。

江平 やっぱり。

肥後 吹上にですね、「ピー」という所がある。ショイの葉。これはクスドイエ。これは鋭い葉が付きます。これを、鹿児島では「ショイノクッ」とか「ショイノピッ」と言うんですね。伊作方面では「ショイノピッ」と言う。それでいて、すぐ近くに「ショイノクッ」と言う所があるんだそうです。

江平 私の小さい時、小学校時代に転校し時、「クッ」と言うたら、「ピー」と言われてたまがったことがあるんです。小さい時のことだから憶えてます。(笑い)

永山 これは何ですか?

肥後 クスドイエ、と言うんですけど。

平田 遠慮なく質問、意見を出してください。

藤浪さん、久しぶりだけど、何かないね。

藤浪 私は、あんまり樹種にこだわらん方が良いのじゃないかと思っています。やっぱり薪にする木

を「クキ」と言ったという、あの辺が気になっていきます。

肥後 私もそうですね。県内の木はほとんど薪にするでしょう。

平田 「クキ」でしょうね。

肥後 それを柳田国男先生は「薪」と言っておられますけどね。

藤浪 それと、「クキ」と「クヌギ」があるということについてですね。

平田 「クノキ」もあるしね。

藤浪 クノキとクヌギは、ほんの変化ということですから。

平田 そこに問題が残るわけですね。クキが一番先で、その次はクノキになって、そしてクヌギ。スマ(沼)とノマ(野間)とは、どっちが先?スマ(沼)は落着くから、スマが後じゃないかな。そしたらクキ→クノキ→クヌギになるんじゃないかな。

江平 木佐貫原。キサノッパイというのを、キサヌッパイとか言ったり。

平田 キサノキともキサヌキとも言いますよ。

江平 国木田独歩の国木も。

平田 そうですよ。

江平 久木田もそうでしょう。

平田 みんな、おんなじ系統ですよ。これだけ調べて、50例ぐらい「格(くぼ)」という地名があるので、作った文字と考えるのはちょっと無理だろうということですね。

浜崎 ちょっと。こういう字を書いた文書が出て来るんですが、教えてください。「立黄」、これはグミじゃろかい、サンシュじゃろかい。というのは庄屋さんが、構を修理するから、お前たちはこげなものを使って来いというのに、又木とかドンジとかそういうものの中に、この植物名がある。ほんと、おかしかこ----

肥後 ああ、そうですか。調べてみます。

浜崎 それで、作業道具にするはずがない。何か先っちょの葉っぱか何かで、ソバ切りなんかの材料が混っちゃたじゃろかい。ほとんど、あとは作業道具です。

肥後 ああ、そうですか。

浜崎 棒杭とかですね、四つばっかいありますがその中にこういうのが入っております。辞典を引くと、グミとも読みますしサンショウとも読みます。

肥後 どういう場所ですか?

浜崎 場所じゃなくて、庄屋さんが、お前たちはこれだけのものをそろえろ、という品物の中にこれが出てくる。他はほとんど棒杭とか竹とか柴竹とか混じっているようですが。

肥後 海岸の砂防。そういう所に使う竹?

浜崎 そういう所に使われると思うのですが。

肥後 グミは砂地には強いんですよ。それで砂防植栽に使います。さっき出ました格原小学校の校長先生のグミの話。あれは地形から考えて結び付く点がある。私はヒイラギがあの辺にあるはずがないと思うのです。垂水の方から行けば、浜平に続いて格原になりますが、平野部はほとんどないような所です。それに続く格原ですから、やはり似たような地形になります。砂浜ですね。

浜崎 黄(ぐみ)と読めば、やはり砂防に。

肥後 えー、砂防には使ってますね。バスガイドの方の説明はヒイラギと書いてありましたけど、ヒイラギじゃない。現在言っているヒイラギじゃない。それからもう一つ、私が聞いたのでは「カラタチ」が沢山あったというのもあるんだそうです。これはどうか知りませんけど。これがもし植物地名だとすればですね、やっぱりトゲのある樹木全般をさしているのじゃないかと思うんです。

青柳 垂水の格原ですが、あそこはちょっとした丘になってるんじゃないでしょうか。垂水のものとの麓ですか、あの辺だと思うのですが。バス停に格原

と書いてあったような記憶がありますが、記憶がはっきりしませんけど。その裏に小高い丘があって

肥後 えー、あれは台地ですが。

青柳 いえ、その台地に、手前にちょっとした小高い丘があって、集落のうしろが小さな山になっていました。梅雨頃、ちょうど六月から七月頃でしてそこだけ同じ種類の木がきれいな新緑が伸びてましてね、気になったことがあります。

肥後 ああ、そうですか。

青柳 あれは確か落葉樹でクヌギの種類じゃないかなと思うのですが。冬場に行って確かめてないからどういう木で構成されているか知らないんですが。そのような樹種・木の種類で出来た地名なんというのがあるもんでしょうかね。

肥後 うーん。あの辺は地形から言えばですね、資料の最後の方、小川豊さんの『災害と植物地名』のクキの説明ですね。地形から例の格原を考えると崩壊地名、これが一番合っていると思うのですけれども。

平田 そういう所にクヌギの類が生え易いんじゃないですか。

肥後 いやー、この地域はですね、シラス台地が崩壊した所ですから。本田先生もですね、クヌギという所は崩壊地形じゃないだろかと言っておられます。

平田 クキとかクヌギというのは、歩いてみて共通したものを探さなきゃいけないというわけですね

肥後 地形地名とすれば、現場を見て判断しなければと思うのですけれども。

平田 いや、確かに難しいのは、植生地名からスタートを切ってると思うのですけども、気候が変わると植生も變るのですよね。日本列島の場合、それが多分にあるので、植生地名は否定されがちなんんですけど。地名にあたっている限りにおいては、植生地名が根柢にある地名というのが多いですね。

青柳 もう一つ、いいですか。
平田 はい。
青柳 「タラ」っていう、木があるんです。
肥後 はい。
青柳 あれも、とげがありますね。
肥後 え。
青柳 それで、これは地名とは関係ないんですけど、小山田(こやま)だろうと思うのですが、小山田に三重嶽ってあるでしょう。
平田 三重嶽はあるよ、八重嶽も。
青柳 あの辺の山ですね。一遍きれいで木を切った後ですかね。
肥後 はい、そういう所に生えるんですよ。
青柳 そこに、もう、タラばっかり生えてるんですね。
平田 ふーん。
青柳 「クヌギバル」の説明などに、タラなんかも出て来て良さそうだけど。
肥後 クヌギですか。
青柳 最もトゲがあるのがタラなのに、今まで説明が出て来なかつたのです。関連するのが出て来なかつたような気がするんですが。
平田 タラの木?
肥後 私が引いたのは『樹木大図説』です。これがすべてを尽くしてるとは思いませんが。
青柳 最もクヌギらしいと言ったら、タラの木であるような気がするんですが。
平田 現在では?
山崎 古い話でしたか?間違いないのじゃないかな?
江平 最もクヌギらしい木と言ったら?
藤浪 ヒイラギ(柊)という字がそういう性格なら、その前例があるはずですが。
肥後 このクスドイエもですね、方言では「ショイノクッ」と言うんです。「クヌゲ」というのは、

こっちの方でも方言はないのです。これは「ショイノクッ」というのです。『植物方言集』というのから拾い出すと、ショイノイゲ・ショイノクッ・ショイノビ・ショイノキ・ソウノイゲ・ソゲノキ・ソネノキ・ソンノイゲ・ゾンノキ。各地方によって呼び方が違うわけですから。

それから『鹿児島植物方言集』の中には、「ヒイラギ」というのがないんですよ。それも疑問を持った一つでもあるんですけど。

平田 こちらでは、ヒイラギは自生しないわけですね。

肥後 うーん。まあ、あるにはあるんですがね。そんなに多くはないんですよ。それで、特定に樹種をさしたんじゃないなくて、ヒイラギですね。

平田 クヌギ?

肥後 クノキ。

山崎 昔聞いた記憶なんですけど、椿が春の木で春になると、祭りをする木の種類。椿というのは自然に生えたんじゃないなくて、春の祭りをする所の目印に植えた。それで、椿は春の木と書いてある。木へんに冬と書いて「柊」というのを見たときに。

平田 冬の木ですか。

山崎 はい。だから私は、タキギにするから木に冬と書いて「クヌギ」と読むんだろう、と思っていた。そのように書こうかと思ったんですが、あともう一つ、まとまりがつかなかつたので書かなかつたのですけど。全国的にみると、いろんな漢字がありますけど、それもほとんどは国字になるわけですね。

平田 でしょうね。恐らく、冬だけじゃなく。ああ、そうか。夏は榎(えき)。冬は柊(くぬぎ)。春は椿。秋は何と読むの、木へんに秋は。

肥後 木へんに秋は何だろう。あるんでしょうね。
平田 あるんでしょうね、木へんに秋という字は。それは一つの面白い見方だね。

山崎 それですと、鹿児島の字の使い方は正しいんですね。

平田 そうね、冬の木だから。だから、柊(くぬぎ)という「よみ」はあった。勝手に作りたてた字じゃないということでしょうね。それからさっき『瓊島名勝考』を読む時にも、辞典にない漢字がありましたけど、諸橋『大漢和辞典』なんものをいくらひっくり返しても、ない漢字はあるわけですよね。国語辞典とか漢和辞典にないから、そんな「よみ」はなかったということは言えないんじゃないかな、というのが今度調べた結論です。

肥後 うしろから2番目のヒイラギ。片仮名のヒイラギですね。これは深津正さんという人の『植物和名の語源』から引いたんですけど、この方はですね、昔の東京外語のドイツ科を出た人で、鉄道省に入つて国際観光局という所におられた。それで、停年後、日本電気工業会という所の常務をされて、その時にですね、電気の方ですから照明の方の歴史を

調べられて、『東洋書籍』の本も書いておられますし、それから『木の名の由来』というのも書いておられます。現在、『林業技術』という林業関係の技術者の会の会誌がありますが、それにずっと「木の名の由来」を書いておられます。その方に二・三疑問の点もあったんですから、問い合わせしたのですが、その人も柊(くぬぎ)と読むのは今まで勉強した範囲では判らない、と。そういう勉強しておられる方ですから、平田先生が言わされた通り、恐らく今の辞典には。

平田 それがない、と。

肥後 え、それがないと思うんですがね。

平田 桜さんという方が、これを柊(くぬぎ)と読むのにびっくりしてましたからね。じゃー、そういうことで。結論は、鹿児島県の地名漢字には面白いのがあるということですね。どうも、ご苦労さまでした。

「柊」といふ地名

(1) 南日本新聞「ひろば欄」への投稿

『垂水市柊原という所を通ったら、クヌギバルという地名とのことで驚いた。柊はヒイラギと読み、クヌギの読みはない。柊(ヒイラギ)はモクセイ科の植物であり、様(クヌギ)はブナ科の植物である。昔の鹿児島ではヒイラギとクヌギとは同じと考えていたのだろうか』――平成元年8月末。

(2) 調査・検討の指針

1. 柳田国男『地名の研究』久木の章を読み直す。
2. 各種漢和辞典・国語辞典などから「クヌギ」の漢字・国字例を拾い出す。
3. 鹿児島県地名大辞典の中から「柊」の字を用いた地名を拾い出す。
4. 『薩藩旧記録』などの史料の中での「柊」地名の初出年代を調べる。
5. 分県地図地名索引から全国の「クヌギ」地名を拾い出す。
6. 樹木名・植物名関係の書籍を数多く読む。
7. 地名研究仲間との意見交換を進める。

(3) 柳田国男説

國木=楓、柴=此木などの用例から、久木=枚とみなし、枚=杉と混同するので、柊の字を考えついたのであろう。(『地名の研究』)

(4) クヌギと読む漢字・国字

1. 槩(レキ)・歴木――様に通ず。くぬぎ。『日本書紀』の私記に歴木とある。
2. 槩(レキ)――くぬぎ。『新撰字鏡』。ただし、地名例は「いち」「いちい」。
3. 槩樹――和名久沼木。『和名抄』巻二十。
4. 釣樟(一名、鳥樟)――和名久沼木。『和名抄』巻二十。
5. 槩――くぬぎ。(『書言字考節用集』)
6. 榆――くぬぎ。(『書言字考節用集』)
7. 樽――くぬぎ。くのぎ。(国字)
8. 椋――くぬぎ。(『和漢三才図会』)
9. 椋――くぬぎ。(『節用集』)
10. 槩(ショウ)――「日本ではクヌギとトチの類にあてられる」
(横久崇磨『同名異木の話』P.55)

11. 麻櫟――くぬぎ。(横久崇磨『同名異木の話』P.201)
12. 桧――くぬぎ。(『撮影集』)
13. 苑(チヨ)――くぬぎ、どんぐり。櫟也、栴也、あるいは杆に作る。
14. 桧(サク)――ははそ、おほなら、くぬぎ。櫟也。(『和名抄』、田之・ゆす)。
15. 椋(ク)――くぬぎ。栴、栴樹。地名例は「とち」。
16. 櫟(サイ)――くぬぎ。かしは。栴。櫟櫟。

17. 梔(キヨク)――たら。とりとまらず。ほほ。くぬぎ。
18. 槩(ショウ・ヨウ)――くぬぎの実。櫟に同じ。
19. 槩(クワイ)――くぬぎ。櫟をいう。(足田輝一『樹の文化誌』P.263)
20. 檀――檀山(くぬぎや)・檀原(くぬぎら)の地名例あり。
21. 楠――楠沢(くぬぎわ)の地名例あり。
22. 楠――楠原(くぬぎら)の地名例あり。
23. 此木――此木(くぬぎ)の地名例あり。
24. 国木――国木(くぬぎ)の地名例あり。
25. 楠――「クヌギ」地名考収の出発点となった柊原(くぬぎら)。
26. 采――采沢(くぬぎわ)の苗字例あり。(日本姓氏大辞典)
27. 杠――杠田(くぬぎた)の苗字例あり。(日本姓氏大辞典)
28. 功刀・功力(くぬぎ)の苗字例あり。(日本姓氏大辞典)
29. 九貫(くぬぎ)の苗字例あり。(日本姓氏大辞典)
30. 輿(くぬぎ)の苗字例あり。(日本姓氏大辞典)
31. 桧――ワープロ第2水準漢字。
32. 檀――ワープロ第2水準漢字。
33. 楠――櫻國男氏の私信による。

(5) 全国の「クヌギ」地名――平成2年度版『日本分県地図・地名総覧』による

(1) 樽(くぬぎ)

1. 宮城県角田市小田櫛崎(くぬぎさき)
2. " 角田市尾山大櫛(おおくぬぎ)
3. " 伊具郡丸森町櫛塙(くぬぎづか)
4. " 伊具郡丸森町櫛林(くぬぎはやし)
5. " 本吉郡本吉町大櫛(おおくぬぎ)
6. " 本吉郡本吉町平櫛(たいらくぬぎ)
7. 山形県南陽市櫛塙(くぬぎづか)
8. 福島県安達郡安達町上川崎馬場櫛山
9. " 田村郡船引町櫛山(くぬぎやま)
10. 茨城県北相馬郡藤代町櫛木(くぬぎ)
11. " 西茨城郡岩間町押辺櫛木山
12. 栃木県足利市八櫛町(やくぬぎちょう)
13. " " 八櫛天神(へんじん)
14. " 那須郡黒羽町久野又櫛崎(くぬぎざき)
15. 埼玉県比企郡都幾川村櫛平(くぬぎだいら)
16. " 北葛飾郡庄和町櫛(くぬぎ)
17. 東京都八王子市櫛田町(くぬぎまち)
18. 富山県下新川郡入善町櫛山(くぬぎやま)
19. 福井県坂井郡金津町櫛(くぬぎ)
20. " 吉田郡松岡町櫛(くぬぎ)
21. 山梨県東八代郡境川村三櫛(みくぬぎ)
22. " 南巨摩郡增穂町大櫛(おおくぬぎ)
23. 長野県飯田市竜江櫛平(くぬぎだいら)
24. " 諏訪市湖南櫛平(くぬぎだいら)
25. " 北安曇郡松川村櫛原(くぬぎら)
26. 奈良県奈良市肘塙町櫛町(くぬぎちょう)
27. 徳島県名西郡神山町阿野櫛野(くぬぎの)
28. 大分県大野郡緒方町上冬原櫛尾(くぬぎお)
29. 岩手県花巻市櫛ノ日(くぬぎの)

(2) 檜 (くぬぎ)

1. 宮城県栗原郡志波姫町八樟 (やくぬぎ)
2. 石川県鳳至郡穴水町樟谷 (くぬなん)
3. 福井県丹生郡越前町大樟 (おのぎ)
4. 岐阜県瑞浪市大樟 (ここのぎ)
5. 鳥取県八頭郡用瀬町樟原 (くぬぎわら)

(3) 槿 (くぬぎ)

1. 山形県山形市上椹沢 (かみくぬぎさわ)
2. " 下椹沢 (かみくぬぎさわ)

(4) 国木 (くぬぎ)

1. 兵庫県養父郡八鹿町国木 (くぬぎ)

(5) 歴木 (くぬぎ)

1. 福岡県大牟田市歴木 (くぬぎ)

(6) 樟 (くぬぎ)

1. 宮崎県北諸県郡三股町樟山樟田 (くぬぎ)

(7) 格 (くぬぎ)

1. 鹿児島県垂水市格原 (くぬぎ)

(8) 久乃木 (くのぎ)

1. 石川県鹿島郡鹿島町久乃木 (くのぎ)

(9) 此木 (くのぎ)

1. 石川県鳳至郡穴水町此木 (くのぎ)

(10) 九日田 (くぬぎでん) ?

1. 鹿児島県姶良郡牧園町万曆九日田

「クヌギ」地名の分布

① 宮城・岩手・山形・福島・茨城・
栃木・埼玉・東京グループ——
東京から宮城県にかけてのいわゆる
東北新幹線沿線。ただし青森県以北
には見られない。

② 山梨・長野・富山・石川・福井など
中部高地・裏日本グループ。

③ 兵庫 (国木)・奈良 (櫛)・鳥取
(樟原)・徳島 (櫛野)・福岡 (歴木)
大分 (櫛尾)・宮崎 (櫻田)・鹿児島
(格原)など散発地域。

(参考地名)

⑩ 様 (いちい)

1. 滋賀県甲賀郡甲賀町櫻野 (いの)
2. 奈良県大和郡山市櫻枝町 (いなだらう)
3. " 天理市櫻本町 (いのとまち)
4. " 生駒郡平群町櫻原 (いのはら)
5. 島根県那賀郡三隅町櫻原 (いのはら)
6. 山口県宇部市櫻原 (いのはら)
7. 大分県大分郡庄内町櫻木 (いのき)
8. 兵庫県三原郡西淡町松帆櫻田 (いのた)
9. 徳島県美馬郡木屋平村櫻木 (いのき)

⑫ 格 (ひいらぎ)

1. 京都府中京区格町 (ひいらぎちょう)
2. 兵庫県朝来郡山東町格木 (ひいらぎ)
3. 山口県山口市下小鶴格 (ひいらぎ)
- ⑬ 楠 (とちぎ)・桺 (とち)・栎木
1. 岡山県小田郡美星町星田楠木 (とちぎ)
2. 愛媛県喜多郡河辺村桺谷 (とちが)
3. 栎木県

⑭ 久木・釘・格

1. 高知県吾川郡吾川村久木野 (くきの)
2. " 安芸郡川北村久木 (くき)
3. 福岡県八女郡上陽町久木原 (くきの)
4. 熊本県水俣市久木野 (くきの)
5. " 阿蘇郡久木野村 (くきの)
6. 大分県臼杵郡久木小野 (くきの)
7. " 速見郡山香町久木野尾 (くきの)
8. 鹿児島県加世田市津貫久木野 (くきの)
9. " 薩摩郡入来町浦之名久木宇都 (くきの)
10. " " 宮之城町格野 (くきの)
11. " " 泊野久木野
12. " 曾於郡輝北町市成久木野々
13. " 日置郡伊集院町大田久木野々 (くきの)

(6) 鹿児島県内の「格」地名

A. 「くぬぎ」と読む地名例

1. 鹿児島市五ヶ別府、格原 (くぬばい)
2. " 五ヶ別府、格木平 (くぬひら)
3. " 平川、格木平 (くぬひら)
4. " 平川、格木畑 (くぬば)
5. " 山田、格木馬場 (くぬば)
6. " 吉野町、格木平 (くぬば)?
7. 鹿屋市天神町、格山 (くぬやま)
8. " 笠之原町、格山 (くぬやま)
9. " 東原町、中格木 (なかくぬぎ)
10. " 東原町、小格木堀 (こくぬぎ)
11. " 南町、格川 (くぬがわ)
12. " 上高隈町、格木野首 (くぬぎのくび)
13. " 上高隈町、格木野添 (くぬぎのぞえ)
14. 国分市敷根、格木山 (くぬぎやま)
15. 川内市麦之浦、格木段 (くぬぎだん)
16. 福山町福沢、格木山 (くぬぎやま)
17. " 福沢、格木段 (くぬぎだん)
18. 改竄町万膳、格木山 (くぬぎやま)
19. " 上中津川、格木平 (くぬぎひら)
20. 横川町上ノ、格木原 (くぬぎはら)
21. 川辺町上山田、格平 (くぬぎひら)
22. " 宮、格木小迫 (くぬぎこ)
23. " 宮、格木中尾 (くぬぎなか)
24. " 野崎、格原 (くぬぎ)
25. 大根占町馬場、一本格 (いっぽんくぬぎ)
26. " 神川、格尾 (くぬぎ)
27. 串良町上小原、格木ヶ迫 (くぬぎ)
28. " 上小原、格ヶ岡 (くぬぎ)
29. " 有里、格木 (くぬぎ)
30. " 細山田、格木迫 (くぬぎ)
31. 入来町浦之名、格木田 (くぬぎ)
32. 大隅町中之内、格木 (くぬぎ)
33. " 中之内、格木段 (くぬぎだん)

34. 輝北町上百引、一本格 (いっぽんくぬぎ)

35. 輝北町平房、格山 (くぬぎやま)

36. 末吉町深川、格木 (くぬぎ)

37. 財部町北俣、格丸 (くぬぎまる)

38. " 北俣、格ノ元 (くぬぎのもと)

39. " 下財部、格ノ元 (くぬぎのもと)

40. 東市来町伊作田、格木元 (くぬぎのもと)

41. 日吉町日置、格原 (くぬばい)

42. 吉田町宮之浦、格木山 (くぬぎやま)

43. " 宮之浦、格木迫 (くぬぎ)

44. 大口市平出水、格木水流 (くぬぎする)

45. 垂水市格原 (くぬぎ)

B. 「くのき」と読む地名例

1. 鹿児島市伊敷、格木迫 (くのき)

2. 祇答院町藺牟田、格木田 (くのき)

3. " 藺牟田、格塚 (くのき)

4. 薩摩町求名、尾格ノ木 (くのき)

5. 吹上町与食、格木迫 (くのき)

6. " 和田、御木格木 (まごき)

7. 大崎町永吉、格木段 (くのきだん)

C. 「くき」「くぎ」その他の地名例

1. 川内市麦之浦、格平 (くねひら)

2. 蒲生町米丸、格木宇都 (くぎうと)

3. 東町川床、格之木 (くぎ)

4. 豪尾野町大久保、格迫 (くぎ)

5. 川辺町平山、大格 (だいぐ)

6. 薩摩町中津川、格元 (くぎ)

7. 宮之城町格野 (くぎ)

8. 平川、格木ノ迫 (くぎ)

9. " 舟木、格元 (くぎ)

10. " 舟木、格崎 (くぎ)

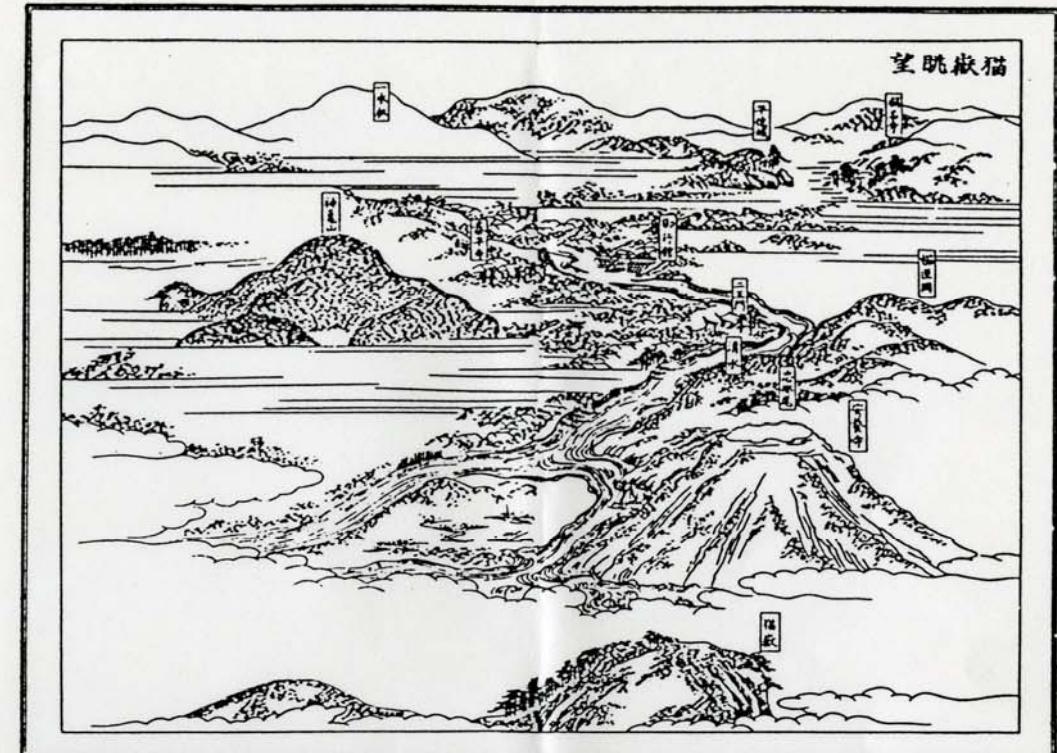
11. " 虎居、格木ノ段 (くぎ)

12. " 屋地、格脇 (くぎ)

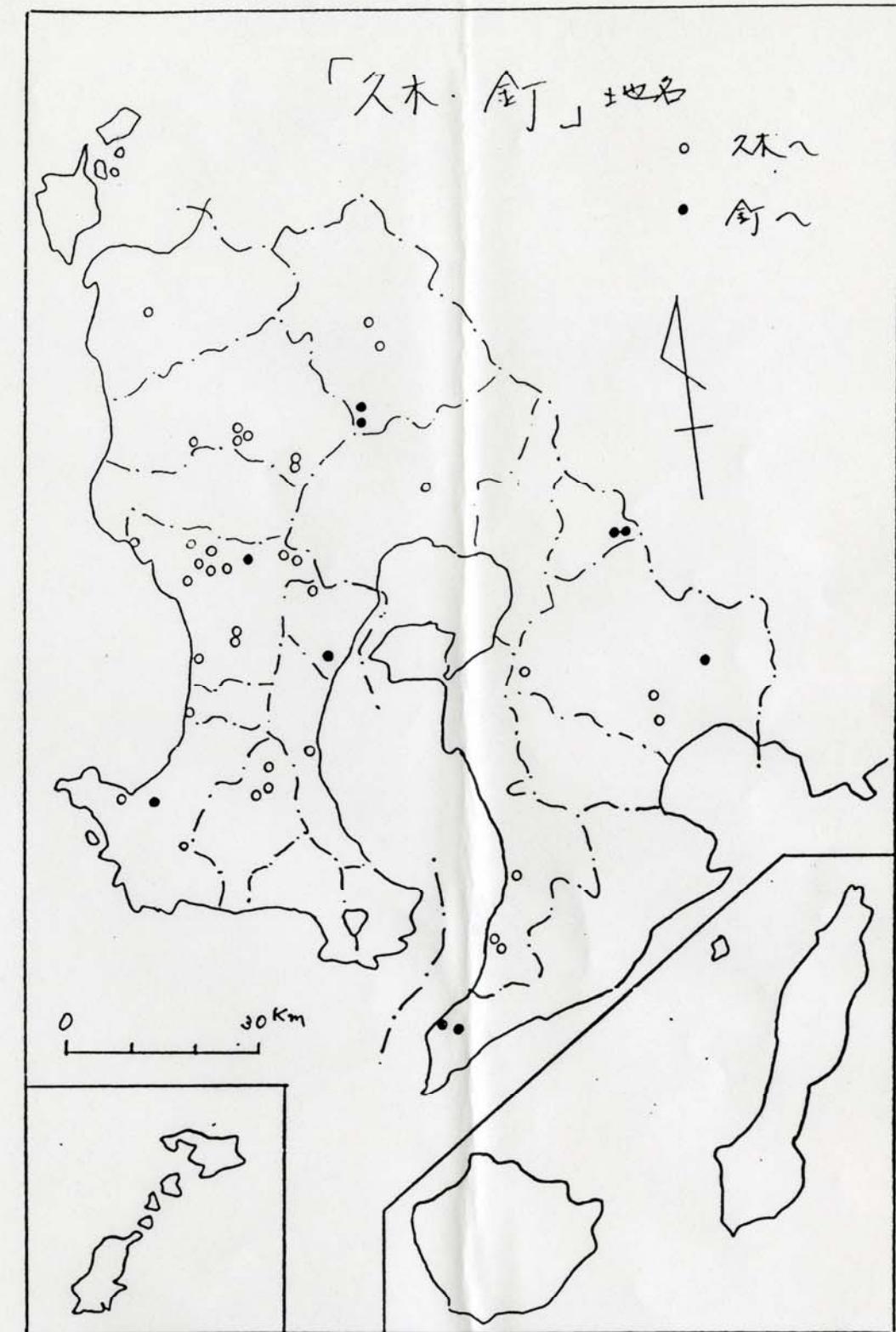
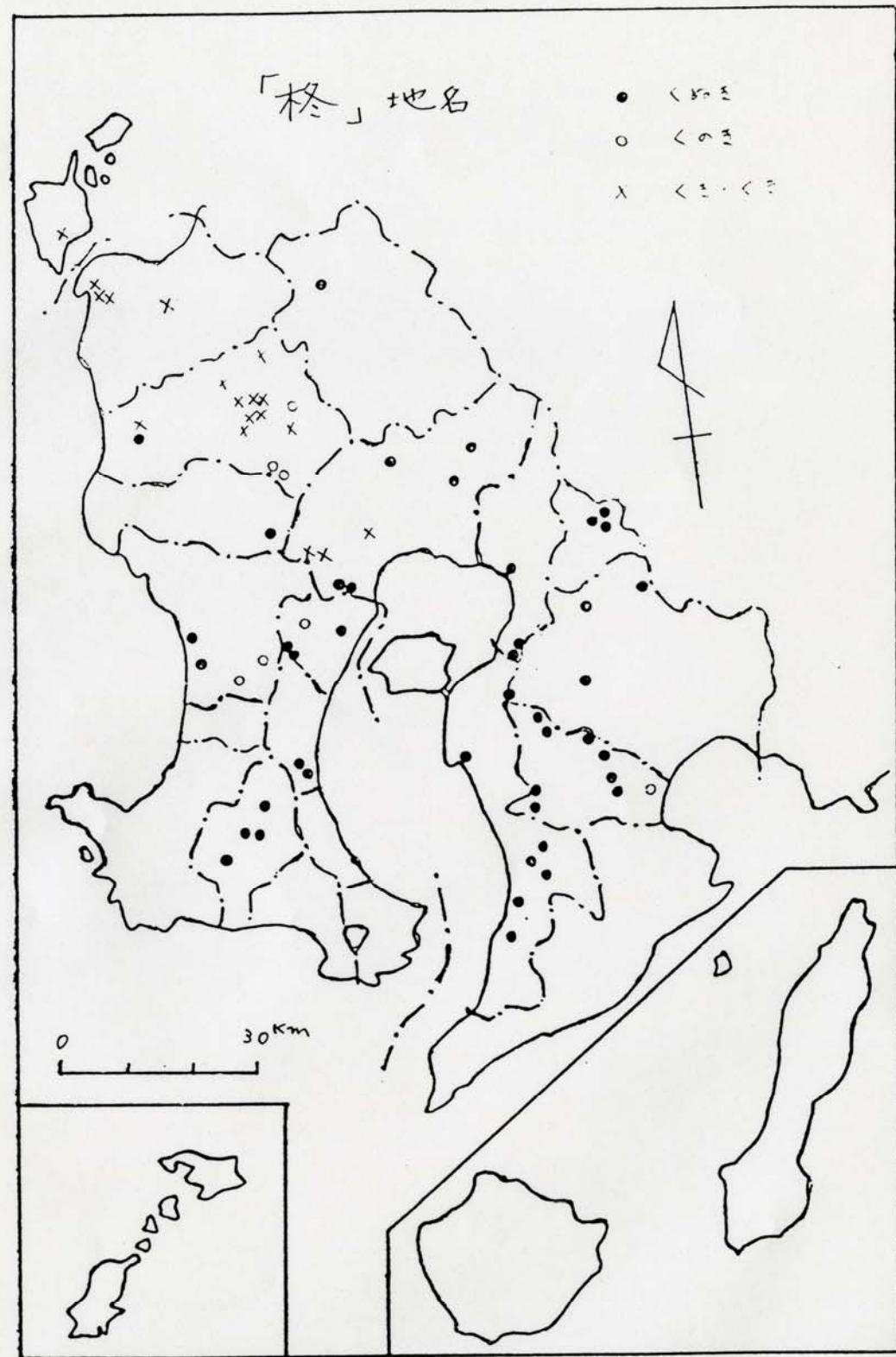
13. " 屋地、格崎 (くぎ)

14. 宮之城町屋地、格元（くきど）
 15. 吉田町西佐多浦、火打格木（ひうちき）
 16. " 西佐多浦、格字都（くきうと）
 17. 阿久根市脇本、格ノ中（くつのなか）
 18. 阿久根市脇本、格ノ中岡（くつのなかおか）
 19. " 脇本、中格（なかくつ）
 20. " 脇本、下格（しもくつ）
 21. 鹿児島市小野、格ヶ元（たがもと）

表1. 「双モ」地名が見られた地域			
県名	双モ地名	県名	双モ地名
北海道		滋賀	
青森		京都	
宮城	6	大阪	
岩手	1	兵庫	1
秋田		奈良	
山形	2	和歌山	
福島	2	鳥取	1
茨城	2	島根	
栃木	3	岡山	
群馬		広島	
埼玉	2	山口	
千葉		島德	
東京	1	香川	
神奈川		愛媛	
新潟		高知	
富山	1	福岡	
石川	3	佐賀	
福井	4	長崎	
山梨	2	熊本	
長野	3	大分	
岐阜		宮崎	
静岡		鹿児島	
愛知		沖縄	
三重			



三国名勝圖会 卷十一



9	8	⑦	⑥	5	④	③	2	①
終	終	久	久	煙	懈	櫟	倒	門
野	原	生	木	原	日	木	。	。
鹿	児	島	県	垂	水	市	終	野
鹿	児	島	県	薩	摩	郡	宮	之
鹿	児	島	県	薩	摩	郡	宮	城
鹿	児	島	県	薩	摩	郡	宮	町
鹿	児	島	県	薩	摩	郡	宮	終
鹿	児	島	県	薩	摩	郡	宮	野

十ノ木 山形県飽海郡松山町大字山寺十ノ木
だ。だが、すさんも現存する。へ親はなくとも子はそ
だつゝ。この文字を学べば木心がわかる」

次にクヌギについて考えてみよう。クヌギは、ク
ネキ・クノキ・クノギ・クニキ・クヌキ・クキ・ヒ
サギなどとさまざまに呼ばれていた。大昔、漢字が
導入されたとき、祖先はこれに漢字を当てた。する
と、大変化がおこって、漢字がクヌギと呼ばれてい
た植物を拘束してしまった。そのためクヌギの本質
を十分に表現できない。そこで国字を当てて、補充
した。クヌギ一つでも日本の木の歴史が分かる。
地名を一つずつ先にあげておく。

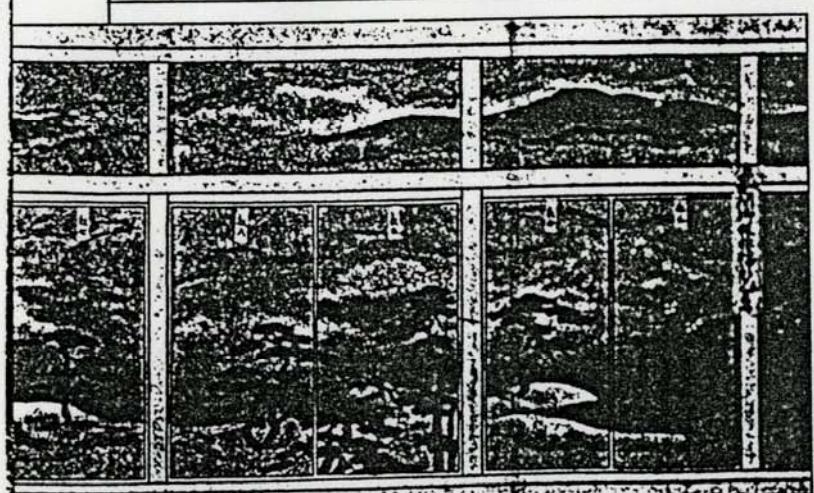
「文字の話ではなく木、樹木の地名の話なんだけど……」
「でも、十の地名があるから話している。ここは土地は下枝を刈つて薪にする前に言つたね。そうした林で、十と呼んでいたものが、間違いやすいので、いまでは八つの木と下に木をわざわざつけている。ところがダ、後世の人は、十も十に書いてしまい、トウとかシユウとか呼ぶようになった。地名を挙げてみると、

要するに、以上あげた地名はなんらかの形で姓に投影している。

次にクヌギの実態を述べる。

クヌギまたはクキなどは和語で、たぶん昔はタキギ用の雜木を指していたものと思う。クヌギ原、クキ野はそうした原野で、木を伐採して燃料にした。なぜクキ、またはクノキなどと呼ぶかは不明だが、「く」の字に折つて、燃やすからかもしれない。「く」の字に折るだけで、建築用材にならぬ雜木だからかもしだれぬ。それで、のちに漢字の久木にあてて少しかがつた。また「松」にもした。とくに冬に用いるから「松」の字にもした。しかし、「ね（垣）」にもなるし、かんたんな門にもなるので「門」にも当たった。「櫛」はカシワではなく木を切つて解体するから櫛を当てる。久木も苦木に通じるから、「櫻」にしたり「久喜」にした。「櫻」は、焼の木の意味に転用したものと思う。

以上は、わたしの想像だが、まつたく根拠のないことではない。わたしの生家の裏が雜木林で、子どもの頃から、みなわたしの経験したことである。隣



クヌギは特定の植物ではない！
発音も、表記も文字もさまざまに変化して、千年
以上もづき、地名や人名にもなってきたのである
だから、植物学者や漢字学者が學問的に説明でき
ない世界もある、ということを知つて頂ければよい
「いや、これらの文字は、いい加減に考えて、でき
たのかね？」
「昔の人が、みんな文字を書けると思つては大まち
がいだよ。第一、「樹」なんて字は漢字にないよ。日

丹羽基 =

日本姓氏大辞典（角川）

(クニモ～クノリ) 275

留めます。

キウト) ▷青田町、栃木県、都

(イチノキ) ▽薩摩町、櫟ケ

に終原の言ひ方にいたる疑問

植物の分類 では別の木

アトロシの植物。漢方で書物に
ある画数が多く薬木といつて
いる。漢方の用いられる種、ハーブ

本州の慣用か

アトム）△大黒屋、新長嶺（クニヒロヤ）、新木（クニキ）△
スギヤン）新木（クニキ）△

難かしい」と、精神科専門の本業の
の精神科医として、翻訳した。

前回は十日後、
本日は二回目。

△兼用畠、茶木戸(タヌキド)。アヘン。
△アヘン。

用があるじよ。かくして
せむ。ゆる、お風呂の水を
使ひ。煙草、田舎がだなからあ
せんでしたが、餘裕斯うじて
男を調べておつたのである
のがこじつけた。

（指宿郡開闢町）

南日本新聞(一八、二六、朝刊)

二三

同じ木かクヌギとヒイラギ

教員 白坂 肇(三)

クヌギとヒイラギとは同じ木でしょうか。実は先日福島県にいたときに、垂水市の桜原という所を通りました。何と続いたるかと思つていていたところ、「くぬぎは」と読み聞こえてしまいました。たつて桜(ヒイラギ)はモクセイ科の植物であり桜(クヌギ)はブナ科の植物ですから。

クヌギという漢字は新旧あわせて九つあります。しかし桜と桜ものはありません。同様に桜にはクヌギという読みかたはありません。

日本新聞社発行の鹿児島大百科辞典ど、あるさて鹿児島万能地図にはくぬぎさる、角川書店発行の日本本地名大辞典(鹿児島)にはくぬぎさると

書いてあります。どうしてヒイラギという字をクヌギと読むのかは聞いてあります。南日本新聞くらしの京シリーズ636かこしま地名ものがたりに「地名は日本語で使われる言葉が定着したものであり、方言が使われる場合が多いので、当て字が多く」とあります。反に当て字だとしてもまったく違う字ですし、音の変化にしてはあまりにも、かけ離れ過ぎている気がします。それとも昔の鹿児島では、ヒイラギとクヌギとは同じと考えていたのでしょうか。もしかしたら、昔の人達の單なる漢字間違いでしょう。このあたりの事情をうかじのかたは教えて下さい。

桜原小学校の皆さん、桜はヒイラギと読みますからね。氣をつけて下さいね。

ふるさとの地
名に誇り持つ
終原小校長

九月四日(月)全校朝会で
のひのは掲げてある人が終原
のじぶん書いていました。皆
みんなが関係があるのでお話を
しましました。それは、終原
の終の字はクスギと読みます、
みんなです。なぜそんな読み
まない字をクヌギという読み
にしたのか分からぬといつ
いじびりました。終原の終という
字はヒイラギと読むのだから
い、終原小学校の音や氣を
つかべたださうとも書じて
おこなった。

始終長い間せりに述べて
いる人たちは呼び慣れた風の
名です。漢字の読み方に無い
かのそれは間違いたどり、
とにかくなりません。終原の人
たちは自分の郷土をそんない
ふうにてきたのですからそれ
かにヒイラギと読みます。あ

ト幹葉(も)ト
八月一十八日付南日本新聞
の校長講話の概要です。

九月四日(月)全校朝会で
のひのは掲げてある人が終原
のじぶん書いていました。皆
みんなが関係があるのでお話を
しましました。それは、終原
の終の字はクスギと読みます、
みんなです。なぜそんな読み
まない字をクヌギという読み
にしたのか分からぬといつ
いじびりました。終原の終という
字はヒイラギと読むのだから
い、終原小学校の音や氣を
つかべたださうとも書じて
おこなったのです。しかし、
おこなっても私たちの終原で
す。この終原じぶんの地名は
れかのむすびと統べのです。
私たちのむすびのこころむすびと
の名前です。この終原をいつ
までも大切にして、自慢である
郷土にしまします。

卷之三

•

(樹木大図説 上原敬ニ著)

ひひらぎ

Osmanthus ilicifolius Mouill. (O. Aquifolium Benth. et Hook. f., var. ilicifolius Nichols. Olea ilicifolia Hassk., O. Aquifolium Sieb. ex S. et Z., Ilex Aquifolium Thunb.)

False Holly; Stechpalmblättrige Duftblüte; Houx

ヒラギ、ヒイラ、ヒヒラギ、オニノメツキ、ヒイラギ、ヒューラギ、ヒヒラギ、オニシバ、オニノメツキ、オニヒヒラギ、ネズサシ、ネズミサシ、バラ、メツキバライ、ハナツキ、オニサン、オトコヒヒラギ、オニオドシ、拘骨、狗骨、格、疹木、杠谷樹、黃芩、櫟、剛毅樹、衛矛、巴戟天、猫頭刺、猫兒、猫兒刺、鳥不立樹、十大功劳、櫻木

総説 危険の樹として門口に枝葉を挿し、また門口に対植するので知られている。土佐日記十二月二十九日の条に「今日は京のみぞ思ひやらるる九重の門のしりくめ縄のいわしの頭ひひら木いかにとぞいひあへる」と、四季物語に「いわしのはさみ物格の鋒はなやらふ家には百敷ならでもある事なれども殊に内裡には掃部司例として仕う奉れりこのなやらふ事は唐土にも侍れど別きて我御國には神武天皇の六年の春よりもし給ふ事にてみじき御例なり」とある。

節分は立春の一日前で七百年前までは節分にはばらを用いたのであるがいつかいわしに代へられた、いわしの頭を挿すことは日次紀事に見られる、土佐日記にも記す通りであるが、その一本にはイワシと呼ばずナヨシと称している。也有の鬼伝にはイワシとヒヒラギの責道具の記事があり、それに「一枝の梅はそへずや格うり」「格さざぬ内をさかりや寒夜仮」の二句を添へてある。羅山文集には「民間の除夜今に至りて存する所のもの、杠谷樹を門戸壁間に挿す、此園に所謂比々良木これなり、其葉に棘角あり、棘刺の如し、けだし邪鬼をふせぐなり、又いり豆屋内にまき」と記す、遠江地方では門口はもちろん、表裏の外柱、大黒柱、壁間にまでヒヒラギを挿す、門前には竹籠の中に入ヒヒラギ、グミ、トベラの三種の枝を入れ、これを倒に長い竹竿の先につるし当夜危険に用ふるまき豆はこの三種の枝をやいていり豆に作る。土佐日記の元日の条に今日は京のみぞおもひやらるる、九重の門のしりくめ縄、なよしの頭、ひひら木ら、いかにとぞいひあへるとあり、当時はイワシでなくボラの頭を使つたらしい。

ヒヒラギの語源は松岡静雄氏によればヒビ(男)アル(有)キ(木)の約でヒビは紋状にギザギザの形をいう、林邊臣はヘ(葉)ハリ(刺)アリ(在)キ(木)の約という。表題に書いた漢字は何れもヒヒラギには当らない。大和本草は「ひひらぎはひいらぎはひいらぎと書いては誤にて葉に刺あり、皮膚にふれて痛みひびらぐ故に以て名とするなり」とある。故に字源からいとヒラギもヒイラギも誤となる。オニノメツキも除夜の行事に基く、能狂言蓬萊島の記事に鬼が或る寒村に迷ひこみ空腹のあまり何か食物を求める賤が家をのぞきヒヒラギの葉で目をつかれたといふ話による。古事記景行天皇の条に比々羅木之八尋

矛の語が出ている、続日本紀大宝二年正月の条には比良木の文字が記されている。

東京都清瀬村日枝神社の神木はヒヒラギであり、日本武尊が東征の時この樹の根元で休まれたという、埼玉県神保原村の池上神社の神木もヒヒラギの大木で大永五年齊藤盛光の献植したものの子孫であるといふ。肥後国宇土郡松山村に蛭塚があり、百二十年前にこの辺に妖狐が出没し人をなやますので中央山妙法寺の住僧は法華經を書写して土中に埋めそこにヒヒラギを植えてから災はなくなつたといふ。

京都下賀茂比良木社は俗に格さんと呼ばれる神社だが山城名跡行志(巻六)によればこれはもと一乘寺村の西北、比良木の森にあり、民間信仰の疫神の神で願がけして病が治ると御礼として随意な樹を献植する、それがいつの間にか蛭塚を葉に生じてくる、一説に何の木でもここに植えて見て格になるか、ならぬかで、願の成就の成否を占う風習であつたといふ。下加茂神社の攝社格神社境内の樹は悉く葉に刺あり、またここに植えると刺のないものも刺を生ぜるといはれる。下京区今熊野神社境内にはいかなる形の石を置いても翌日は必ず丸い石に変つてしまふといふと好一対の山城七不思議の一つである。拘骨はヒヒラギではなくモチノキ科のヒヒラギモドキの名称である。

形態 常綠喬木、雌雄異株、高4~8m、径0.3~0.7m、樹皮は淡灰白色、枝は密生、幼時突起状の細毛あり。葉は対生、有柄(0.7~1.2cm) 楕円形、卵形、長楕円形、倒卵状楕円形、光沢ある暗緑色、厚革質、無毛、下面は帶黃緑色、若木は老木の下枝の葉は銳尖刺頭、刺状粗鋸齒あり、老樹の葉又は上方の葉は全緣刺頭である。全縁のものを var. myrtifolius Nichols. とし、刺状鋸齒のものを var. ilicifolius Bail. としたことがあるがこれは生育過程上の変形でこの学名は意味がない、地方では前者をメンヒヒラギ、後者をオンヒヒラギと呼ぶところもある。奈良公園の名木に相当の大木で全部全緣葉だけのものがある。花壇地錦抄には「格木めひらぎは葉にははりなし、男ひらぎは葉はりあり」と書いている。

何れの葉も銳脚、無毛、長3~5~(7)cm、巾2~3cm、縁下方に反捲す、葉面全体に脂点散生す、若葉は灰白色、早落性托葉あり。花は十月乃至十二月、腋出、束生、花冠は長卵形、4深裂、長4~5mm、小梗は5~12mm、白色、芳香あり。核果は雌本のみ結実し楕円体、長12~15mm、紫黒色、翌年七月成熟す、種子は狭楕円体、網状突起あり、長15mm、径9mm、樹皮、樹液を薬用とする。

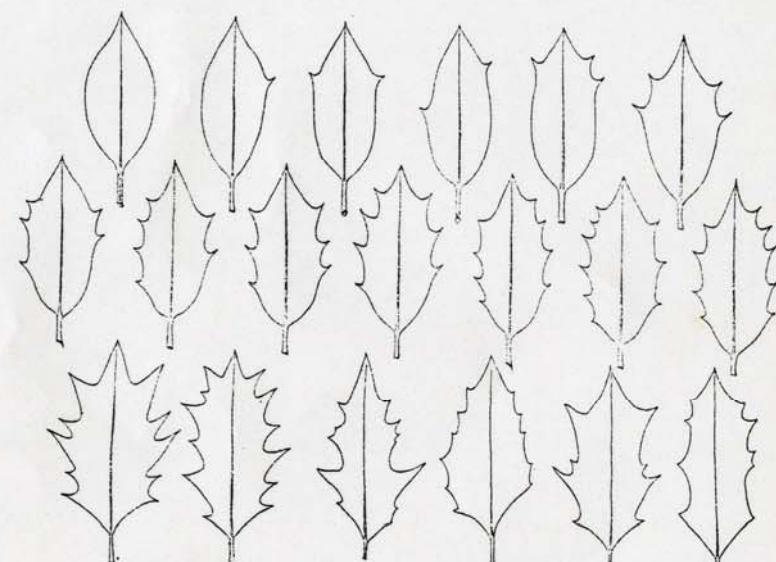
分布 本州(関東以西)四国、九州の産、台湾にも分布するといふが一説に挿天山、大武山等にあるものはタイワンモクセイであるといふ。中国にも見られる。アメリカには1856年入り、同地では



ヒヒラギの花枝と果枝



ヒヒラギの果



ヒヒラギの葉各種

植栽 庭樹としてよりも実用上の縁起木である、農家には多く入口に対植とする、この用い方はアメリカの住宅にも見られ入口の左右に整然と一对に植えられてあのを見る、ワシントン、オレゴン両州では特に庭樹として多く用いている。樹性強健、取扱は容易であり、日本でも更に多く目隠用に用いてもよいが殆ど植えられてはいない、生垣にも適である、煙草に強く、刺端が強いので都市に於てすすめない魔樹で

ある。交種は播木又は呼接とする。

前にモチノキ科の条でセイヤッヒテギのことを述べた。それとヒテギとは葉の外形は似るも差異が著しい。葉の区別点下の如し。

	ヒヒラギ	セイヤカヒヒラギ
葉 脚	銳脚又は鈍脚	鈍脚又は円脚
葉縁切込	深 し	浅 し
切込の間	稍直線	弧 状
着 生	対 生	互 生

〔大和本草〕 梅骨。本草時珍説、ヒイラギに合へり、木皮を煮て鳥も
ちにすと有之。

〔太和本草指正〕 槇骨も冬青類のへもうをとるべし。

〔本草啓蒙〕 柄青、一九十月小白花を聞く、香氣あり、後小円実を結ぶ、熟して黒色、その木は白皮にして細文ありて象牙の如し。

A black and white photograph of a small, bare tree standing in a dark, open landscape. The tree has a thin trunk and sparse branches, appearing as a white silhouette against a dark background.

セイヤッヒヒラギの葉

〔樹木和名考〕大和本草にヒヒラギをヒイラギと書するは誤なり、ヒヒラギを正とす、葉に刺ありて皮膚に触れば疼痛してひびく故にして名とするなり。ヒヒラギの木丈よりとりもちを取るべしと云ふは誤なり、モチの取れるは洋種ヒヒラギの事にして別種なり、ヒヒラギは冬青属に非ざればもちを取ることは出来ぬものなり、支那の枸骨よりもちを取るとすればヒヒラギに枸骨の漢名を充つるは誤なり。秋葉山民に同山中直徑七八寸のヒヒラギあり、材を以て算珠及独楽を製作すと云へり、伊豆天城山にては材を以て漁を作ると聞けり。

〔本草綱目〕 拘骨樹は肌白く狗の骨の如し、函板に為し、盆器に旋するに甚だ佳なり、其葉に五刺の
り、猫の形の如し（註、猫之形とありこの之の字は疑ふらくは爪の字と作すべし）故に猫兒刺と名つく、
木にアブあり葉中にありて之を巻きて子の如くにし羽化してアブとなる、又曰ふ其樹女貞の如く肌理甚だ
白く其葉長さ二三寸、青翠にして厚硬五刺角あり、四時凋せず、五月細白花を開き実を結ぶこと女貞の如
し九月熟する時緋紅色皮薄く味甘し其皮に四弁あり、人其木皮を采り煎膏して以て鳥雀を粘す之を粘餽と
謂ふ。

〔和漢三才図会〕按するに拘骨強肌白滑にして堅く以て算珠或は象嵌著子に為すに堪ふ。苦た美にして
黄檜に匹ぐ。其の大なるは板に作り盒に旋すべし然れども性長じ難く大木は希なり、統日本紀に文武帝大
宝二年杠谷樹を貢す。長さ八尋云々是等は以て希有の物となす。其葉四時滿まず、厚硬五稜あり刺の如し
刺に雌雄あり貴刺柔なるは雌となす。九月小花を開き碎白色子を結ぶ小青色五月熟すると黒色、鼠李女貞
の輩に似て大きさ小蓮子の如し。俗間立春節分の夜枝葉を門窓に挿し添ふるに海鷺の頭を以てし、追儻の用
を為す。細語其の尖刺を怖れて敢て近くべからざるの義か。

■クキ(茎・久木)

(一) 「岩波古語辞典」の「くき」項によれば、

① くき(茎・洞)

④ 山の洞穴(ほらあな)のあるといふ。山

の穴。

⑤ 峰、山のいただき。

② くき(茎)〈古形クク(茎)の転〉

植物の幹の部分。

③ く・き(漏き)隙間をくぐる。

クキ地形の山は、崩壊地形が多い。

(二) クキ地形の山は、自然堤防が多く、クグという地名もある。古形ククの地名か。

四 洞穴は鉱山の場合にみられ、大久喜鉱山というがある。

五 崩壊型地形の地名は、クギヌキ(釘貫)であつたり、クツヌギ(靴拔・ただしこれは隣村ではクキヌケといつていた)であるなど、変訛しているものが多く、現地では「〇〇年の大災害のときに山が抜けましてなア」という返事が多い。

六 大正八年(一九一九)に起つたクツヌギの山抜けなどはいまでも歴然として山の凹みがわかれ、過去二回ほどの山抜けなどもよく地形が示している。

七 山潮(山津波)が百年周期ぐらいであつたワマバの山地形も過去のすさまじきをいまにとどめている。

八 山津波(土石流・山潮)の巨土砂礫の到達距離はその土地で大体わかつていて、いまは平和な荒野の堆積地であつても、決して、宅地造成とか、住宅を構えてはならない。一度山津波の起つた山のほとんどは、二度、三度と山津波を繰り返しているのが普通である。

九 したがつて、山津波の土石が堆積しているところは、二度、三度の山津波の通過地とみてはなさしつかえない。

これがヒイラギになるといわれている。
葉に刺があるため、ヒイラギの名のつく植物にヒイラギモクセイと、ヒイラギナシテンがある。前者はヒイラギとギンモクセイの雑種といわれ、生垣によく用いられ、後者はメギ科のナシテンの仲間で、庭木や花材に使われる。またクリスマスの装飾になくてはならぬセイヨウヒイラギは、別名をヒイラギモチともい、モチノキ科の樹木である。

(植物和名の語源 深津 正)

(六) クキ地名の崩壊地のほとんどは、地鎮神が祭祀してあり、「山津波除けの祈願がされているようである。

(七) 「和名抄」の地名のなかに、

長門国厚狭郡久喜郷。がある。

現在のクキ

埼玉県久喜市(自然堤防上に発展した都市)

その他関東地方に多い地名で、全国に分布している。

(八) 平坦部しかも河川沿いのクキ地名は、流水客土地であり、自然堤防の形成された地形であるが、新しく治水安全度を考えた堤防、護岸などの施設がほしいところで無防備の土地では、河水による浸食、河のよみがえりなど、水害に悩まされる土地である。

クグハラ(芥原)地名は、うちにクグモルのクグでもあるうか、降水の自然排水が自然堤防によって阻止されて内水被害が内にこもる意味に受けとれる。

(九) 地名例
大久喜、久喜、久木、玖木、釘貫、靴拔、九鬼、九騎など。

ヒイラギ

モクセイの花が咲き終わり、秋もようやく深まる頃、同じ仲間(モクセイ属)のヒイラギの白い小花が、澄んだ芳香を漂わせはじめる。モクセイの官能的ともいえる華やいだ香りに比べて、ヒイラギの花の香りには、人の心を沈静に導く一種独特な魅力が秘められている。

ヒイラギに「鬼の目突き」という異名があるように、ヒイラギの鋭い刺のある葉が鬼の目を突いて、これを寄せつけないと信ぜられ、そのため節分に、ヒイラギの枝にイワシの頭を挿したもので門口に立て、悪鬼を払うまじないとした。江戸時代の川柳に、「門にさす栓は年の境杭」のあるのは、そのためである。

ただし、古い時代にはイワシではなく、「なよし」(ボラまたはイナの異名)の頭を押したるものらしく、「土佐日記」にも、元日の湊の泊りに、都の家々の門の注連縄に結んだ「なよ

し」の頭や、ヒイラギのことを懷かしむ一節がある。

また「古事記」に、倭建命の東征に当たって、天皇が「比比羅木の八尋の矛」を賜つたという記事がみえ、ヒイラギの名は古代からあつたものとみえる。

ヒイラギの語源は、「疹木」つまり疹ぐ木の詰まつたものといわれる。疹ぐはヒリヒリと痛む意味で、葉の刺に触ると痛いからである。また俗にヒイラギに栓の漢字を当てるが、これは、この木が冬季に花を咲かせるからだといふ。

ヒイラギは、木の生長につれ、葉の刺がなくなり、丸味を帯びてくるが、京都下賀茂神社の境内のヒイラギの葉には、すべて刺があるといふ。この神社は、昔から疱瘡の神様として信仰を集め、願いがかなうと、お札に木を植える習わしになつており、どんな木を植えても、全部

- (12) 武藏府局太郎久音町
能登郡島郡西島村大字久木
美作久米郡吉岡村大字久木
肥後阿蘇郡久太野村
大隅贈豊前西志布志村大字久木

右等のはか、諸国的小字に存する無数のクキは、ことごとく燃料採取地を意味する地名である。大阪の新聞の三面記事におりおり現われてくる柴島幹繁公爵、あの柴島は今でモクニシマとよむのである。西成郡西中島村大字柴島。駿河府郡御崎町岡は今の大障壁のことで、古くは『日本紀略』の大慶二年の記事にも見えている。文字から見れば別の意味かとも思われるけれども、地形が岬ではないのみならず、『源平盛衰記』卷十三、清風閣の条には、同崎とも書いてある。『伝名抄』の郷名には駿河富士郡久玉郷がある。また備後の御崎郡、島防の秋田郡、筑前の柳原郡とともに岸原郡がある。後の二つは明らかにカハラとよんでいる。作の字は『源平盛衰記』には「櫻なり」とあり、草を除くを茎と曰ひ、木を除くを桺と曰ふ」とあるけれども、調はナラの木、またはシイである。櫻は同書によれば櫻と同じで、マロクスキである。これは専門の漢文学者をわずらわすべく開拓であるが、何でも今日われわれがへんとよむ作の字、トチとえいれの字、作の字、桺の字、クスキとよむ櫻の字、時としては、イチイとよむ櫻の字などは、すべてその本義は一定の關係のではなくて、柴、薪などと同じく燃料ということであつたらしい。

『日本紀』には人木本の歴史が数か所ある。古訓ではこれをクスギとよんでいる。ちょっと反対の説めのようと思われるけれども、その木が今日のクスギであつたか否かは解説である。『保名

世には尚書をクスキとよみ、また常樹をモクスキとよんでゐる。中学生でなく「後名抄」や「字鏡」は、單に古代語の存在を証するのみで、漢語の知識は今日のほうが進んでゐるから、かれをもつて信確なる漢和字典を見るることはできぬ。作をツバキとよみ、樹をクスノキとよみ（後名抄）、ハシノに樹の字をあて、ナラの木に樹の字をあつたがことき（字鏡）みな事物を見ぬ人の筆に當ててあらう。しかしこの古歌の船風の中にも、クキといい、ククといふ、必ずしも一種の樹の名でなかつことは想像することができる。このクはいわゆる「木祖句句通駆、草祖句句通駆」の如きで、つまりはキという語と同風であつたのを、船詩にはキといい、舟詩のカクというように分化したのか、ないしはまだ別に語原があるのか。船をカドという方言は今日でも各地に残つてゐる。

内輪八頭郡佐野大字横原、常陸久慈郡金郷大字糸井小字横崎などは、「佐行作」と同じ字を用いている。また常陸の多賀郡高岡大字中川には人種という小字がある。これらはまれなる例で他の多くは久木と書いてタノキと呼び、また社田木あるいは柄と書いている。因防郡御須町方村大字須々方萬古小字田木崎、清江郡御郷字村大字字列丸小字田木谷、常陸名賀郡向日村大字成次小字岡木派などはその例である。文人山本興邦君は攝州富野の藩士であった。この家は漢路で豊後氏に取り立てられた武家である。郷里にはいわゆる名字の地があり、同族はみな岡田と書くそうである。行字のついでに書いたいのは耳の御医者の小山木さん、あの人はたしか二木伝の藩士であるが、木とはほん下野佐波郡高岡大字小此木から出た家であろう。聲と書いてヨノギとよれるのが不思議なため、二つに分けてやつと四聲をつけたのである。

(植木大圖說 上原敬著)

ヒイラギ

金針花

枝の葉形である刺は細鏡
葉は針状

なきぎ うちの科 まき属
つぶらじい ぶな科 くびら属
ひいらぎ もくせい科 ひせ属

73

みづなう……ふな科 こなう属
くぬぎ……
あべきき……
とちのき科 とちのき属

卷之三

いちみ いちみ科 いちみ属
いちな いちな科 いちな属
いちひが いちひが科 いちひが属
ひとつみ ひとつみ科 ひとつみ属
ひひらぎ ひひらぎ科 ひひらぎ属

二四